
辻堂魁
Tsujido Kai
風の市兵衛
風立ちぬ
下
長編時代小説 書下ろし
祥伝社文庫

書下ろし

風立ちぬ(下)

風の市兵衛⑦

辻堂 魁

祥伝社文庫

書下ろし

風立ちぬ(下)

風の市兵衛⑦

辻堂 魁



祥伝社文庫

目次

第六章　歳月　7
第七章　神隠し　54
第八章　粟焼（あわやき）　110
第九章　上州沼田（じょうしゅうぬまた）　164
第十章　十三夜　202
終章　無性（むしょう）の生　260


吉原
浅草寺
浅草
向島
神田川
蔵前
吾妻橋
（大川橋）
横川
筋違橋御門
市兵衛の長屋
（雉子町）
口入れ屋「宰領屋」
（三河町）
本両替商
「佐賀屋」（本両替町）
小料理屋
「薄墨」（鎌倉河岸）
金座屋敷（本町）
本所
両国橋
千鳥橋
竪川
大川
新大橋
小名木川
二ツ橋御門
神田橋御門
常盤橋御門
室町
日本橋川
日本橋
楓川
「三四の番屋」
（本材木町）
永代橋
深川
一膳飯屋「喜楽亭」
（深川油堀）
北町奉行所
南町奉行所
柳井宗秀の診療所（柳町）
北
東
西
南

『風立ちぬ』の舞台



中山道
小日向
戸川
江戸
「菱川」(揚場町)
貸船屋
牛込
早稲田
高田
神田上水
牛天神
小石川
御門
小石川
牛込御門
飯田町
市ヶ谷
御門
光成館
(番町)
四谷
麹町
半蔵御門
江戸坂
片岡家屋敷
(諏訪坂)
芝
増上寺
三田
品川

第六章　歳月

一

日本橋川から楓川沿いに南へ新場橋をすぎ、本材木町三丁目から四丁目の通りにかけて材木置場や土手蔵の並ぶ一画に、町奉行所の大番屋、通称《三四の番屋》が楓川に面していた。

大番屋とは、町方や町役人が捕まえた科人を、小伝馬町の牢屋敷へ収監するまでに留置しておく仮牢である。

牢屋敷に収監するには、奉行所公用人の交付する入牢証文が要った。

大番屋で町方が取り調べを行い、罪科が動かぬとなると入牢証文を請求する。

請求のあった入牢証文を公用人が作り、詮議役がそれを承認した後、交付される。

取り調べに日数がかかれば、大番屋の留置も長引くのである。
三日目の朝、三四の番屋の鞘土間で張番が牢の鍵を、がちゃがちゃと鳴らした。
清蔵は、横になるのが精一杯の狭い板床の、三寸（約九センチ）角の赤松材が三寸間隔に閉ざす牢に、ひとりで収容されていた。
張番が戸を開け、
「清蔵、出ろ」
と、床板に端座している清蔵に言った。
腫れは引いたが、暴行を受けた目の下の痕は紫色に残ったままだった。
よろけまいと懸命に立って牢を出ると、張番所に昨日までとは違う黒羽織の町方がいて、渋い顔付きで清蔵を見つめていた。
町方の後ろに背の高い若い手先が立っていた。
震えが清蔵の背中に走った。
「いったいった」
張番に背中を押され、鞘土間から張番所へ抜けた清蔵に、渋顔の同心が言った。
「音羽町九丁目《大清楼》主人・清蔵だな」
「はい。さようでございます」

清蔵はいよいよ小伝馬町の牢屋敷かと思った。
「解き放ちだ。いきな。外で女房と倅が待っているぜ」
痩せた中背の背中を丸め両袖に手を仕舞った町方が、どうでもよさそうに言った。
「あいよ。お勤めご苦労さん」
と、背の高い手先が存外愛嬌のある笑顔になって、張番所の腰高障子をがらりと開け放った。
表の大番屋の木戸に、女房の稲と倅の藤蔵、そして高い背をすっと佇ませている唐木市兵衛が見えた。
稲と藤蔵が一生懸命こちらを見ている。
市兵衛の笑顔が、朝の青い光の下ですがすがしかった。
たった三日、離れていただけなのに、清蔵は堪らなく懐かしくて涙があふれるのを抑えられなかった。
「こんな目に遭わされる謂れはねえと思っているだろうが、まあ、お上の顔ってえものがあってよ。奉行所をあんまり恨むなよな」
震える清蔵の肩を、ぽんぽん、と叩いた渋顔の町方の、意外にも情のこもった言葉に清蔵は、思わず「うう……」と声を詰まらせた。

外は朝の光がまぶしかった。

「お父っつあん」

「あなた」

藤蔵が腰にすがり付き、稲のよく肥えた身体が肩に伸しかかった。

清蔵は稲と藤蔵を抱き留めるために、弱った足を踏ん張らなければならなかった。

三人はそこで、通りかかりの目もはばからず抱き合って泣き声を上げた。

「ご主人、身体の具合はいかがですか」

三人がひと泣きしてから市兵衛が近付き、清蔵に声をかけた。

清蔵は繰りかえし頷き、

「先生、お気遣い、ありがとうございます。身体の方はどうにか。根が丈夫なもので。ご心配おかけいたしました」

と、涙を堪えてようやく答えた。

「あなた、先生のお陰なんですよ。先生が手を打ってくださって」

「え？　先生が。そうなのかい。ああ、ありがたいことで……」

腰を折ろうとする清蔵を、市兵衛は止めた。

「礼には及びません。当たり前のことをしたまでです」

「おう、市兵衛。これでまたおめえにひとつ、貸しができたな」
町方と手先が出てきた。
「渋井さん、感謝します。お礼は必ず」
「とかなんとか言って、《喜楽亭》の安酒じゃあだめだぞ」
「では、先生がこちらのお役人さまにお話しいただいたので」
清蔵が渋井と市兵衛を見廻した。
「北御番所定町廻り方の渋井さんです。口の利き方は無愛想ですが、わたしもいろいろ世話になっております」
渋井は照れ臭さを悪ぶった顔に隠して、知らぬふうを装った。
「ああ、やはり。僭越な申しようではございますが、お見どころのある先生とは思っておりましたが……」
「ただの浪人者です」
「とんでもございません。渋井さまには、わたくしの方からお礼を、必ずさせていただきます」
「礼なんぞいいんだ。おれと市兵衛はこんなふうに適当に言い合っているだけなんだから、気にするこたあねえのさ」

「いえいえ。わたくしがお礼をさせていただきたいのでございます」
「ともかく、今日は戻りましょう。新場橋の河岸場に船を待たせてあります。江戸川橋までそれでまいりましょう。これからのことのほかに、ひとつお訊きしたいこともありますので、わたしもお供します」
稲が清蔵の肩へ、家から持ってきた羽織をかけた。
「あなた、戻るまでこれを羽織って」
清蔵は羽織の袖に手を通しつつ、
「どうか先生、わたしども家族四人に、お力添えをお願いいたします」
と言って、あ？　と稲と藤蔵を見た。
「お歌は家かい。家の片付けをしているのかい」
「それがね、あなた……」
稲が言葉に詰まり、新たな涙をこぼした。
「なんだい。お歌が怪我でもしたのかい」
藤蔵も歌のことを思い出してか、べそをかきそうな顔付きになり、鼻梁の眼鏡を指先で押し上げた。
「お訊きしたいのはお歌さんのことなのです。まずはまいりましょう」

市兵衛は清蔵らを促した。
「市兵衛、おれたちはこれから喜楽亭へいく。新場橋まで一緒にいこう」
市兵衛と渋井は土手蔵の前に小屋がけの小道具店が並ぶ通りを、清蔵夫婦と藤蔵らの後に続いた。助弥は渋井の後ろに控えている。
「喜楽亭のおやじさんの話を、訊きにいくのですね」
「気が重いぜ。けど、訊かねえわけにもいくめえし。これも役目だ」
「いろんなことが、一度に起こった夜でしたね」
「火付け騒ぎの火事に本両替町の《佐賀屋》の押しこみ、大勢の手代らが殺され、一万四千両はくだらねえ金が盗まれた。店の者らを蔵の中に閉じこめ、中に火を付けやがった。番頭やら手代やら合わせて十四人。斬り刻まれた者が八人。煙に巻かれて息ができず悶え苦しんだ挙句、と思える者が六人。目も当てられねえ惨状だった。とんでもねえ押しこみだぜ」
「佐賀屋の主人は見つかったのですか」
「いやまだだ。逃走用の人質にされたんだろうが、今ごろどこにいるのやら。せめて命だけでも無事だといいが。それから、十年ぶりに戻ってきやがった喜楽亭の倅の勘平が殺された。一体、何があったのやらさっぱりだ」

「家出をしていたとは言え、十年ぶりに戻ってきた倅がそんなことになって、喜楽亭のおやじさんは辛いでしょうね」

ううむ、と渋井は頷いた。

八月晦日の夜の火付けと思われる火事騒ぎは、本町と本両替町の裏店を中心に被害を出したが、幸い両町以外には広がらなかった。

火の手より逃げる際、怪我を負った住人は大勢いた。ただそれも、幸いなことに死人は出なかった。

ところが、その火事騒ぎの中で本両替商・佐賀屋押しこみが起こった。

店の者十四名が惨殺され、主人・佐賀屋介右衛門は行方不明、店の金一万四千両余りが強奪されるという、強引で容赦ない町方が唖然とするほどの手口だった。

のみならず渋井は、火事騒ぎの周辺町地の警戒と見廻りに当たっていたさ中、本石町の小路で倒れている人足風体の男を見付けた。

男は頭蓋を割られ、ほぼ絶命に近い有りさまだった。

男は渋井の腕の中で息絶えた。それがひと月前、渋井がいき合わせた喜楽亭で、亭主と喧嘩をしていた倅の勘平だった。

勘平の死は助弥に喜楽亭へ知らせにいかせ、ひと通り調べた亡骸の引き取りからそ

の後のことまで、助弥に亭主を手伝ってやるようにと指図した。
南北両町奉行所町方は佐賀屋押しこみの探索に、この二日、昼も夜もなく、渋井も同様だった。
そのうえ渋井は市兵衛に頼まれ、大清楼の主人・清蔵の解き放ちにも奔走した。
市兵衛に頼まれればなんとかしてやらねばならないし、音羽辺りの場末の岡場所の手入れにうつつを抜かしている北町奉行・榊原主計頭の間抜けさ加減に、頭に血が上ったこともあった。
「榊原のおっさんには、毎度毎度、苛々させられるぜ」
と、渋井は市兵衛に清蔵の解き放ちを頼まれた折り、逆に市兵衛を苛々のはけ口にした。
三日目の今日の朝になって、まずは大清楼の清蔵を大番屋から解き放ち、それから喜楽亭のおやじへ話を訊きにいくときができたのである。
「勘平という倅が押しこみの一味だったと、考えられるのですか」
市兵衛はさらに訊いた。
「わからねえ。ただな、倅が人足風体だったのが気にかかる。佐賀屋押しこみの賊はみな人足風体だった。い組の町火消が、佐賀屋の主人が人足らが引く荷車と一緒にお

濠の方へ駆けていくのと出くわしている。だが、火事騒ぎで怪しむゆとりがなかった」

「音羽の警動に町方を割いていたのが、手不足の事態を招きましたね」

「まったく、迂闊もいいとこだぜ。榊原のおっさんにすりゃあ北町だけで点を稼いだつもりが、とんだお門違いだった。面目なしってところさ。あはは……」

渋井は磊落な笑い声を本材木町の通りに響かせたが、顔付きはあまり楽しそうに見えなかった。

「音羽の警動は、どういう経緯で行われたのですか」

「吉原だけの訴えなら音羽ばかしの岡場所に手入れは入らなかったと思うぜ。聞いたところによると、音羽近辺のどこぞの旗本から、取り締まりの願いが榊原のおっさんに直々にあったそうだ。風紀が乱れて困る、子供の躾に差し障りがあるってな。おれはまったく知らなかったが」

「旗本ですか」

「うん。名前は言えねえが」

「料理茶屋を営みながら女も呼べる、そういう茶屋は音羽には大清楼のほかに何軒かあります。しかし、先夜の警動で、裏通りの局見世のほかは料理茶屋の中で大清楼だ

けが打ち壊しに遭ったのです。なぜ大清楼だけだったのでしょうか。まるで、大清楼だけが狙われたみたいでした」

「わからねえ。なんぞ裏があるのかもな。指図したのが市川って当番与力だ。なぜ大清楼だけだったか、それとなく訊いてみる」

渋井の、八文字眉を苦笑いにしかめた顔がいっそう渋面になった。

「それから今日は、吉原へいくつもりです」

市兵衛は渋井の渋面に言った。

「あの夫婦の、お歌って娘の行方だな」

渋井は前をいく清蔵らの方へ顎をしゃくった。

「吉原の男衆らは、手当たり次第に若い女を連れていったそうです。お歌さんも連れていかれたと思われます。吉原の会所の者らが渋ったら、町方の渋井さんの名前を出させていただきます。構いませんね」

「構わねえ。それでも埒があかなかったら、揚屋町の浅井柳三郎という名主に会って、おれから聞いたと言やあ相談に乗ってくれるはずだ。おれも一緒にいってやりてえが佐賀屋の一件が忙しくてな」

「事情をちゃんと話せば、間違いだったとすぐにわかるはずです」

「ほかにもっと派手にやってる岡場所は幾らもあるのによ。よりによって音羽たあ、大清楼も災難だったね。音羽は値段の割にはいい女がいると、評判だったんだ。惜しいことをしたぜ」

渋井は声を落として、市兵衛に渋面を向けた。

新場橋の袂で、清蔵と稲が間に藤蔵を挟んで、市兵衛と渋井の話が終わるのを待っていた。橋の下の河岸場には、数艘の船が舫っている。

「では渋井さん、きょうはこれで。お世話になりました」

「ああ。当面、佐賀屋の一件調べが忙しくて呑むどころじゃねえが、そのうちゆっくりやろう」

助弥、いくぜ――と、渋井が両手を袖に仕舞った黒羽織の怒り気味の肩をほぐしつつ、新場橋に雪駄を鳴らし、

「へえい」

と、背の高い助弥がひょいひょいと追いかけていく。

その背中に、親子三人が深々と腰を折った。

二

その朝、北町奉行・榊原主計頭の御用部屋に、定町廻り方、臨時廻り方、隠密廻り方、さらには当番方の平同心、また詮議役、年番方の与力らが集められ、八月晦日の火事騒ぎの中で起こった本両替商・佐賀屋押しこみ探索の評議が持たれた。

今朝で評議は三度目だが、賊の手がかりは未だつかめていなかった。

奉行の榊原は苛立っていた。

佐賀屋の押しこみ一味は、なんとしても北町の手で捕らえよ、南町に後れを取るな、と繰りかえし言った。

八月晦日の当夜、音羽の岡場所の警動に町方を出役させ、本町及び本両替町を襲った火事と、火事に乗じて本両替商・佐賀屋へ押しこんだ賊への北町の対応に手不足を招いたと、町奉行所支配の執政より指摘されていたからである。

賊は江戸城本丸、大手門につながる常盤橋御門外、江戸のど真ん中、金座屋敷のある本町と本両替町の火事騒ぎの中で、佐賀屋押しこみを働いて見せた。

しかも北町奉行所がある呉服橋とは、まさに目と鼻の間ほどしかない。

その手口は冷酷非情、しかも驚くべき大胆さと緻密さの合わさった、まさに玄人集団と断ぜられる鮮やかさだった。

執政らは、榊原主計頭を江戸城中奥の老中御用部屋へ呼び付け、

「これは賊どものご公儀への挑戦と言っても過言ではない。佐賀屋から金を強奪したのみならず、土蔵に店の者を閉じこめ、その土蔵の中に火を放つなど、まさに鬼畜のごとき仕業。必ずや賊を捕らえ、鬼畜どもに地獄の業火の苦しみを味わわせてやらねばご公儀の面目が立たん」

榊原どの、しかと頼んだぞ――と、このたびの疎漏を取り戻せとでも言わんばかりの口ぶりだった。

「ははあ。必ずやわが手で」

と勢いこんで答えた榊原は、南町に後れを取るわけにはいかなかった。

しかし、三日目になるその朝の評議でも、探索に新たな進展の報告はなかった。

これまでの調べですでにわかっていることは――

賊は本町の金座屋敷周辺、及び本両替町の本両替商・佐賀屋を囲むように五ヵ所に分かれて、真夜中九ツ（午前零時）の刻限に火を放った。

火付けには燭台や行灯用の安価な魚油が使われたらしいのが、火元の周辺に魚油

の臭いが残っていたことから推察できた。

本町と本両替町のそこかしこの路地裏に次々と火の手が上がり、夜空を染め始めると半鐘がけたたましく打ち鳴らされた。

やむを得ぬことだが、火元に近い両町と周辺の界隈より着の身着のままで逃げ出す住人が町中にあふれ、一帯は大混乱をきたした。

その混乱に乗じて佐賀屋へ押しこむのが、賊の狙いだった。

押しこんだ賊はみな人足風体で頬かむりをしていて、暗くて顔はよく見えず、しかも脇差まで腰に帯びていた。

だが、佐賀屋の蔵前にある「別店よりの手助け」と一味が大声で喚いたため、火事場の混乱のさ中、みなが呪いをかけられたみたいに賊の言葉に踊らされた。

蔵前の佐賀屋の別店では、使用人に様子を見にいかせたのみで、まったく与り知らぬことだった。

次に賊は家人と奉公人のすべてに、火の手が廻らぬうちに蔵前の別店まで逃げろ、蔵前ではみなを迎える用意がしてある、と叫び、女子供老人、小僧や手代の何人かが恐怖にかられて逃げ出すよう仕向けた。

それでも主人と頭取、番頭、奉公人の手代ら十五人が、漆喰で固め火災にも耐える

土蔵に金箱や証文証券、帳簿などを収納する作業を続けた。

そしてその先は現場を知る生き証人がいないため、後の検証によって推断するところによれば、賊は本性を露わにし逃げる手代の八名を惨殺し、残る頭取、番頭、手代六名を生きたまま土蔵に閉じこめ、魚油をまいて土蔵内に火を放った。

土蔵内は阿鼻叫喚の地獄絵だったろう。

逃げ場を失い火だるまになった者、密閉されているゆえ火勢が衰えても充満した煙に息を塞がれ悶え苦しんだと思われる者が、八体の斬殺体と一緒に火事騒ぎが治まった後の土蔵の中で見つかった。

一方賊は、銀箱銭箱をのぞいた金貨の箱、およそ一万四千両を台所衆の使う荷車に積み、主人ひとりを人質にして、火事騒ぎの表通りを堂々とお濠端へ逃走した。

い組の町火消の一団がいき合わせ、荷車を止め誰何したが、狼狽しながらも佐賀屋の主人が火事場から荷物を運んでいる旨を答え、火消らは深くは訊ねなかった。

避難民は、広がる火の手を境に両国や神田川方面へ逃げる者とお濠端へ逃げる者と二方向に分かれていた。

常盤橋御門近くの濠端は、本町と本両替町の表店より逃げてきた住人や荷車でごったがえし、人々の慌てふためく混乱の中、船に荷物を積み替えお濠伝いに船が次々

と河岸場から離れていったため、誰も佐賀屋の荷車を見咎めなかった。

佐賀屋の荷車がお濠端に捨ててあり、目撃話はないが間違いなく賊は、強奪した金箱を船に積み替え逃走したと判断できた。

また、賊の数は人足風体で現われた者が十二人、逃走用の船の番をしていた船頭、押しこみに入った後にも新たな火付けがあったことから、火付け役が一人以上、都合十四名以上と推察できた。

南北両町方の評議の結果、賊の逃走した足取りを追う分担が決められた。

北町が日本橋川を境に北側の麹町までの町地、さらに神田川江戸川筋とそれを越えたすべての町方支配地域、南町は日本橋川の南側と隅田川と隅田川以東のすべての町方支配地域、になった。

三日目になり、探索に進展のない事態に奉行の榊原は、賊の船はお濠を日本橋川以南か隅田川以東かに逃走したのではないか、手柄を南町に持っていかれるのではないか、と恐れていた。

「手の者をもっと増やし、川筋の訊きこみを徹底せよ。北町の面目にかけて、鼠一匹逃すでないぞ。ぐずぐずしてはいられぬのだ。このままでは賊は江戸から姿をくらましてしまう。そんなことは断じてさせてはならぬ」

と、榊原主計頭がその朝の評議でも煽り立てたが、地道な訊きこみを続けて一歩一歩賊の足取りを追うしか、探索の手立てはなかった。

北町奉行所定町廻り方六名、臨時廻り方六名、隠密廻り方二名、そこに平同心らも探索に加わったとしても、広大な江戸五十万町民の半分の地域を徹底した訊きこみができるわけがなかった。

同心が指図する岡っ引、岡っ引配下の下っ引、それらは手先、小者、御用聞きとも言い、みな同心が自前で率いる手の者らだった。

手先らは、盛り場や賭場や岡場所、そのほかいかがわしい宮地や芝居小屋、大道芸人、荒くれの相撲らの集まる場所に顔が利く無頼の輩と紙一重の者ばかりだった。

それらの手先が、江戸の裏町のいたるところに散らばっており、それがまた無頼の輩を互いに監視する法の網目にもなっているのであった。

毒を以て毒を制する、まさに無頼の輩こそが犯罪探索の実動部隊であった。

手の者を増やし、とは奉行所の町方をもっと動員せよというのではなく、それらのいかがわしき者らをもっと集めよ、という意味なのである。

「ご懸念には及びません。探索は順調に進んでおります。われら一同、疎漏なく手を打っており、賊の足取りをつかむのは間もなくでございましょう」

と、年番方の筆頭与力がそつなく言った。

年番方の筆頭与力が、この探索の手配りを任されていた。

奉行は年番方与力の、そつはないが目新しさもない応対に満足できないが、それ以上に奉行のできることはなかった。

町奉行は毎朝四ツ（午前十時）には登城し、御執政の指図も仰がねばならない。

「渋井、おぬしの掛は、当夜あった殺しの一件であったな。そちらの方では何か進展はなかったか。なんでもよい。申してみよ」

いきなり奉行が定町廻り方と臨時廻り方の中にまぎれ、背中を丸めている渋井の仏頂面に言った。

渋井は佐賀屋押しこみの一件の掛の中で、ひとり、八月晦日の当夜、警戒見廻りの最中に本石町の小路で見付けた若い男の撲殺体の探索にかかっていた。

男の名は勘平。十年前、深川の育ての親の家を飛び出して江戸を離れ、この七月の末近く、十年ぶりに一度ひょっこり親元に姿を見せたが、しかしそれきり、後はどこで何をしていたのやら、仕事も宿もわからない男だった。

その男が火事騒ぎと佐賀屋押しこみのあった夜、本町や本両替町にほど近い本石町の小路で頭蓋を割られていたのである。

勘平は、佐賀屋押しこみの賊とよく似た人足風体だった。

そして、勘平が本銀町の通りへ出かける本石町の小路の後方で、稲荷の祠と裏店の板塀を焦がした小火が起こっていた。それに瀕死の勘平に声をかけたとき、渋井は勘平の手が明かり用の魚油臭いことに気付いていた。

勘平の持ち物は、巾着に入ったわずかな小銭と晒に挟んだ匕首、ほかは頭にかぶっていたと思われる手拭が傍らに落ちていた。

それだけで勘平が押しこみの一味という証にはならないものの、疑いは起こった。手配りを任された年番方与力は、日ごろより渋井が組を作って動くのを嫌う扱いにくい廻り方のため、この男には単独で殺しの一件をやらせておいた方が手配りがやりやすいと考えたのだった。

「お奉行さまに申し上げます」

と、渋井は奉行の問いに答えた。

癇性な気性の奉行が、じろりと渋井を睨んだ。

「殺された勘平なる男の仕事、宿、八月晦日以前の足取りなど、残念ながら詳しい証言を得ておりません。手先の者の訊きこみで、唯一、本両替町と本町からは少々離れた飯田町の蕎麦屋で、勘平らしき男が以前、蕎麦を食っていったという話が聞けまし

た。ひと月以上前のことで、勘平らしき男は牛込御門の方角へ立ち去った、と。しかし間違いなく勘平だったかどうか、確かではありません」

「牛込御門の方角な。それだけか」

「はい。それだけでございます」

奉行は「それだけで……」と渋井の素気ない答え方に、いささか不満を覚えた。言い草が白々しい、と苛立ちが募った。

「渋井、おぬしの経験と勘で申してみよ。当夜、佐賀屋を襲った賊が船で常盤橋御門の河岸場より逃走を図ったとして、お濠を南北どちらの方向へ向かったと思うか」

はあ――と、渋面に媚びる気配が見えなかった。

「勘で申しますと、おそらく北の飯田町方面ではないかと考えます」

「北へか。勘だとしても思うところがあるのだろう。わかりやすく話せ」

「まず、このたびの賊の手口の強引で残忍な一面、佐賀屋の内情を詳細に調べ上げた緻密さと手慣れた動きより、一味が押しこみ働きに慣れた玄人ということが読み取れます。おそらく一味は、江戸ではないどこかに根城を持ち、そこから狙いを定めた町や土地へ押しこみ働きに出かける、旅の強盗集団かと思われます」

奉行は、そんなことはわかっておるわ、という顔付きを渋井へそそいでいる。

「ならば逃走用の船は、船宿、貸船屋、漁師、艀などの舟運、渡船業、などから手配しなければなりません。しかし、船は盗んだ大金を運ぶのに都合がよくとも、見付かりやすい、足がつきやすい、という不利を抱えております」

「船を使う業者らの中に、一味の仲間がおると思うのか」

「そういう業者へ仲間を前もって奉公人として入りこませておく、という手も考えられます。考えられますが、誰もが考え、疑います。その程度の疑念は、素人でも抱くでしょう。そんな容易い手口をあれほどの一味が使うでしょうか」

「しかし、素人染みていても賊は船を使ったではないか」

「はい。わたしの勘ですが、船は押しこみの現場より盗んだ金とともに逃走する手段として用い、どこか途中のさほど遠くない河岸場で船を捨て、盗んだ金を運ぶ別の手立てが講じてあった。そうすれば船を使う不利を少なくできます。一味は盗んだ金を別の手立てで江戸のねぐらにしている宿へ運んだのではないか、と考えます」

「一万四千両を超える大金だぞ。重さも嵩もある。江戸市中を運ぶとなると、それこそ素人にでも怪しまれるだろう」

「怪しまれない手立てを講じるのが、玄人の手口です」

普段は寡黙な渋面の渋井が珍しく雄弁なため、周囲の同心らはざわついた。

「つまり、船を途中で捨てたとすれば、その途中にこそ、賊がねぐらとする江戸の宿があるのでは？」

と、それは年番方の与力が口を挟んだ。

「わたしの勘と経験では、賊が船を使ったその一点から、一味がねぐらにしている宿は河岸場や船着場から遠く離れているはずです。間違いなく船宿は、はずしてもよろしいでしょう」

渋井がすかさず与力に断言した。

「みなそう考えるから、裏をかくという手もあるのではないか」

「繰りかえしますが、賊は玄人です。玄人は有利不利を必ず秤にかけます。不利を承知で裏をかくなど、それは素人のやる手口です。退屈なほど手堅い手を打つのが、玄人です。船宿はありません」

なるほど、と、周囲の同心らが同意するかのように頷いた。

「賊が盗んだ金をどこで船から積み替え、どこへどのように運んだか、そっちの勘は働かぬのか」

奉行の皮肉雑じりの口ぶりに、渋井は背中をいっそう丸め「はあ」と頷いた。

「よい。で、なぜ飯田町だと思う」

「本町並びに本両替町からさほど離れておりませんが、飯田町辺りは火事場騒ぎが及んでおらず、及んだとしてもときがかかると考えられます。事実、当夜の飯田町の河岸場は静かなものでした。気付かれずに荷物の積み替えはできるでしょうし、たとえ気付かれても、本町一帯の火事騒ぎから逃げてきた荷物と言えば疑われません。賊は佐賀屋の主人を拉致しておりますから、主人に言わせればいいのです」

「飯田町の訊きこみをしている組は誰か。飯田町の河岸場近辺で佐賀屋の船を見たという者は見付かっておらぬのか」

奉行が性急に、ほかの同心らを見廻した。

「お答えいたします。今のところ、それらしき船を飯田町近辺で見た者は見付かっておりません。それに賊がどのような船を使ったのかも、まだ不明です」

若い平同心のひとりが、渋井の後ろで応じた。

「その通りです。わたしは勘で申しております。飯田町の河岸場で賊は盗んだ金を船から何かに積み替えたのではないかと。荷馬、荷牛、荷車、あるいは人足が背中に背負って運ぶ手もあり得ます。いずれにしても、盗んだ金はどこかで船から下ろさねばなりません。佐賀屋押しこみの一件が明るみになり、各町各番所にお触れが廻る前に盗んだ金を船から積み替えて何かの荷にまぎれこませ、違う荷にしたのでは」

「しかし、飯田町とは限らんではないか。日本橋川から隅田川へ出て深川本所、でなければ濠を南へ取って、芝や三田方面もあり得るだろう」

「わたしが調べております勘平なる男が殺された一件で、勘平は家出するまでの深川の親元にいたころは、深川本所界隈を中心にうろつき廻っていた悪餓鬼だったそうです。その悪餓鬼が十年前に家出し、江戸を出て無宿同然の渡世を送るうち押しこみ一味の仲間になったとすれば、江戸でひと働き企んだ一味が、仲間の勘平の顔見知りがいる深川本所を宿にすることは避けると思われます」

「芝や三田方面は……」

「さあ、どうでしょうか。そこまではどうも、勘が働きません。繰りかえしますが、勘平という男が押しこみの一味だったのか、確かではありません。所詮、わたしの勘です。当てにはなりません。ふふん……」

渋井の冷めた言い方に、同心らの間で失笑がもれた。

「飯田町の河岸場で金を積み替えたとしよう。運び方はよい。では運び先、賊のねぐらにしている宿はどこにあると見る」

奉行はしつこく訊いた。

「飯田町は近すぎるゆえ、ないと思います。麹町、四谷方面、牛込、小日向、小石川

辺りでしょうか」
「音羽もあり得ますな」
年番方の与力が言い添え、渋井は渋面をさらにしかめて鼻の頭をかきながら、
「広いなあ……」
と、呟いた。
「賊はもうねぐらへ金を運びこんでおるのか」
「今日で三日目です。とうに運んでおると見るべきでしょう。のみならず、もう江戸を出ておるかもしれません」
「何い？　江戸を」
奉行が渋井を睨んだが、構わず渋井は続けた。
「江戸での仕事は終わったのです。一刻でも早く江戸を立ち去る。わたしが賊の頭ならそういたします」
同心らがまたざわついた。
用部屋の表側の一画では、十人の手附同心らが黙々と執務についている。
中庭の縁側を仕切る腰障子に朝の光が差していた。
「ともかくお奉行さま、地道な訊きこみ、きめの細かい探索を続け、賊の尻尾をつか

むしか手はございません。たとえ賊が江戸を出たといたしましても、尻尾さえつかまえられれば地獄の果てまでも追いかけ、召し捕らえればよろしいのです。この一件、われら北町の手で始末をつける。各々も、そう心得よ」

年番方与力のそつない評議のまとめに、同心らが「ははあっ」と揃った声を御用部屋に響かせた。

しかし奉行は、その朝の評議を終わらせなかった。

苛立たしげな短い沈黙をへて、年番方与力に言った。

「八州内において、このたびのような火付けのどさくさにまぎれて押しこみを働く手口の前例は調べているか」

「調べております。ここ十年に亘って八州内に起こりました、佐賀屋の押しこみと類似した手口を洗い出しております。一両日中にはご報告申し上げられます」

ふむ――と、奉行は不機嫌そうに頷いた。それから、

「渋井、飯田町、麹町方面の訊きこみ、探索の指図をおぬしが取れ。よいな。特に飯田町の一軒一軒、路地の隅々まで残らず見廻り、賊の手がかり、逃走の足取りをつかめ。人手がいるなら申し出よ。いくらでも廻す。賊を見事捕らえ、手柄を立てよ」

と、渋井から同心らをぐるりと見廻した。

てやんでい、今ごろ——と一同と揃って頭を垂れつつ、渋井は白けていた。

三

勘平に何があった。なぜ、誰に殺された。勘平が押しこみの一味だとすれば、仲間割れがあったのか——新場橋の袂で市兵衛らと別れた渋井は、橋を渡って南茅場町へ向かう道々考えた。

南茅場町から日本橋川沿いを大川に架かる永代橋へ取った。

永代橋を渡って佐賀町、佐賀町から油堀沿いの堀川町喜楽亭へ向かう道である。

九月になって秋が深まり、永代橋に吹く朝の川風が冷たかった。

渋井の雪駄が永代橋の橋板に、だらだら、と鳴った。

青空が橋の向こうの深川を覆っていた。

朝の漁を終えて戻った夥しい漁師船が、大川端の浜十三町に舫っている。

「旦那、勘平はやっぱり、佐賀屋押しこみの一味なんでやすか」

助弥が草履を橋板に、たんたん、と鳴らしながら渋井の丸めた背中へ問いかけた。

「確かなことはわからねえ。だが勘平が怪しいのは疑えねえ。気の毒でも、勘平が殺

されたことが佐賀屋押しこみの、今のところ手がかりらしい手がかりだしな。仕方がねえから、重箱の隅を突くように突くのさ」

渋井は小銀杏に結った髷の刷毛先を川風になびかせていた。

「喜楽亭のおやじさんは力を落としていやした。男と駆け落ちしたひどい女房の連れ子でも、それが三歳のときから十五まで育てた父親の情なんでやすかねえ。勘平は家出する前はおやじを散々手こずらせた不良三昧。挙句に家出して、十年たったら押しこみ一味だったとなったら、おやじさんはてめえを捨てた女房と連れ子に、ただ、けちを付けられ、顔に泥を塗られただけじゃねえですか」

「人の生き方は損得ばかりじゃねえ。損とわかっていても、廻りあわせでやむを得ず損を引き受ける生き方もあるものさ。損得ずくじゃなく、てめえのつまらねえ意地のため、友の情けのため、可哀想な人のために、得を捨てて損を取る。それが男ってえもんじゃねえか」

「へえ……」

助弥は旦那の言葉にちょっと驚いた。

盛り場の顔利きやら賭場の貸元らから袖の下を要求してまで取り、その手の者らに「鬼も渋い顔をする鬼しぶだぜ」と綽名され嫌われている旦那が、そんなことを言う

のが意外だった。

「喜楽亭のおやじは、しょぼくれては見えてもあれで心には、案外、錦の衣を纏っているんじゃねえか」

鬼しぶの旦那の手先に就いてかれこれ七年、そう言やあ、見かけに寄らぬ情の濃やかなところがこの旦那にはあるよな、と助弥は改めて思うのだった。

「助弥、蓮蔵からは何も知らせてこねえかい」

「まだありやせん。蓮蔵には手下を全部集めて探らせておりやす。坊主にも博奕好き女好きが大勢おりやすので、追っ付け知らせが入りやす」

蓮蔵は助弥のほかに渋井の手先を務める岡っ引だった。

蓮蔵は本所の元地廻りで、柄の悪い手下を十人ばかり抱えている。

勘平の撲殺体が本石町で見付かった後、周辺の訊きこみで、ひと月ほど前より町内で托鉢僧らしき姿を見かけたと言う者が幾人かいた。

僧は饅頭笠に二間（約三・六メートル）はありそうな長い杖を突いていて、いつもひとりで界隈をうろついていたらしい。

ただの托鉢僧なら怪しむには足りないけれども、昼間のみならず夜更けてからも見かけられ、「怪しい坊さんですよ」と訝しむ声も中にあった。

勘平が町内の下調べをし、どこに火を付ければ効果があるかと探っていたとすれば、案外その托鉢僧も押しこみの一味で、僧に変装して町の様子を事前に探っていたのかもしれねえ。

八月晦日のあの当夜、僧と勘平の間で何かがあった、という推量はどうだ。

違うか――と、渋井は苦笑いで口元を歪めた。

そんな目立つことをかえってするはずがねえな、と思いつつ、渋井は念のため手先の蓮蔵にその僧の行方を探らせていた。

「まあ、無駄足かもしれねえがな」

渋井が肩をほぐすように廻すと、黒羽織の裾が大川にそよぐ風にあおられ心地よげになびいた。

四

富士見坂から八王子の山続きに富士の奇々妙々な全景が眺められる。

高田村十二景のひとつ、富士見坂から眺める芙蓉ケ嶺の雪と絶景が評判らしいが、その朝の富士はまだ雪をかぶるには早い季節である。

坂を下って北側に坂下町、続いて南側に片側町の東青柳町と西青柳町があって、その真中を南北へ音羽町を貫く御成道の北正面に、護国寺仁王門が神齢山の扁額を掲げ、阿吽の仁王によって守られている。

仁王門を入り、僧房へと分かれる小道を取らずにまっすぐ樹林の間の石畳を数十間進むと、蓮葉形手洗水盤が左右に二基備わった間を数十段の石段が上り、石段の上に不老の扁額を掲げた山門がそびえていた。

山門をくぐって松の古木の中をすぎ、さらに八段ほどの石段を上った広大な境内の石畳の二十数間先の真正面に、反り屋根の緑の甍が澄み切った青空に映え、静かな清涼に包まれた、本殿が荘厳な佇まいを見せていた。

折りしも、幅広い回廊が廻る本殿前に僧衣の二人の僧が立ち並び、堂内須弥壇に祭られた本尊・如意輪観世音菩薩に掌を合わせていた。

二人は頭を垂れ、穢れなき唇の先に聞き取れぬほどの声で経を上らせていた。

それからどちらからともなく頭をもたげ、二人は本殿の階段を下りると、草履を踏み締め、境内の石畳にさわさわと鳴らした。

ひとりは中背の僧で護国寺にて修行する若い新発意・昭光。今ひとりは、背丈が六尺（約百八十センチ）はある痩軀に日焼けした相貌が研ぎ澄まされた僧・真達であ

る。

昭光は座主より、奈良興福寺子院・宝蔵院より修行のために旅に出て、江戸は当護国寺に逗留を求めた法相の僧・真達の旅宿の世話方を命ぜられていた。

二人は本殿前の広い境内を、西側の墓地への門の手前に建つ袴腰付き鐘楼の方へゆるやかに歩んだ。前が真達、昭光は数歩遅れていた。

昭光は、真達の世話方を命ぜられてすでに一ヵ月以上の日がすぎ、秋が深まり、早や晩秋の気配の漂い始めたこのごろ、ほぼ毎日、江戸の町へ托鉢に出かける真達に何かしら得体の知れぬ違和を覚えていた。

それは、この二十歳近く年の離れた法相の僧の並外れた学識の高さと頭脳の明晰さに驚かされる一方で、悟りの道を歩む能化の内に秘めた羅刹のごとき悪鬼の怨念と深い妄執を覚えてからだった。

どんなに修行を積んでも、自分はこの僧の学識、頭脳に到底及ばない。

昭光は驚異と敬意のない交ぜになった想念に眩暈を覚えるほどだった。

しかしそれでいて、この僧がとき折り、いやしばしば垣間見せる世俗染みた雑念とも思われる気配が、昭光をたじろがせていた。

初め、昭光はその気配が何かはわからなかった。

僧にはその清らかとも見える相貌の、広い額にひと筋の美しい疵が走っていた。

昭光は僧の疵を、直視するのをなぜかはばかった。

なぜなら疵は、美しいと昭光が覚えたそれゆえに、自分が舐めて癒して進ぜたいと密かに夢想するほどまがまがしく淫らであったからだ。

あるとき昭光は、真達が托鉢に出かける折りに覚える違和が、額の美しい疵より立ち上っている気高さとはかけ離れた男の臭気、とでも言わねば表し得ぬ不気味さであることに、ふと、気付いたのだった。

この僧はどういう人だ——と、若い昭光はひと月、混乱の中で考えた。

考えた末、自らに「言わば」と答えた。

士が地位と栄達を求めるように、商人が富と繁栄を求めるように、男と女が互いの肉体を求め貪り合うように、怒りと憎悪と蔑みと残酷にかられて人が人の命を奪うように、この人に取り憑いた瞋恚がこの人の血となり肉となっているかのように……

もしかしたらこの人は、人の命を奪おうとしているのではないか。僧にあるまじき殺戮の業のために、この人は江戸にきたのではないか。

もしそうなら、この人の敬虔さと妄念の二つの顔が符合する。

もしそうなら、額の疵には二つの顔が符合する経緯を明かす謂れが隠されているの

ではあるまいか。

だから？　それがどうした？　昭光には、答えはそこまでしか浮かばない。

真達が江戸を立ち去るまでのいずれかに、世話方の分を越えた問いを投げかけなければならない。昭光はわけもなく、額の疵の謂れを知らねばならないと、そう思い始めていた。

その朝、昭光は背の高い真達の背中に言った。

「和尚、和尚は江戸にどなたかをお捜しにまいられたのですか」

すると真達は歩みを止め、昭光へ振り向いた。

長い旅で日に焼けた精悍な顔が、清らかなと思えるほどに輝いた。その輝きの中で真達は静かに微笑んだ。

「昭光さん、若い昭光さんには学びたい知りたいというひたむきな思いがあふれています。せやからいずれ訊かれるときがあるやろと、思うてました。わたしもいずれ昭光さんには話したい、聞いてほしいと思うてました」

真達は鐘楼へ向かって再び歩み始め、昭光が続いた。

真達の背中が続けた。

「わたしが十五のときでした。十三のあの子が、北寺の伝の系統を引く法相研究の道

場、わが興福寺へ入山してきたんです。可愛らしい小っちゃな子でな。なんでも、あの子のおじいちゃんに当たる江戸のごくごく身分の低いお侍が、若いころ諸国の旅に出て、奈良である修行僧と、短い間やけど心許し合う友の交わりを持ったそうです」

真達は鐘楼の袴腰の小さな入り口を、背を屈めてくぐった。

「お侍が奉公先を求めて江戸へ戻った後、修行僧は修行を重ね、興福寺で偉い阿闍梨さまにならはりました。江戸と奈良に離れていても、お侍と阿闍梨さまの友の情けは変わることはなかった」

薄暗い中に、階段が梵鐘のある楼上に通じていた。

「詳しい経緯は知らんが、あの子は阿闍梨さまの後見を得て、興福寺で法相の教えと行を修めるために入山した、と聞いていました。普通は、そういう子は寺小姓になって上人さまにお仕えするところから始まるのやけれど、中にはごく稀に能力抜きんでて優れていると認められた子は、小っちゃい背丈に若衆髷のまま堂衆に雑じって読経、供華、廻峯行に専念し、大衆として研鑽に励むことが許されるんです」

かく言うわたしも——と、真達は楼上に立って、続いて階段を上る昭光に言った。

「あの子より一歳早い十二歳のとき、仏門へ帰依し、興福寺大衆として修行が許されたんです。わたしは京の、貧乏公家の倅です」

「お公家の……」

昭光は真達の相貌に敬虔さしか見なかったならば、額にあの疵がなかったなら、跪きたくなるほどの愛しい思いにかられただろう、という気がした。

真達は、楼上を廻る高欄の傍らへ佇み、山門からはるかに下って仁王門の彼方に延びる音羽の町と御成道を眺めていた。

音羽の空に鳥影が見えていた。

「わたしはあの子が、わが弟みたいな気がしました。早すぎる元服だけは果たしていたけれど、どう見てもまだ子供やった。わたしは、数年前のわたし自身を見る気がしたんです。御仏に幼い弟をちゃんと導いてやれ、と託された気がしたんです。わたしとあの子は、寝食を共にし、机を並べて経を読誦し、唯識を学び、ともに励ましながら、ともに競いながら、廻峯の行、五位の実践修行に励むことになったんです」

「和尚は、そのお子に、御仏のご意志を見られたのですね」

真達は昭光へ一瞥を投げ、また笑みを浮かべた。

「そうかもしれません。あの子は学識においても、実践修行においても、大衆を主導する学侶が驚嘆するほど優れた能力を発揮しました。今でもよう覚えています。学侶らのあの子を見るときの、敬いよりも畏れすら抱いている眼差しを。それほど優れた

子でした。わたしはわが弟を、自慢に、誇りに思いました。弟を与えてくださった御仏に何度感謝の祈りを捧げたことでしょう」

けれどもわたしは気付かなかったんです——と、真達は微動だにせず言った。

「あまりに優れた者、いや、優れすぎた者は、御仏のご意志にかなう者ではないということにです。それは御仏のご意志では決してなく、魔物の、変化の化身かもしれぬということにです」

昭光は、ん、と首をわずかに傾げた。

「四年の月日が流れ、あの子は背が伸び、逞しく、無駄なもの一切を削ぎ落とした、しなやかな春日山の野生の鹿を髣髴とさせる、美しい男に成長していました。わたしが十九、あの子は十七でした。わたしは剃髪し、生涯を御仏に捧げお頼みする法相の信仰を固めていました。あの子にも、そうあってほしい、ともに究竟位の仏果にいたってほしいと願っていました。けどあの子は、わたしとは違っていました」

「その方は、信仰の道に入られなかったのですか」

「昭光さん、信仰って、なんですか。人は信仰で、救われたいんですか。救いたいんですか。達成したいんですか。捨てたいんですか。どこへいきたいんですか。どこへもいかず、消えてしまいたいんですか」

昭光は呆然と、真達の横顔を眺めた。

「興福寺では廻峯行と同じ行として、剣の修行をやっております。その昔は、興福寺がときの政に大きな力を及ぼした僧と寺領の農民らで構成された僧兵という軍団を仰山抱えていましてな。僧兵の世ではないけれど、興福寺では、今なお邪念なく身体の鍛錬を行い剣の技を練磨し究める道を、主観客観の対立が昇華して真理と一体となる実践修行法のひとつに立てておるんです」

高欄に置いた真達の節くれ立った長い指が、わずかに震えた。

「わたしもあの子も、剣の道を究める修行に、導き合い、競い合うたんです」

昭光には真達の剣、あるいは薙刀を振るう音が、ぶうん、と聞こえた。

「十九のわたしは、堂衆の中でも剣の道を究めた抜きん出た学僧と認められ、称賛されておりました。諸国のどこの剣聖と剣を交えても後れを取る気がしなかった。負けるわけがない。わたしの究めた剣技は御仏のご意志であり、唯識の道理を進める修行や、と信じていました。あの子はそんなわたしの言わば一番弟子やった。わたしが剣の修行を究め御仏の仏果に近付くすぐ後ろに、あの子がいる、そう思うてました」

「和尚が、その方の剣の稽古をつけられたんですね」

真達の横顔が、すぎ去った歳月を確かめつつ頷いた。

「そやのにあるとき、わたしは知ったんです。わたしの後ろにはあの子はおらへんということを。十七のあの子は、総髪を後ろに束ねて、それを背中に垂らしていましてね。風が吹くと、垂らした髪がさらさらとなびくんですわ。じっと何かを思い詰めて佇むあの子の姿は、修行僧のわたしのそれとはまったく違うもんでした。そのころです。堂衆らが戯れ言みたいに、《風の剣》と言い始めたんです」

「風の剣？」

「なんやそれ。阿呆らしい。初めはそう思うてました。けれど、風の剣やらをなんとかせんとあかんと思い始めたんは、あの子が風の剣を使う、と堂衆らが囃していたからなんです。わたしは知らんかった。一緒に唯識の道理を進める修行として剣の道を究めていたあの子が、そんな埒もない、子供の遊戯みたいな技に現を抜かしているやなんて。わたしに隠れてそんなことをしてたんか、と腹立たしかった」

真達は高欄に置いた両の手に拳を作り、震えを隠した。

「許されへん。興福寺は法相の聖地であり道場や。埒もない剣術使いになりたいんやったら、奈良までこんでええ。江戸へ帰れ、と思いました」

昭光には真達の仕種が、内心の怒りを隠したかに見えた。

「今は仮堂が建てられましたが、ずっと類焼したまま建て替えられなかった中金堂

があって、そこは中金堂院と言い、堂跡の前にある広大な庭では各種の法会が行われるんです。その法会の折り、ときに堂衆は主導者の学侶らの前で修行の過程を披瀝する慣わしがありましてね。早い話が、学侶の前で試合をするんです。学侶が見たい僧が次々に名指しされ、木剣、木槍、得意とする得物を取って相まみえるんです」

「そこで和尚は、その方と試合をなされたのですか」

「わたしが学侶に名指しされることはなかった。わたしが抜きん出ていることは学侶らはご存じでしたし、未熟な者が名指しされ披瀝するのがもっぱらでしたから。ある日の法会の後の試合で、たまたまあの子が学侶に名指しされたんです。あの子は特別な子と学侶の間でも見られていましたから、わたし同様名指しされることはなかったのに、なぜかその日、名指しされたんです。そういうことが、あるんですなあ」

ふと、昭光は自身の鼓動が音を立ててときめいているのに気付いた。

「あの子がすっと立ち上がって、衆目の中央に進み出たとき、静かなざわめきが、空と山々に吹き渡る風のようなざわめきが、湧き起こるのがわかるんです。剃髪もしていない、信仰の道にも入っていないあの子の姿に、興福寺大衆の誰もが、学侶らでさえが、厳かで、胸打たれるような気持ちにさせられるんです。あの子が魔物やと、確信したんはそのときです」

昭光は暗い闇の彼方へ延びる一本の細道をたどる自分が見え、ぞっとした。

「わたしは学侶が相手を名指しする前に立ち上がり、あの子の前に進み出ました。学侶らは奇異の目でわたしを見つめましたが、止めませんでした。堂衆らの喚声が、うわおお、と立ち上り、大空に広がっていくんです。口には出さへんけれど、みんな知っているんです。わたしに敵うのはあの子だけやと。もしかしたら、あの子の方がもう強うなっているのと違うかと。なぜとならば、あの子の剣は風の剣やからと」

それから昭光は、身体の震えるのがわかった。それを恥ずかしく思った。

「あの子は木刀。わたしは二間を超える木槍でした。稽古では、あの子と何度も木刀木槍を交わしており、わたしが負けたことはありません。わたしはあの子についてきてほしいと望んでいました。あの子の剣がわたしと拮抗することは願ってもないことでした。けれどこれは稽古と違う。あの子の心に巣食う魔物を追い払う、この唯識の聖地で風の剣などとほざく戯れは許さん、わたしはその一念やった」

「和尚は、和尚は……」

言いかけて、昭光には後の言葉が出なかった。

「知る働きの識によってのみ知られてある存在は、即ち空なのです。風の剣、などまさに識とは相容れない邪悪な妄想にすら及ばない。そのような児戯に、わたしは負け

るはずがなかった。御仏の教えにかなうわたしの剣が、あの子の風の剣に負けるはずがなかった。それが、ああ、あのとき何が起こったのか」

　真達は両の掌で、清らかな相貌を物思わしげに覆った。

「じつはわたしは、あの子と学侶らの前で闘うたあのとき、何があったのか覚えていないのです。覚えているのは、堂衆らの水を打った静寂と直後に起こったどよめきでした。一瞬だったはずです。せやのに、わたしの身体中から冷たい汗が噴き出ていました。わたしの槍は庭に転がっていて、あの子の木刀がわたしの額へ紙一重の間を残して当てられていました」

　真達は心を鎮め、両手を高欄へ戻した。

「あの子は、ほんのかすかな、うっとりさせられる甘い笑みを、邪悪な笑みを浮かべていたような気がしてなりません。あのときわたしは、自分が魔物に魅入られた小鹿であることを知らされたんです。御仏が小鹿に、試練を課されているのだと。それからすごしたわたしの日々を、昭光さんになんとお話ししたら、わかってもらえるのやろう。わたしは御仏に祈り続けました。昼も夜も、御仏の試練の意味を知るために」

　では和尚のその疵は――と、昭光は訊きたかったが、言葉にはできなかった。

「冬がきて奈良に雪が降ったんです。雪の舞う春日の山嶺をわたしは彷徨うた。御仏

の声が聞こえるはずや。御言葉が聞けるはずや、と思いましてな。ええ気になってたけれど、わたしもまだまだ修行の身の学僧やったということです。わたしごときに、御仏の御言葉が聞けるはずがありません」

短い沈黙があった。

真達は大きく息を吸い、それから、

「年が明けてわたしは二十歳になりました。春の初め、十八のあの子は興福寺を去ったんです」

と、言った。

「阿闍梨さまがあの子が興福寺を去るのを、お許しになられたんです。兄であるわたしには、お世話になりましたのひと言の挨拶もなしにや。生駒山を越えて大坂へゆくと聞いて追いかけた。まだわたしには御仏の試練の意味がわかってへんかった。追いかけねばならんかった。長さ三間（約五・四メートル）の鎌槍を脇にしっかと抱えてな。朝靄も凍り付くまだ明けきらん間道をわたしは駆けた。わたしは御仏の試練を越えなあかんと思うた」

昭光は掌を合わせ、声にならぬ経を唇に上らせた。

「生駒山に差しかかる間道の小さな神社の境内で、あの子に追い付いた。あの子は邪

悪な甘い笑みを浮かべて、わたしを待っとった。挨拶もなしか、とそんなしょうもない言葉しか思い浮かばへん自分がみじめやった。そしたら、こうしてお会いすることがわかっていました、としゃあしゃあとぬかしよった。小癪な、とわたしは言うた。わたしは三間槍を振り廻した。こう頭の上で……」

昭光は震えの中で、真達の頭上にうなる槍の音を聞いた。

「振り廻しながらあの子に肉薄して、ひと突きにした。そしたらあの子の身体がふわっと風に乗ったみたいに見えた。靄に包まれた木々の中で剣を抜いて舞うのが見えたんや。風が吹いとった。そうか、学侶らの前で起こったことはこれやったんか、とやっとわかった。風の剣いうたら何か、わたしは見抜いた。もう負けへんと思うた。額をこう斬られたとき」

真達は昭光へ清らかな笑みを向け、指先で額の美しい疵をなぞった。そして、

「次は、もう負けへんと」

と、続けた。

それから、仁王門の彼方の音羽の町を望洋と眺めた。

「あれからの歳月、わたしは槍の宝蔵院で槍の修行を、御仏の御言葉を聞くために積んできたんです。長いことかかりました。ほんまに長いときやった。それでこの春で

した。興福寺の大阿闍梨さまがわたしをお呼びになられて、わたしを院家に昇らせるつもりや、と仰られたんです」

真達は少し畏まった語調になった。

「それでわかったんです。修行が終わったんやなと。ときがきたんやなと。自分で自分を褒めてやりたかった。よう今日まで我慢したなと。昭光さん、わたしはとうとう御仏の御言葉が聞けたんです。すべてはその御言葉を聞くためやった。それが聞けたんです」

「い、院家に、昇られたので、ございましょう？」

昭光は恐る恐る訊いた。

「……ふ」

真達は小さな笑い声をこぼした。

「わたしは大阿闍梨さまの膝におすがりし、申しました。わが修行を締めくくる今ひとつの修行が残っております。それを果たしてまいります。托鉢の旅に出ることをお許しくださいと。大阿闍梨さまは何も仰いませんでしたが、わたしには確かに聞こえました。真達、いってこい、おまえの修行を果たしてこい、と御仏の御言葉が」

昭光は額から落ちるひと雫の冷えた汗を、指先で拭った。

「ああ、昭光さん、ここは綺麗な町やな。ちょっと奈良に似ています。奈良の三条大路を思い出しますわ。そう、あれから二十年です」

この旅に出るまでに、二十年、かかりました――と、真達は繰りかえした。

昭光は掌を合わせ、声にならぬ声でひたすら経を唱えていた。

第七章　神隠し

一

荒れ果てた大清楼の、市兵衛と藤蔵が勉強部屋に使っていた裏庭に面した八畳間に、清蔵、稲、藤蔵が、警動の後に戻ってきた使用人らと向き合っていた。

戻ってきた使用人は下男下女と若い者のまだ四人ほどで、市兵衛は穴の開いた壁を背に両者の脇に着座していた。

破壊された大清楼以外、音羽町九丁目はわずか三日目にして早や以前の賑わいをほぼ取り戻していた。

踏み荒らされた裏庭と、無残に引き抜かれた山茶花の垣根沿いの西裏通りを、周辺の住人が往来していた。

濡れ縁を仕切る腰障子を一尺（約三十センチ）ほど開けた隙間に、西裏通りと目白坂下の辻に構える菓子所・篠崎の軒暖簾が力なく垂れているのも前のままだった。

清蔵はほつれた髪を直しもせず、結んだ唇を小さく震わせうな垂れていた。

隣のふっくらと肥えた稲も消沈している。

藤蔵が黙って鼻梁に架かる眼鏡を指先で上げた。

「……となればやはり、お歌は吉原へ連れていかれたとしか考えられません。可哀想に。すぐ助け出さねば。岡場所の女郎は吉原で競売にかけられ、三年の奴女郎の罰を科せられる。ああ、なんてことだ。お歌はうちの娘なのに」

「吉原へは今日これから、わたしがいってきます。ご主人はご心配なさらず身体をお休めください」

市兵衛は消沈している清蔵夫婦に言った。

「いやそれは。先生にこれ以上お願いするわけにはまいりません」

「いいのです。たっぷりといただいた報酬分をまだ働いておりません。ですから、わたしにいかせてください。先ほどの町方役人のこともあります。わたしがいった方がいい。それに、これから大清楼を建て直さなければならないご主人がゆっくり休んで元気を回復していただかなければ、みなの士気にかかわります」

「なんと、ありがたいことでございます。先生のお力添えをいただけると思うだけで、胸の鬱屈が晴れます」

「お父っつあん、わたしも先生と一緒に吉原へいくよ」

藤蔵がいきなり言った。

ああ？　と清蔵が口をあんぐりさせた。

「吉原へいって、お歌姉さんを取り戻してくる」

「何を言っているんだ、子供のくせに。吉原はおまえみたいな子供がいくところじゃないのだ。第一、おまえは光成館へ通わなきゃならないだろう。勉強があるだろう」

「光成館は重陽の節句が終わってからだよ。それにお父っつあん、うちだって岡場所の茶屋じゃないか。わたしは九丁目育ちなんだぜ」

使用人たちが藤蔵のませた物言いに、くす、と笑った。

「あ、そ、そうか。そうだったな」

清蔵は市兵衛に向き、

「先生、藤蔵も構いませんで、しょうか」

と、様子をうかがいつつ訊いた。

「お歌さんの事情を話すのに、お身内がいてくれるのは都合がいいかもしれません。

わたしと藤蔵さんがいくことにしましょう」

頷いた市兵衛に、藤蔵は子供らしく懸命に「はいっ」と応えた。

「出かけるまえにひとつ、お訊ねします。たとえ警動であっても、客の相手をする女以外は吉原の男衆らも連れていかないものです。拉致しても選別して、そうでない女はかえすはずです。もしかして、八月晦日のあの夜、お歌さんが連れていかれた先が吉原以外の心当たりはありませんか。みなさんも少しでも、見たことや聞いたことで、もしや、と思うことがあるなら聞かせてください。ささいなことでも構いません」

それは市兵衛の気になっていたことだった。

歌なら、芸者・梅里として芸者勤めはしていたけれど客を取る女ではない、と自ら吉原の町役人相手に身の証を立てる機転を働かせるのに違いなかった。

音羽では芸者・梅里の事情を知らない者はいないはずだ。

だからよけい、歌はなぜ帰ってこられない、と市兵衛は気がかりだった。

「あの夜、藤蔵の入門祝いで酔っ払って寝てしまい、喉が渇いて目が覚めたちょうどそのときでした。呼子が大通りに咎めて、ばりばりと音をたてて打ち壊しの男衆らが突入してくるのがわかったんです。逃げろ、と叫びながら二階へ駆け上がりました。

女郎衆とお客さんを逃がさなければと、それしか頭になく、家の者を気遣う余裕はありませんでした。それに、お歌はしっかり者ですし」

清蔵は思い出しながら言った。

稲が肩を落とし、清蔵の言葉に頷いている。

「お歌さんがしっかり者であるのは、わたしも知っています。そうですね。わたしがここで勝手に取り越し苦労をしていても意味はありません。では藤蔵さん、早速、出かけましょう」

けれども市兵衛は気になる。

刀を取った。

「先生、お待ちください」

稲が止め、財布より金貨や銭を取り出して白紙に包み、市兵衛に差し出した。

「主人はこの通りですし、わたしも遠くは自信がありません。何とぞ藤蔵をお願いいたします。これで、どうぞ船を使ってください。お腹も空くでしょうし。この子は聞き分けはいい方ですけれど、何分にもまだ子供です。わがままを申しましたら遠慮なく叱ってください。藤蔵、先生の仰ることをちゃんと聞くのだよ」

「うん。おっ母さん、大丈夫だよ」

藤蔵が小さな身体をはじかせた。
「わかりました。お心遣い、遠慮なくお預かりします」
市兵衛は白紙の包みを押しいただいた。
「藤蔵さんとは一ヵ月、ともに勉強をした仲です。気心は通じております」
そうして立ち上がり、腰に大刀をずんと帯びた。

半刻（一時間）後、浅草田町二丁目の河岸場に上がり、日本堤を取って衣紋坂を下った。
刻限は昼近くなっていて、吉原は朝帰りの客が退き、遊女らが簡単な朝食を摂ったり風呂へ入って化粧を直したり、昼からの客を迎える支度をするころである。
この刻限、吉原の表通りを往来するのは嫖客ではなく、廓の使用人や遊女の着物の用を聞く呉服問屋の手代、お針子、様々な商品を廓に届ける商人らである。
市兵衛と藤蔵は大門をくぐり、まずは大門脇の四郎兵衛会所へ向かった。
会所で話がすめば簡単である。
会所当番の町役人は、事情を話した市兵衛が侍であることと、倅みたいに見える子供連れであることを訝しんで、

「音羽の？　大清楼の？　なるほど。困るんですよ。ご公儀の定めで岡場所は禁止なんですから。まったく、野放図な輩が多くてね」

と、市兵衛と藤蔵を皮肉をこめて睨め廻した。

三日前に警動のあった音羽の茶屋の幼い倅と、茶屋雇いの素性の知れない侍ということで、役人の対応は丁重ではなかった。

役人は上がり端の板敷に座り、市兵衛と藤蔵は表土間に立ったままだった。

「歌、もしくは梅里、その女は芸者ですか。覚えがないな」

役人はそれでも雇いの番人に帳面を持ってこさせ、さらりさらりと繰り始めた。

「……ふむむ、そういう女は、見当たりませんね」

と、口をへの字に結んで、指先でこめかみをかいた。

「昨日、競売を行い、女どもはみな見世に買われていきました。なんでしたら、一軒一軒当たってみますか。数は知れていますが、一軒一軒廻るとなるとだいぶときがかかりますよ。それに昼から客がきて、どの見世も忙しくなりますし」

昨日？　昨日から客の相手をさせられたのか、とは藤蔵の手前、訊けなかった。

会所を辞し、仲ノ町の大通りをいった。

江戸町の次に揚屋町の通りがあり、揚屋町の半籬・浅井屋の柳三郎を訪ねた。

浅井屋では町方役人・渋井鬼三次の紹介と伝えたためか、一階座敷へ通された。見世の方からとき折り、女の笑い声や廊下を踏み鳴らす草履の音が聞こえてきた。主人の柳三郎は中背の痩せた、顔付きも穏やかな男だった。

「渋井さまには日ごろ何くれとお世話になっております」

愛想が会所とはまるで違っていて、茶も出された。訪ねた趣を伝えると、

「お歌さん。記憶にありません。先夜はわたしが当番だったため、若い者を指図しましたので、吉原へ連行いたしました女郎衆はすべて名を帳面に記しております。九丁目橋の袂でも、明らかに下女や女郎衆ではないとわかる者は、その場で解き放ちました。間違いはないはずですが」

と、澱みなく答えた。

そして、市兵衛の隣でひたむきに話を聞いている藤蔵へ穏やかな表情を向けた。

「では、こちらのぼんさんはそのお歌さんの弟さんで」

藤蔵は黙したまま顔を伏せていた。

「それは心配なことですな。ただ、中には、上手く逃げた女郎衆もおるようです。若い者らには逃げた者は放っておけと指示しておりました。そういう女郎衆にまぎれて、どこかに身を隠し、潜んでいるのではありませんか」

「姉さんは女郎衆じゃないから、逃げる必要はありません」
うな垂れた藤蔵は、くぐもった小声でようやく言った。
ひどく居辛そうな様子だった。
「その通りでしょう。だとしましても、ぼんさんのご存じない大人の事情もあったのだと思われますね」
藤蔵は言いかえせず、ぎゅっ、と唇を結んだ。
「おや、ぼんさんはあのときの……道理で。そうですよね。そうでしたね」
柳三郎が藤蔵を改めてまじまじと見つめた。
それからやわらかな表情に直って言った。
「ぼんさん、おっ母さんはその後、お変わりありませんか」
藤蔵は、こくん、と頷いた。
柳三郎は市兵衛に、藤蔵が先夜の警動の折り、縛り上げられた大清楼の両親を庇って柳三郎に必死に食ってかかった振る舞いを、なかなか腹の据わったぼんさんで、と頼もしげに語った。
なるほど、藤蔵ならありそうな、と市兵衛は感心した。
それでいいのだよ、藤蔵さん、という気持ちをこめて藤蔵の肩にそっと触れた。す

ると藤蔵はわずかに顔をもたげ、
「おっ母さんを助けて、いただいて、ありがとうございました」
と、消え入りそうな声で言った。
「いえいえ。ぼんさんはわたしらを、恨みに思っていらっしゃるのでしょうね。でもね、あのときはわたしらもあれが役目だったんですよ。大人の事情なんですよ。ぼんさんにも今にお分かりになるときが、まいりますよ」
柳三郎はわけ知りに言った。
ふと、市兵衛は柳三郎のわけ知りな様子が引っかかった。
「浅井屋さん。子供屋より呼び出してお客の相手をさせる料理茶屋は大清楼のほかにもあります。なのに、先夜の警動で手入れを受けたのは大清楼だけでした。なぜ大清楼だけだったのですか。浅井屋さんが吉原の男衆を指図なさったのなら、大清楼だけを標的にした理由はなんだったのですか」
「ふむ。訴えがわたしども会所に直にあったのです。ここのところ音羽町九丁目の風紀の乱れが著しい。岡場所が賑やかなのは仕方がないが、やくざな者らがわがもの顔で表通りを闊歩し、真っ当な護国寺参詣のお客に迷惑をかける無頼の徒が少なからずいる。音羽の表店の商いにも障りが出て困っている。取り締まってほしい、とい

う訴えです」

「その訴えで、大清楼だけを？」

「訴えでは、音羽町九丁目の遊里は大清楼が一番盛んで、乱脈ぶりが尋常ではない。しかも、大清楼の主人がほかの茶屋や局見世などを差配している。ゆえに、大清楼に手入れがあればほかはみな従うはずだ、というものでした」

「九丁目にも名主さんがいます。大清楼のご主人が勝手に遊里の差配など、できるはずがありません。大清楼もほかの茶屋も違いがないことは、名主さんにお訊ねになればわかったはずです。わたしもひと月お世話になり、それは知っています。こちらの会所では前もって、九丁目の有りさまをお調べにならなかったのですか」

「むろん、人をいかせて調べております。仰る通り、訴えが少々大袈裟であるのはすぐにわかりました。元々、音羽は五代将軍・綱吉さまご生母・桂昌院さま所縁の護国寺の門前町として町家が作られた事情があって、岡場所の取り締まりには昔から慎重を要する土地柄です。そのため、訴えがあってもこのたびの警動は難しいと、会所では判断いたしておりました」

「しかし警動は行われました」

「じつはその後、北の御番所よりお指図があったのです。音羽町九丁目の取り締まり

が必要ではないか、というご趣旨のです。やはり大清楼の名が取り沙汰されておりました。紊乱が目に余ると。御番所よりのお指図ですから従わざるを得ません。それで、茶屋は大清楼のみ。後は裏路地のいかがわしい局見世を一掃するという手筈を決めたのでございます」

藤蔵はうな垂れ、鼻梁に架かる眼鏡を指先で上げた。

可哀想に。大清楼がそんな言われ方をして、悔しいのに違いなかった。

「聞くところによれば、音羽近辺の旗本屋敷から九丁目の取り締まりの要請が奉行所にあったそうです。もしかして、こちらの訴えも同じ旗本屋敷からあったのですか」

「よくご存じですね。しかし、それは違います。音羽町内の表店に奉公なさっている方々からの訴えでございました」

「表店の奉公人……」

「はい。名前は申せませんが」

音羽近辺の旗本屋敷の訴えと音羽町内の表店に奉公している者からの訴えが、同じ時期にあったということだ。しかも双方ともに大清楼を名指ししている。

偶然とは思えない。妙だ、と普通なら思うだろう。

音羽の住人、音羽を知っている者なら、大清楼がほかの茶屋と違わないのは間違い

なく知っている。知っていて大清楼を紊乱が目に余ると名指しした。

大清楼を狙って示し合わせた、と考えてもおかしくない。

市兵衛の脳裡を、旗本の桜井長太夫が梅里、つまり歌を追って市兵衛と藤蔵の勉強部屋へ乱入した、八月のあの日の狼藉がよぎった。

桜井はひどく酔っ払っていて、その桜井に従っていた手代らしき男も呂律が廻らぬほどに酔っていた。

その夜の帰途、白堀堤で桜井の手の者の襲撃を受けた。

音羽近辺の旗本屋敷と音羽の表店に勤める奉公人らの訴え、とは……

あの者ら、まさかな、とは思った。だが、

大人の事情か——と、市兵衛は心の中で繰りかえした。

浅井屋を辞した市兵衛と藤蔵は、揚屋町から京町へ西河岸の小路を取った。

忍びがえしの付いた高い黒板塀際で、年増の遊女と若い者と思われる男が、ひっそりと言葉を交わしていて、通りかかった市兵衛と藤蔵の二人を珍しそうに見つめた。

先夜の大清楼の手入れで吉原へ連行された子供屋の雲井という芸者が、昨日の競売で京町一丁目の傾城・小林屋に競り落とされていた。

雲井は歌こと芸者・梅里と親しかった。

小林屋は、吉原の南角奥に小見世を構える流行っていなさそうな小格子だった。湯文字や長襦袢が派手に干された路地裏へ、緋の長襦袢に布子を羽織った雲井がかたかたと下駄を鳴らして現われた。

雲井は藤蔵を見るなり、涙目になって駆け寄ってきた。

「まあ、藤蔵おぼっちゃんじゃありませんか。先夜は大変でしたね。お怪我はありませんか。旦那さんも女将さんも、お家の方はみなさんご無事ですか」

「わたしは平気です。お父っつあんやおっ母さんも……雲井姐さんだって、家のせいでこんな目に遭わせちゃって」

「気になさることはありません。大清楼さんが悪いんじゃありませんもの。運が悪かったんです」

雲井は布子の袖で涙を拭った。

「で、おぼっちゃんがわざわざこんなところまでこられて、何かあったんですか」

「雲井さん、大清楼にお雇いいただいている唐木市兵衛と申します。お歌さんのことでおうかがいいたしたいのです」

市兵衛が前へ出た。

「はあ？」

雲井が袖から化粧前の年増顔を上げた。
「雲井姐さん、わたしの算学の勉強を見ていただいた唐木先生だよ」
「先生なんですか。道理で。大清楼さんで二度ほどお見かけしたことがあります。様子のいいお侍さまだなって思っていました」
雲井は涙で赤くなった目元を、少しゆるませた。
「じつはお歌さんの姿が、先夜から見えないのです」
市兵衛は繰りかえした。
「行方がわからないのです」
「ええっ、梅里さんが？　どうしていなくなっちゃったんですか」
「てっきり、吉原へ連れてこられたと思い、連れ戻しにきたのです。ですが……」
「いいえ。梅里さんはわっちらと一緒じゃなかった。昨日の競売にだっていなかったし。梅里さんはわっちらとは違ってお客さんを取らないし、第一、大清楼さんのお身内ですしね」
雲井が深刻そうに眉間をしかめた。
「会所の帳面にも、歌、もしくは梅里の名はありませんでした。雲井さん、先夜のあの騒ぎの中で、お歌さんを見かけませんでしたか。見かけなくとも誰かにお歌さんの

様子を聞いたとか……少しでも覚えていることがあれば教えてほしいのです」
「先夜は見かけていませんし、噂を聞いてもいません。わっちは二階でお客さんと一緒だったところへ、いきなり男衆が踏みこんできて、すぐに縛り上げられて外へ引きずり出されて。自分のことで精一杯で、人を気にしている余裕なんてなかった」
それはそうだろう、と市兵衛は思った。
藤蔵は、どんなに小さな手がかりでも聞き逃すまいと雲井を真剣に見つめている。
「梅里さんは桜井というお旗本と障りができて、先月から芸者の勤めを控えていましたから。桜井ってえのは、偉そうなやな客なんです。十日ほど前、大清楼さんで梅里さんと顔を合わせたとき、今は下働きよ、って笑っていたのを覚えています。でもそれ以後は、梅里さんとは顔を合わせていないんですよ」
「吉原でなければ、お歌さんはどこへ、誰に連れ去られたのでしょう。雲井さん、心当たりはありませんか。お歌さんが誰かに連れ去られたことだけは確かなのです」
さあ――と、雲井は小首を傾げた。
そして、藤蔵に詫びるように掌を合わせ言った。
「おぼっちゃん、お力になれなくてすみません。それじゃあ、ご心配でしょうね。梅里さんのご無事を祈っています。でもね、梅里さんは機転の利く人だから、男衆に捕

まる前に上手く逃げ出して、今ごろどこかで、得意の三味線を鳴らして、ほとぼりの冷めるのを待っていらっしゃるのかもしれませんよ」

きっと大丈夫ですよ、と藤蔵を慰めた。

「あ、そうだ。麹町の三味線と長唄のお師匠をしていらっしゃる宝泉先生を訪ねてみるのはいかがです。梅里さんは宝泉先生の一番弟子で、可愛がられていましたから。宝泉先生が、もしかしたら何かご存じかも。わっちも宝泉先生のお稽古に通っていたので、梅里さんとは宝泉先生の話でいつも盛り上がっちゃって。いえ、見た目は変だけどいい先生ですよ。情があって」

四半刻（三十分）後、市兵衛と藤蔵は日本堤端の掛茶屋で、緋毛氈を敷いた長床几にかけ、昼飯代わりのあやめ団子を頼んだ。

掛茶屋から浅草田町二丁目の河岸場が見えた。日盛りの白い日が降りそそぎ、数艘の艀が舫っていた。

嫖客を乗せているのだろうか、猪牙が山谷堀をゆらゆらと漕ぎ上ってくる。

幼い藤蔵は砂糖蜜を付けたあやめ団子の串を取って、黙々と頬張っていた。

まだ九歳である。

細縞の長着を裾端折りにし、黒の股引に黒足袋と草履の拵えがちょこんと緋毛氈の

上にかけているのは、人形のようだ。
心なしか元気なく見えるのは、姉の歌の行方がわからなかったためだろう。
「藤蔵さん。足りないでしょう。もう一皿いただきますか」
市兵衛は声を励ました。
「わたしは、もういいです」
藤蔵はあやめ団子の串を皿へ戻し、皿を脇へ置いた。
九歳の男児でも、心の痛みは同じなのだ。
「これから麹町へいきます。宝泉先生を訪ねましょう。手がかりが見つかるかもしれません」
藤蔵は、こくりと頷いた。眼鏡を指先で上げた。そして、
「姉さんは、わたしらを置いて逃げたりはしません」
と、小声になった。
市兵衛には藤蔵の言いたい思いが、痛いほどよくわかる。
「姉さんは、お父っつあんやおっ母さんがひどい目に遭っているのに、自分だけ逃げたりはしません」
わかっている、藤蔵さん。わかっているとも。市兵衛も繰りかえした。

掛茶屋の茶釜に湯気が吹いて、軒に吊るしたお休み処の旗が青白い空の中でちいさくゆらめいていた。

二

板場の出入り口の柱に凭れた渋井は、腕組みをして、剃り残しの髭が気になる顎を片方の掌でさすっていた。

助弥は板場と店土間を仕切る棚に両肘を乗せ、板場をのぞいている。

亭主が竈の前にいて、火の加減を見ていた。

薪がはじけ、竈から薄い煙が上っている。竈にかけた飯釜が、ぷすぷすと泡を吹き始めていた。七輪には大根と山芋、蒟蒻の煮物の鍋が甘い湯気を上げていた。

亭主の傍らには痩せ犬が、亭主の気持ちを映したかのように大人しく座っていた。

深川油堀の一膳飯屋・喜楽亭である。

「もしあいつが旦那の言う通り、危ない橋を渡っていやがったなら、こういう羽目にいつか落ちる覚悟は、当然していたに違いねえ。子供じゃねえだで。いい年をした野郎が決めたんだ。てめえで危ない橋を渡ってわが身に降りかかった災難を、他人のせ

いにしても始まるめえ」

　亭主が竈をのぞきつつ言った。

「危ない橋を渡ったと、決まったわけじゃねえ。ただ、勘平が疑わしいのは確かだ。火付けで大勢が家を失い、罪のねえ人が何人も殺された。佐賀屋の主人は未だに行方が知れねえ。とんでもねえ押しこみだ。必ず捕まえにゃあならねえ。おやじには気の毒だが、勘平が数少ない手がかりなんだ」

「なあに。おら、勘平のことは何年も前に諦めていただで、構わねえ。十年も音沙汰なしだった。あんな野郎、死のうが生きようが、別に変わりゃしねえ」

　言いながら、亭主の横顔がしょぼくれていた。

　仕切り棚に両肘を乗せてのぞいている助弥が、ふうん、と鼻息を鳴らした。

　勘平の亡骸は、一昨日の九月一日の昼すぎに亭主が引き取り、江川端の寺でひっそりと弔い、荼毘に付した。

「これも勘平と決まったわけじゃねえが、ひと月かそこら前、飯田町の蕎麦屋で勘平らしき男が見られている。蕎麦を食って牛込御門の方へ消えたそうだ。七月の下旬に顔を見せたとき、そっちの方角にかかわる話を、ちらっとでもしていなかったかい」

「なんにも話さねえ。仕事も宿も十年間どこをほっついて何をしてやがったかもな。

たとえ聞かされても、ろくな話じゃねえだろうが。親父が年だから気になって見にきてやったと、お為ごかしをぬかしやがったから、今さらなんだ、と頭に血が上って喧嘩をしただけで終わっちまったでよ」

「おれもどじだ。強請たかりと勘違いして、ぶん殴っただけで、ちゃんと確かめる間もなく逃がした。あのとき、怪しい野郎だと無理にでも追いかけてりゃあ、こんなことにならなかったかもしれねえ」

「旦那のせいじゃねえ。倅だから見逃してやってくれと、引き止めたのはおらだで。年端もいかねえのに母親に捨てられたのが不憫で、厳しく躾けたつもりでも甘かったのかな。不良になって家出、渡世人の末に盗人仲間に加わり、挙句の果てにあの死に様なら、おらが親父らしくあいつを育てなかったせいだ」

「てめえを責めるなよ」

渋井は顎髭の剃り残しを撫でた。

痩せ犬が、くうん、と亭主の傍らで鳴いた。

「うろ覚えだが、勘平の着ている物はそんなにみすぼらしくはなかったな。旅姿でもなかった。おやじよ、勘平の着物や持ち物で、煙草入れやら紙入れやら、履物、色柄模様とか形とかでも、気になったことはなかったかい。なんぞ、思い出せねえか」

「……」

亭主は竈の火を見つめ、しばらくぼうっと考えていた。

「手土産だ」

ふと、思い出したみたいにぽそと呟いた。

「あいつ、手土産を提げてきやがった。すぐに喧嘩が始まったで忘れていた。あれはなんだったっけ。そうだ、粟焼だ」

「手土産……家出をしていた倅が十年ぶりに親父の家に戻ってくるのに、手土産を提げてきたのか。殊勝じゃねえか。粟焼？　助弥、粟焼たあなんだい」

「へえ。粟を餅みたいにして餡で包んで焼いた菓子でやす。拇指くらいの大きさで一個一文。値段の割には案外旨くて、佐内坂の笹屋ってえ菓子屋が評判でやす。笹屋じゃあ笹の葉に乗せて客に出すそうでやす」

助弥が仕切り棚に凭れた格好のまま、渋井へ顔を向けた。

「佐内坂。市ヶ谷か。市ヶ谷なら勘平らしき男が牛込御門の方へ向かった方角と、あながち見当違いでもねえな」

「けど、粟焼は笹屋だけじゃなく山の手の名物で通ってやす。江戸からも粟焼を求めてわざわざ山の手へ出かけるくらいで、牛込やら小日向あたりの菓子所でも、売り出

してやすぜ」

「ほお、そうかい」

渋井の渋面がいっそう渋くなった。

「おやじ、勘平はそいつをどこで買ったか、なんてこたあ言ってなかったろうな」

「言ってねえし、訊いてもいねえ。こんな物で騙されねえぞ、と思っていたでよ」

亭主が竈の前から渋井を見上げた。痩せ犬と助弥も、顎をしきりに撫でる渋井を見た。渋井が今にも何かを言いそうだった。

「助弥、ひとっ走り、蓮蔵のところへいってくれ」

「へい、蓮蔵に。用件は」

助弥が仕切り棚から上体を撥ね上げた。

「手下を半分に分けて、半分はこれまで通り勘平殺しの訊きこみ、半分は粟焼を売っている山の手の菓子屋を一軒残らず廻って、先々月の七月の下旬、二十四、五、六、三十くらいまでの中背に痩せた……おやじ、あの日の勘平はどんな着物だったかな」

「ああ、どんなだったかな……」

亭主が目を閉じて首をひねった。

それから「着物は単で、柄は……」と、勘平の拵えをどうにか思い出した。

「そういう風体年ごろの、粟焼を買った客に見覚えがねえか、詳しい訊きこみに当たらせろ。ひょっとしたら、菓子屋の周辺に勘平の宿があるかもしれねえ。勘平が押しこみの一味だったとしたら、その宿には仲間も一緒だと思われる。勘平を思い出さなくとも粟焼を売る菓子屋の周辺で、芸人やら遍路やら、とにかく集団で宿を取っている者がいるかいねえかも訊き出すんだ」

「へい。先々月の七月の下旬、二十四、五、六、三十くらいまでの……」

と、助弥が復唱した。

蓮蔵と手下らの勘平殺しの探索は、本町、本両替町、本石町、本銀町を中心に行われている。

「おれはこれから常盤橋の辻番へ向かう。常盤橋からお濠端を飯田町までいって、途中のお濠端の辻番の番士らから、先夜の火事騒ぎの折り、お濠で気にかかる船を見なかったか、辻番に訊いて廻るつもりだ。すでに誰かが訊いているだろうが、おれ自身が訊いて念には念を入れておきたい。それから飯田町へいって、飯田町の自身番でおめえを待っている。おめえが先に自身番へ着いたら、おれがいくまで待ってな」

「飯田町の自身番で。承知しやした」

助弥は喜楽亭の腰高障子を勢いよく開け、飛び出していった。

朝の奉行用部屋の評議の後、渋井は飯田町方面の探索掛の若い平同心七人に、今日から飯田町の自身番を探索の出城にし、自分は遅くとも昼八ツ（午後二時）には自身番へいく。よって、訊きこみの始末は飯田町の自身番へ知らせるように、と指図してあった。

呉服橋の奉行所で知らせを受けるよりは、狭くとも飯田町の自身番で探索の指揮を執った方が知らせが早いし、速やかな行動に移りやすい、と考えた。

渋井が常盤橋の辻番の番士に、先夜八月晦日の火事騒ぎの混雑ぶりを訊いたのはそれから一刻（二時間）後だった。

もう二十年以上も常盤橋の辻番を務める壮年の番士は、火の手を逃れた周辺の住人が船へ荷物を積みこむのに河岸場がごったがえしていた中に、どこぞの船宿か貸船屋のものと思われる屋根船が艀に雑じっていたのを見覚えていた。

しかし番士は、接待が夜更けにまでおよんだ界隈の商人を送ってきて、たまたま河岸場に舫っていた折りに火事騒ぎに巻きこまれたのだろう、とさして怪しまなかった。

「金座屋敷の東側から本両替町の方で火の手が幾つか上がっておりましたので、東側の駿河町、室町や十軒店の大通りへ逃げる群衆に較べれば数は少ないですが、火の手

の西側の店の住人のほかに奉公人などが大勢お濠端へ逃げてきて、やはりここの河岸場も先夜は相当混乱しておりました」

それがしはあの辺りにて警戒に当たり――と番士は濠端の一角を示した。

「ご存じの通り周辺は両替商や老舗が多く、みな家財道具などより商いの書類帳簿類、商売品を荷車や背中に担いだりしており、濠端を逃げる者、船に荷を積みこむ者、常盤橋御門内へ逃げる者など収拾が付かず、それを整理するのに追われておりました。その屋根船にどこかの店の荷物を人足らが運びこんでいたのは確かです。しかしそれが佐賀屋の荷物だったのやら違ったのやら、そこまでは申せません」

屋根船が北の飯田町方面と日本橋川の南の方面、どちらへ避難したのか、それも見ていなかった。

「ですが、その屋根船の話をいたすのは、南町の方、北町の方、で、ただ今のそこもとで、三度目になりますよ」

番士は同じことを訊く町方の首尾の悪さに、苦笑を浮かべていた。

渋井は番士に礼を言い、常盤橋から濠端を北へ竜閑橋、鎌倉河岸から神田橋御門のある西へ取った。

濠端の辻番は、神田橋御門から一ツ橋御門までに三ヵ所、さらに飯田町の俎板橋へ

いたるまでの武家屋敷地の掘割端に三ヵ所あった。

順々に辻番の話を訊いて廻るうち、俎板橋の手前に設けた旗本屋敷組合辻番の番士が、本町と本両替町の火事騒ぎが起こってしばらくたったころ、掘割を俎板橋の方へ屋根船が漕ぎ上っていくのを見ていた。

「本町の方から火事を避けて立ち退いてきた船と思っておりました。大抵の船は南の方へ立ち退いておったようですが、中には飯田町の河岸場へ難を避ける船もありましたので。ほかに艀も幾艘か通りましたし、船饅頭らしき船も見ました」

船饅頭とは、女郎を乗せて客を誘う川船である。

「屋根船がどこの船かまでは、暗くてわかりません。障子を半ば開けて、商人らしき風体の人影も荷物の影と一緒に見えましたから、火事を逃れてきたのであろうと思い、誰何はいたしませんでした」

火事場から逃げるため、偶然、河岸場に居合わせた屋根船を借り受け、荷物と人が立ち退いてきた、というのはあり得ることだった。

渋井は屋根船が怪しい、と思ったのではなかった。

町方気質の粘っこい好奇心に、屋根船の話がちょいと引っかかった。それだけである。同じように、船饅頭か、とそれも引っかかっていた。

心に引っかかっても、重要な手がかりに結び付くのは百にひとつである。
うんざりするほど沢山の無駄の中からしか鍵は見付け出せない、というのが十二歳で無足見習いに奉行所へ上がって以来およそ三十年の勤めより学んだ、渋井の町方心得だった。
八ツの少し前、掘割端に設けた飯田町の自身番へ着いた。
今日から渋井の指図で働く七人の同心が待っているはずだった。
ところが、自身番にいたのは当番の町役人らと同心の椎名甲三郎ひとりだった。
助弥もまだきていない。
「おや、おめえひとりかい。ほかはまだ訊きこみ中だな」
渋井は自身番の四畳半に上がって、椎名と向き合った。
椎名はこの春やっと本勤格になったばかりの若い平同心である。
「じつは、事情が変わりました。わたしはそれをお伝えするため、渋井さんをお待ちしておりました」
は？　渋井は口を開けた。
「先ほど、佐賀屋の主人・介右衛門の死体が大川下流、永代橋の橋桁にかかっているのが見つかったのです。介右衛門は溺死ではなく、首を絞められた後、重しを付けて

大川へ捨てられたと思われます。身体中に荒縄が絡んでおり、縄がゆるんで重しが解け、流された模様です。それで佐賀屋押しこみの一味は、船で日本橋川から浜町、新大橋の方面へ抜けたことほぼ確実との判断にいたりました」

「それで飯田町の掛はそっちへ廻された、ってえのかい」

「さようです。北町が本所深川向島、南町が日本橋以南、品川までを分担とし、虱潰しにせよとの上からの指示です。渋井さんも、深川へ急遽向かうようにと……」

「冗談じゃねえぜ」

渋井が言いかけた椎名を遮った。

「そんなことをして賊がこっちへ逃げていたら、手がかりを失っちまうじゃねえか」

「ですから介右衛門の死体が上がって……」

「餌だよ、餌。介右衛門の死体を餌にしやがったな。見え透いた手を使いやがって」

唇を歪めた渋井の渋面は、ますます景気が悪くなった。

「渋井さん、わたしらもいかねば」

「いいんだよ、椎名。じっとしてろ」

渋井は腕組みをして考えこんだ。

自身番には飯田町の当番と店番に、書役の三人が詰めていた。

書役が渋井へ、「どうぞ」と茶碗を椎名の後ろからそっと差し出した。
渋井は茶碗に口を付け、ぐっと呷った。途端、
「あちっ」
と、顔をくしゃくしゃにした。
「渋井さん、そろそろ……」
椎名がぼそと言った。
「椎名、おめえ、手柄を立ててえか」
渋井は渋面に戻って言った。
「手柄？　ええ、そりゃあまあ、立てられるものなら」
「立ててえなら、おめえはおれの指図に従って、飯田町界隈の訊きこみを今まで通り続けるんだ。徹底してな」
「そうしますと、上からの深川本所、向島方面という指図はどうするんですか」
「いいか。賊は玄人だ。朝の評議でも言っただろう。玄人が、手がかりになる介右衛門が二、三日で見付かるような始末をすると思うか。賊がこっちの方だぜと思わせるように、探索方を誘っていやがるんだ。これでますますはっきりした。やつら、盗んだ金を飯田町へ船で運び、河岸場で別の荷物に仕立てやがった。間違いねえ」

断言しながら、渋井にはなんの根拠もない。
ただ、この一味はそんなにわかりやすい痕跡を残すとは思えないだけである。
「責めはおれが負う。おめえはおれを手伝え」
はあ、ですが……と椎名は困っている。
「常盤橋からここへくる途中、濠端の辻番を一軒一軒廻って、火事騒ぎの折りにお濠を通った船の訊きこみをしてきた。そしたら、常盤橋から立ち退いた船の中に屋根船が一艘雑じっていて、番士が屋根船に人足が荷物を運ぶのを見ている。屋根船なら船宿か貸船屋の舟遊びだ。荷物を運ぶ艀らしくねえ。たまたま居合わせたとも考えられるが、飯田町への掘割でその屋根船が通るのを濠端の別の辻番も見たと言っていた」
「ああ、その屋根船でしたら調べましたよ」
椎名があっさり言ってのけた。
「え？　調べたのかい」
「はい。わたしが訊きこみをしました。牛込の揚場町の貸船屋《菱川（ひしかわ）》の船です」
「菱川。ここの河岸場で屋根船を見たのがいるのだな」
「というより、船饅頭の男と女郎が見ておりました。こおろぎ橋の堀留に停泊しているのをです」

「船饅頭？　おめえ、船饅頭と遊んだのかい」
「止めてください。訊きこみをしたんじゃないですか」
自身番の町役人らが笑いを堪えた。
「船頭が艫で竿をつかんでうつらうつらしているのがわかったので、船饅頭の男が船を寄せて声をかけたら、お客さんを乗せているからあっちへいけ、と追い払われたそうです。船は障子戸を立てて真っ暗で、船饅頭は客が中で寝ているんだろうと思った、と言っています」
「船饅頭は先夜の河岸場の様子をどう言ってた」
「艀やらその屋根船やらが数艘舫っていたが、屋根船の船頭以外人気もなく、いたって静かだったと言っておりました。ただ半鐘の音は長い間、聞こえていたと」
「ふうん、人気がなく静かだったか。菱川の訊きこみはやったんだろうな」
「揚場町へいってまいりました。菱川の主人の話によりますと、八月晦日は数日前より晦日の昼すぎに船を借りたいという依頼があったもので、当日、船頭と屋根船を出しています。客は三人、というか、船を借りた商人が客二人を舟遊びに接待したとかで、夜更けてひとりの客を常盤橋まで送った折りも折り、火事騒ぎに巻きこまれて仕方なく飯田町まで難を避け、火事が治まるまで待ったということでした」

「なぜ飯田町だった。日本橋川方面へ逃げたら大川に出られて、戻るのに都合がよかったんじゃねえか」

「当夜の船頭にも会って話を訊いたところ、飯田町はお客さんの要望だったそうです。火事騒ぎで船を降りるに降りられず、火事が治まってから鎌倉河岸でお客さんをひとり降ろしたのです。船が菱川に戻ったのは夜明け前だった、大変だった、と主人と船頭が口を揃えておりました」

「船頭の名は」

「名は重吉、菱川で十五年以上も船頭をやってきた四十代の男です。怪しいところはありません。菱川も先代から揚場町で貸船屋を営むお店ですし」

渋井は茶を今度は慎重に口に含んだ。

勘平らしき男が牛込御門の方へ姿を消した、という話が思い出された。

「客の方は？」

「音羽の美濃屋という古着商の番頭です。昔から菱川を舟遊びの接待などに使ってくれるお得意だと、主人が言っておりました」

「音羽か。ずいぶん遠いな。で、八月の晦日に美濃屋は誰の接待だった」

「誰のと言いましても、接待は接待ですから……」

椎名が口ごもった。
「なんだ。美濃屋の話は訊いてねえのか」
「あ、はい。菱川の話を訊いて、これ以上調べても何も出ないと判断しました。それより飯田町の訊きこみを優先した方がいいと思い」
「ちぇ、念には念を入れろってえ鉄則があるだろう」
渋井はうなった。腕組みをし、剃り残しの髭が気になる顎を指先で撫でた。
「旦那、いってめえりやした」
自身番の外で声がした。
書役が自身番の障子戸を開けると、助弥が表の砂利土間に立っていた。
助弥の後方に見える河岸場では、午後の白い日が降りそそぐ中、荷船から軽子が荷物を河岸場へ上げていた。数人の人足が荷車を、がらがらと賑やかに曳いてゆく。
「おお、ご苦労だった。すぐ出かける」
渋井は立ち上がり、刀を腰に差しながら椎名に言った。
「おめえは飯田町内の訊きこみを、徹底して続けろ。きっと誰かが何か様子の違った荷物を見ている。誰も怪しまねえから怪しい。そういう荷物だ。そいつを見付け出すんだ」

「本当に、こんなことをしていていいんですか」
「いいんだ。おれを信用しろ。手柄を立ててえんだろう」
渋井はいかり肩をゆすって猫背の背中をさらに丸め、若い椎名へ渋面を不敵に歪めて笑いかけた。

三

「勘平らしき男はこの道を下っていったそうだ。この道なら牛込御門の方と考えても変じゃねえ。ここから先、牛込御門外まで町家はねえし、勘平の風体から、武家屋敷の奉公人にも見えなかった」
渋井と助弥は、飯田町より二合半坂（にごうはん）の武家屋敷地を下っていた。
「牛込御門をすぎて、牛込、市ヶ谷、辺りの山の手なら、入り組んだ武家屋敷の間に町家が散在していて、わかりにくいっちゃあわかりにくいすよねえ」
「神楽（かぐら）坂を上って、赤城明神（あかぎみょうじん）界隈、牛込をすぎて榎町（えのき）、早稲田、案外、音羽辺りも怪しいかもな」
「早稲田やら音羽でやすか。遠いけど、江戸でひと働きするための隠れ場所にはいい

かもしれやせん」

助弥は大股でゆっくりと渋井の後についている。

やがて二人は牛込御門の土手道に抜け、濃紺に澱む濠を越えて牛込御門外へ出た。

揚場町は牛込御門外から船河原橋の途中の堀端にある町家で、尾州様の物揚場の河岸がある。

河岸場人足の軽子が多く住み、菱川は軽子坂の降り口の土手道に仕舞屋ふうのくすんだ店を構え、《かし舟あり》の汚れた旗が軒に下がっていた。

土手下の河岸場の一隅に屋根船が三艘と猪牙が一艘、係留してある。

半着に手拭を帯に巻いて、赤い褌の尻を丸出しにした船頭風体の男が、屋根船の板子を洗っていた。

髷に白いものの雑じった菱川の主人は、店の間の上がり端に腰かけた渋井に八月晦日の屋根船を貸し出した経緯を話し、

「ともかく、当日の船頭を務めた重吉を呼びましょう」

と、呼ばれて店土間に現われたのが屋根船を洗っていた赤い褌の男だった。

重吉の年のころは四十五、六。日に焼けた分別盛りの顔をしていた。

「へえ。ありゃあ、吃驚しやした。河岸場へ船を着けようとしたところへいきなり半

鐘がけたたましく鳴り始め、それが次々と伝播していきやして、江戸中の半鐘が鳴ったみてえでごぜえやした。そしたら、町家の暗い夜空が見る見る赤く染め上がっていきやしてね。お客さんは船を降りるか降りないか迷われて、ぐずぐずしているうちに人が河岸場へ押し寄せてくるわ、常盤橋からは警戒のお侍方が渡ってくるわで……」

先夜の火事騒ぎの模様を、重吉は小腰を屈め、澱みなく語った。

常盤橋の辻番の、艀などの中に屋根船が一艘雑じっていて、人足らが荷物を積みこんでいたという目撃話については、

「そいつあ、うちの船じゃあごぜえやせん」

と、即座に否定した。

「お客さんを乗せておりやした。河岸場は大騒ぎで、こりゃあまずいと大急ぎで船を出し、お客さんのご要望で飯田町へ難を避けたんでごぜえやす。幸い、火事騒ぎは一刻半（三時間）ばかりで静まり、ころ合いを見計らって船を戻し、これもお客さんのご要望で鎌倉河岸で降りられたんでごぜえやす。

……屋根船の話は辻番の方の勘違いでごぜえやしょう。暗いお濠でどこまで見えたか。うちの船は間違えなくお客さん三人しか乗っておられやせん。飯田町の堀留にゃあ荷船や艀がやっぱり火事を逃れて何艘かきやして、いっとき、荷物を河岸場へ揚げ

るのに騒がしかったが、荷物を運び去ってしまうと堀留は静まりかえり、後は半鐘の音ばかりがやけに鳴り続けておりやした。

お客さんは障子戸を立てた屋根の下で休んでおられ、おらは艫で棹をこう抱えて、日本橋の方の夜空を睨んでおりやした。飯田町からはお城に隠れて、本町辺りの空は見えやせんが。船饅頭が、おまん、おまん、と漕ぎ寄せてきたのは確かに覚えておりやす。用はねえ、と追い払いやしたが。

ほかにうちのような屋根船が泊まっていたかどうかなんて、ちゃんとは見たわけではねえので、覚えがごぜえやせん。辻番の方が見られた屋根船があるんなら、そいつあ日本橋川の方へ逃れたんじゃごぜえやせんか。おらもお客さんのご要望がなけりゃあ、一旦、大川まで漕ぎ出したでごぜえやしょう。とにかく、あの火事騒ぎではみな慌てふためいておりやしたもんで……」

と、重吉はそんなふうに話した。

確かに常盤橋近辺は火事騒ぎの大混乱。河岸場を離れれば、八月晦日の月もない真っ暗闇だ。ああだったこうだったという証言の、どれほどが当てにできるだろう。

それもそうだ、と渋井は頷くしかなかった。

椎名の言った通り、重吉の証言に不審はなかった。

しかし、重吉も主人も乗せていた客については、
「お客さんに障りがあると、ご迷惑になりやす。それは何とぞ、船をお借りいただいた音羽の美濃屋さんでお訊き願いやす」
と、腰を折るばかりだった。

白堀端を小日向水道町に出て、音羽の九丁目橋を渡った。
音羽は場末にありながら、青柳町とともに古町同様の町方支配である。
参詣客が広い御成道にちらほらいき交う遠い彼方に、護国寺の杜が霞んでいた。
美濃屋は音羽町五丁目に間口七、八間の表店を構える古着屋だった。
店の暖簾をくぐり、手代に「ご主人はご在宅かい」と、訊ねた。
折りしも、仕入れの古着らしい大きな長櫃を積んだ荷車が、店の表にがらがらと着いて、人足が長櫃を賑やかに運び入れた。
「ここでは狭おございます。どうぞ奥へ」
渋井と助弥は、帳場格子にいた番頭らしき奉公人に店奥の客座敷へ通され、茶が出された。
すぐに年配の小柄な主人と、三十すぎのやや大柄な、いかつい風貌の手代が現われ

た。

手代は縞の長着で、黒い前垂れをかけていた。

二人は畳に手を突き、主人が言った。

「この者はてまえどもに奉公いたしております惣十郎でございます。てまえどもに勤めて五年ほどでございますが、奉公人らの中心に立って働いております。番頭は小僧から奉公した年嵩の者にやらせており、惣十郎は言わば副番頭と申しますか、番頭補佐とでも申しますか。ははは……」

「惣十郎さんはこちらで五年。ではその前はどちらに」

「はい。奥州水沢の呉服太物問屋に奉公いたしておりました。新調の呉服太物はお客さまが限られており、幅広い商いを考えればやはり古着と考え、思い切って江戸へまいりました」

惣十郎は顎の尖った青白い顔に、不敵な笑みを浮かべ渋井を睨み上げた。

「そうかい。江戸はどうだい」

「さすがは天下の江戸は水沢あたりの田舎とは、大きさ人の多さ豊かさ、どれを取っても比較になりません。ただただ、驚くばかりでございます」

「八月の晦日は惣十郎が揚場町の菱川さんで船の手配をいたし、お得意さまの接待に

当たったのでございます」
「先夜は大変な出来事にぶつかり、本当に驚きましたし疲れました」
と、惣十郎は受けて、三日前の昼すぎより始まり、翌未明までかかった供応の顛末をつぶさに語った。
菱川の船頭・重吉の話と食い違うところはなかった。
「まだ明るいうちよりですし、お酒も少々いただいておりましたので、飯田町で火事騒ぎが治まるのを待っている間は、もう眠くて眠くて難儀いたしました。ええ、ええ、船饅頭がきたのも存じております」
「接待はずうっと船でかい。そりゃあ無理だよな」
「まあ、大体船で……ただ途中で、お客さまが陸に上がられ、お供をさせていただくということもございましたが」
主人が惣十郎をちらと横目で見て、惣十郎は広い肩をすぼめて目を伏せた。
「陸へ？　河岸場はどこだい」
「向島で、ございます」
「向島のどこだ」
「それは、申し上げかねます」

「もしかして、接待の客たあ、男と女の二人かい」
主人が口をへの字に結び、惣十郎はぺこりと頭を垂れた。
「夫婦（めおと）か」
「いえ。ごくお親しいお二方でございます」
「どういう親しい間柄だ」
「ご想像に、お任せいたします」
ふざけんな、と渋井は思わず怒鳴りそうになるのを抑えた。
「客は誰だい」
「おひと方はさるご身分のお侍さまでございます。ご承知とは存じますが、わたしども古着屋は裕福な方々、ご身分のある方々の上等なお召物を古着として扱わせていただくのがもっとも儲けが大きゅうございます。お侍さまには長年、美濃屋をごひいきにしていただいており、何とぞお名前はお許しを願います」
「常盤橋御門外の河岸場へ、夜更けのあの刻限にいったわけは」
「おひと方をお送りいたしました」
「送っていったのは、お侍の相方の方かい」
惣十郎は頷いた。

「お侍の相方は町人の女房か」
「何とぞこれ以上は、ご容赦を」
渋井の後ろに控える助弥が咳払いをした。
身分のある侍と町人の女房の密会の橋渡しが供応かい。たとえば、お屋敷御用達の商人の女房とかな。面白くねえ。
「菱川の重吉という船頭は、そんなことを何も言っていなかったな」
「見たことはどなたにも話さぬように、と念を押しましたので、重吉さんはそれを守ってくれたのでしょう」
渋井は鼻の頭が痒くなった。
「美濃屋さん、本町と本両替町が火付けの火事に見舞われ、そのどさくさに本両替商の佐賀屋が押しこみに遭った。大金が強奪され、人も大勢殺された凶悪な押しこみ強盗だ。当然、知っているわな?」
美濃屋の主人と惣十郎が揃って頭を垂れた。
「美濃屋さんを疑ってどうのこうのの訊きこみじゃねえんだ。惣十郎さんの接待の屋根船が、八月晦日の夜、常盤橋御門外の河岸場に、しかもまさに火付けと押しこみのあったその刻限に居合わせた。偶然、そういうことだってある。だがたとえ偶然で

も、確かめるまでもねえとわかっていても、あくまで念のために裏を取っておかなきゃあならねえんだ。できれば協力してほしいんだがな」

美濃屋の主人が惣十郎を向き、「どうだい」と訊いた。

「それは困ります。事が事だけに、名を出せば、今後、お屋敷に美濃屋の出入りが間違いなく禁じられますでしょう。ですが、それでもと旦那さまが思われますなら、旦那さまのお好きなようになされればよろしいかと」

惣十郎が少々棘を覚える言い方をした。

「いいよ、いいよ。そんなつもりはないよ。お客さまのことはおまえに全部任せてあるのだから」

主人が惣十郎をなだめた。

「わかった。大よそのところは見当が付いた。今日はこれで結構だ。訊きたいことができたら、またくるかもしれねえがな。助弥、いくぜ」

渋井が刀を取って、助弥に声をかけた。すると、

「お役人さま、先夜の押しこみで佐賀屋さんのご主人が連れ去られたとうかがっております。佐賀屋さんの安否はまだわからないのでございますか」

と、惣十郎が畳に手を突いて訊いた。

「気になるのかい」

「火事騒ぎの折り、河岸場でみなが混乱しているのがわかっていながら、お客さまの都合ばかりが気になって、船を出させてしまいました。後で佐賀屋さんの押しこみの一件を知り、とても後ろめたくてなりません。せめて佐賀屋さんがご無事で戻られれば、と願っております」

「神妙な心がけだ。だがな、今日の昼ごろ、佐賀屋の主人の亡骸が大川の永代橋の橋桁に引っかかっていた。まったく、人を虫けらみたいに殺しまくりやがった。ここまで残酷な一味は覚えがねえ。初めてだ」

「永代橋に。なんと酷いことでございますねえ。昨日読みました読売では、賊は船で逃走した見こみと、書いておりました。ということは、賊は大川の方へ逃げたのでございましょうか」

「ああ、間違いねえ。賊は深川か芝、三田、品川辺りまでのどっかにねぐらを構えていやがるのは明らかだ。そっちを南北町方、総がかりで隈なく洗うつもりだ」

「そのような極悪非道の押しこみ一味、お役人さまが見事お縄になされますよう、お祈りいたします。そのような賊がお縄になるまでは、わたしども商人は枕を高くして眠ることができません。よろしくお頼みいたします」

「おお、任せろ。必ずひとり残らずお縄にして獄門台へ乗せてやる」
渋井は立ち上がり、刀を差しながら惣十郎へ笑いかけた。

四

音羽の御成道は、入日に間近い町影に覆われていた。
ひやりとした気持ちのいい秋の冷気が、渋井と助弥の頬を撫でた。
二人は五丁目から九丁目橋へ向かっていた。
「旦那、美濃屋の惣十郎さんに何かご不審なんでやすか」
助弥が後ろから訊いた。
「いや、別に。商家の手代なんて、あんなもんだ。なぜだい」
「さっき、賊は深川か芝、三田、品川辺りまでのどっかにねぐらを構えていると仰ったじゃねえですか。旦那の見立てでは、賊は牛込御門外の山の手方面にねぐらを構えていると、睨んでいらっしゃるんでやしょう。惣十郎さんに不審を覚えたから、わざとああ仰ったんじゃねえんですか」
「面倒だからさ。どうせ奉行所の狙いは読売が嗅ぎ付けて書き立てる。こっちの狙い

までわざわざ話すのは厄介だからよ」

渋井の背中が嘯いた。

しかし助弥は知っていた。こういうときの旦那は、背筋が粟立つほどの切れ味鋭い勘を心の奥に秘めていることをだ。

「あのな、助弥……」

と、旦那の背中がとぼけた口調で続けた。

「おれの親父はひねくれた町方だった。ひねくれ根性でおれを育てやがった。おれが無足見習いに親父の尻に付いて奉行所へ上がったころ親父が、いいか鬼三次、覚えとけ、と言った。無駄の中からしか役立つ物は見付けられねえ。人によかれとやっているとお為ごかしを言うやつほど、てめえのためにしかやりはしねえ。みなで心をひとつにしてというのは、ひとりひとりの負う責めを見えなくしちまうってな」

助弥は、妙なことを言い出した旦那に応える言葉が見付からなかった。

「怪しいやつは一番怪しくないところに隠れていやがるのさ。汚いやつほど綺麗なところに住みたがる。知っているかい。蛆虫は腐った飯にたかったりはしねえ。食べごろの新鮮な飯にしか、やつらはたからねえんだ。ははは……」

助弥は「はあ?」と首をひねるばかりだった。旦那がそんな助弥へ振りかえり、

「見ろ、大清楼はあそこじゃねえか」
と、八丁目と九丁目の境の西横町へ顎をしゃくった。
日の陰った青白い横町通りの先に、周辺の軒提灯が明々と灯り始めた表店とは様子の違う暗く沈んだ店先が見えた。
料理茶屋の呼びこみが、通りかかりに声をかけている。
局見世の客引きも中に雑じって、三日前の警動などなかったように客を引いていた。
「市兵衛さんがいらっしゃるかもしれやせんぜ。旦那、ちょいと挨拶しやしょうか」
「止めとこう。あそこは町方に散々いじめられたんだ。おれたちがいっても、内心はいい気持ちはしねえだろう」
「そうでやすねえ。いい気持ちはしやせんよね」
渋井は両袖に手を仕舞い、肩をほぐすように廻しつつ歩みを進めた。
日の陰った表通りに立ち並び始めた客引きは、さすがに町奉行所同心定服の渋井には声をかけなかった。

そのころ、市兵衛と藤蔵は三味線と長唄の師匠・宝泉の裏店にいた。

そこは半蔵御門外から西へ四谷御門にいたる中ほどの麹町六丁目。善国寺横町の、なんきんとうふ、かご目とうふ、と表障子に記した《かしはや》の脇路地を入ってすぐにある二階家だった。

三味線と長唄指南の稽古場の座敷らしく、三味線の筥が二本と長唄の賦をお浚いするための見台が四つ、壁際の箪笥脇に寄せてあった。

腰障子を両開きにして濡れ縁と小ぢんまりとした庭があり、板塀の上に見越しの松が伸びていた。

吉原の雲井に教えられ、市兵衛と藤蔵は船で四谷御門まできて、麹町の宝泉の裏店を訪ねた。だが宝泉は出稽古で留守にしており、戻りは夕刻になる、と留守を預かる下女の婆さんが言った。

二人は出直すことにし、平川天神詣りをして歌の無事を祈った。それから天神側の馬の調練場へ廻り、数頭の馬が士の調練を受けている様子を眺めてときをすごした。

市兵衛には懐かしい馬場だった。

幼いころ、兄の片岡信正が馬の調練に汗を流すのに、危ないからよせ、と叱られるのも構わず、信正の馬を追いかけて走った馬場だった。

才蔵という幼名だったあのころだ、己の身体が風に乗る覚えに夢中になったのは。

昨日も今日も明日も、自分はこの風の中にいる、と幼い市兵衛は思っていた。

日がだいぶ傾いて西の空が赤く染まり出したころ、市兵衛と藤蔵は善国寺横町の宝泉の裏店を再び訪ねた。

留守番の婆さんが、

「たった今戻られたところです。着替えていらっしゃいますので、少々お待ちを」

と、その稽古場の座敷へ通したのだった。

婆さんが行灯に灯を入れ、それから茶菓が出た。

ほどなく、黄はだ色の派手な小袖に臙脂の袖無羽織を羽織った宝泉が、足を小股にしなしなと歩ませ現われた。

町医者のような剃髪に、大柄な部厚い身体付きの壮漢だったが、言葉遣いはいたって優しかった。

「ご免なさい。お待たせしてしまって」

宝泉は端座した市兵衛と藤蔵へ向き合い、浅黒い大顔をなごませた。

藤蔵がぽかんと宝泉を見上げた。

「あなたが藤蔵さんね。宝泉です。驚いた？」

宝泉がにんまりと笑いかけ、言った。

「い、いえ……」

藤蔵は眼鏡の縁を指先で上げた。

「お歌ちゃんができのいい弟だって、よく自慢していたわ。賢そうな顔をしているのね。番町の光成館の入門を目指しているんでしょう。あそこは身分家柄じゃなくて、本当にお勉強のできる人しか入門を許されない塾なんですってね。ご近所のお武家のおぼっちゃん方も、光成館へ入門できるならって、みなさん必死よ。どお、お勉強の方は進んでいるの？」

「先日の試問で、にゅ、入門を許されました」

「まあ、入門が決まったの。偉いわねえ。立派よ。お歌ちゃんもますます自慢に思っているでしょうねえ」

藤蔵がうな垂れた。

「そのお歌さんのことで、おうかがいいたしました」

と、市兵衛が幾ぶん身を乗り出した。

宝泉が、藤蔵からくるりと市兵衛へ眼差しを移した。

「あなたですね。お歌ちゃんが言ってたわ。風の市兵衛さん、でしょう」

は？　風の……

市兵衛は戸惑った。

「藤蔵さんに算学とやらを教えている変な先生だって、市兵衛先生のことを話してくれたんですよ。お目にかかりたかったわ。やっぱりね、ふうん」

宝泉は市兵衛を見つめて、意味ありげな笑みを頬かせた。

「へん、ですか」

「変よ。お歌ちゃんが言うのも無理ないわ。でも変なのはね、お歌ちゃんのここが変なのよ。お歌ちゃんの心、が……」

宝泉は手を胸にあてがい、甘ったるく言った。

その仕種に、深刻な顔付きだった藤蔵が吹き出した。

「それはそれといたし、お歌さんのことなのですが……」

おかしかったが、市兵衛は笑っていられなかった。

「ああ、そうそう。大清楼さんが大変だったんですってねえ。噂は存じています。ひどいことをするわねえ」

宝泉は途端に眉を曇らせ、掌を合わせた。

「大清楼さんのご様子は、いかがですか？」

はい――と、市兵衛は三日前から今日までの経緯と、行方がわからなくなった歌を

捜して吉原から麹町へきた事情を語った。

宝泉は目を丸くし、口を大きな両掌で覆った。

「じゃ、じゃあ、お歌ちゃんが行き方知れず、神隠しに遭っちゃったって仰るんですか。信じられなあい」

宝泉の声が甲高く家中に響いた。

市兵衛は、宝泉先生がもしや歌の行方を探る手がかりをご存じかもしれぬと考えうかがった、と重ねて言った。

「ああ、まだ胸がどきどきする。ご免なさい、先生。藤蔵さん。ご心配なことね。でもわたし、存じ上げません。町方と吉原の手入れが大清楼に入ったと聞いたのは一昨日です。お歌ちゃんは今ごろ後始末に忙しくしているのだろうな、手伝いにいかなきゃあ、と思っていたくらいなんです」

「お歌さんは連れ去られたとしか考えられません。たとえ身に危険を覚えても、自分だけ姿を晦ますことはしない人です」

「そうね。お歌ちゃんはそんな人じゃないわ。自分のことより、お父っつあんやおっ母さんのこと、藤蔵さんのことを先にと思っている人だもの」

「宝泉先生は、吉原の男衆でなければ、お歌さんを誰が連れ去ったと思われますか。

わたしたちは途方に暮れています。ほんのささやかな見こみでも、お心当たりがあれば教えていただきたいのです」

「お歌ちゃんは人気が高かったですものねえ。十六のとき、お歌ちゃんがうちへ稽古に通い始めて、麹町のお店のぼっちゃんや番町や赤坂方面のお武家屋敷のおぼっちゃんたちの、うちへお稽古にくる数が増えたんです。中には大名屋敷の勤番のお侍さんなんかもいらっしゃって、みんなお歌ちゃん目当てで、音羽の大清楼さんへ遊びにいく人もいましたし」

そう言えば、歌を後添えにと望んでいる味噌醤油問屋の主人も麹町、と歌は言っていた。

四谷御門とこの六丁目までの衆目の中を、見目麗しき歌の歩むさまが目に浮かぶ。

もしやあの歌が、と思うだけでも市兵衛の胸は痛んだ。

「ほとんどお役に立てないと思いますけれど、お歌ちゃん目当てにお稽古にきていた方々も、訪ねてみますか。お住まいならお教えできますよ」

「その方々には決してご迷惑のかからないように配慮いたします。話を訊くだけでも万が一の手蔓が見付かる見こみがないとは申せません。何とぞ、お願いいたします」

「そうですね。では思い付く限りの方々のお名前とお屋敷お住まいなどを書き留めて

きます。少々お待ちを」

宝泉は畳を鳴らし、いそいそと部屋を出た。

半刻後、市兵衛と藤蔵は四谷御門外の河岸場から船に乗った。

川筋は暮れなずみ、青味がかった夕空に星がまたたいていた。

宝泉が、夕餉をぜひご一緒に、と勧めるのを、藤蔵の両親が大清楼で心配して待っているゆえ、と丁重に断わり、二人は夕暮れの麹町を帰途についた。

船頭の櫓を漕ぐ音と川面を滑るかすかなゆれに身を任せ、疲れた幼い藤蔵は船端に凭れ、こくりこくりとし始めた。

川縁の水草の中で鶺鴒の鳴き声が聞こえ、とき折り、鳥影が川面をすれすれに矢のように滑っていった。

胴船梁の市兵衛は、船縁に顔をぶつけそうな藤蔵を抱き寄せ、膝に凭れて眠れるようにしてやった。

睡魔に負けた藤蔵は市兵衛のなすがままだった。

船が江戸川橋の河岸場に着いたとき、夜の帳は川筋をすっかり包みこんでいた。

市兵衛はぐったりとした藤蔵を軽々と背中に負い、船頭に礼を言い船を下りた。

堤へ上がると、小日向水道町の暗い町影の向こうに、九丁目橋と提灯や軒行灯が華

やかに折り重なる音羽の町明かりが、御成道に連なっているのが見渡せた。
歩みかけたとき、市兵衛は背後よりの眼差しを感じて、ふと、振りかえった。
江戸川橋の南詰に佇む人影があった。
闇にまぎれて見分けは付かないが、饅頭笠の僧に見えた。
手には長い杖を突いている。
暗い江戸川橋を挟み、市兵衛とその僧の影は動かなかった。
音羽の町で客を引く女の嬌声に雑じって、犬の鳴き声が聞こえていた。

第八章　粟焼

一

九月九日、九陽の数にかなう重陽の節句も、渋井には菊の宴どころではなかった。南北町方が総がかりで八月晦日の佐賀屋押しこみ一味を追うものの、探索は停滞したままだった。

九月三日、永代橋の橋桁にかかっていた佐賀屋主人の絞殺体発見以来、賊のねぐらを大川向こうの深川、本所、向島、日本橋以南の芝、三田、品川宿までと判断し、町地のみならず寺社や武家地へも探索の手を広げていたが、成果はもたらされなかった。

もしや一味のねぐらは北の方ではなかったか、と町方の中には言い出す者も出始め

ていた。もしそうなら、町方支配役の判断は、八月晦日の音羽町九丁目への北町奉行所警動に続く初動探索の失態である。

読売が見てきたかのごとく、賊は江戸を去って候、と町方の不手際を書き立てた。意地と焦りが南北両奉行所を重苦しく包んでいた。

「くそ、ざまあ見やがれ」

町方支配役の盆暗頭を罵りながら、渋井が平同心の椎名甲三郎を指図して飯田町と牛込御門外の山の手を中心に続けている訊きこみにも、まったく進展はなかった。なんでだ。何を見落としている。渋井も内心焦っていた。

重陽の節句のその朝、渋井と椎名がじりじりと待っていた飯田町の自身番の四畳半に、助弥と若い奉行所の中間、同行した飯田町の町役人に囲まれ、武家屋敷の黒看板（法被）を纏った中間が上がってきた。

黒看板の中間は、御臺所町の旗本屋敷に一季奉公で雇われている若い男だった。

中間は夕べ、飯田町の煮売屋で同じ渡り奉公仲間と一杯やった。

呑みながらの話の種が、八月晦日の本両替商・佐賀屋押しこみの一件に及び、中間は「この界隈でも町方が怪しい荷物の訊きこみをやっているそうだが、じつはおれも九月一日の早朝、おや、と思う荷車を見たぜ」と面白げに話した。

それを煮売屋に居合わせた飯田町の表店の男が聞いていて、中間に話しかけた。

九月九日が自身番の店番だった表店の男は、当番の町内五人組の家主に夕べ中間から聞いた話を告げた。

当番の家主は、「どんなささいなことでも」という言い付けを守って、三日以来、毎朝、飯田町の自身番へ通ってくる渋井と椎名に、それを報告した。

押しこみ探索の訊きこみでも、町方が武家屋敷の訊きこみをするのは難しいし、人手も足りなかったため、武家地への探索は殊に進んでいなかった。

渋井は早速、助弥と奉行所中間とともに店番の男を御臺所町の旗本屋敷へ使いに出し、その中間を自身番へ呼んだ。

主家の許しを得て助弥らにともなわれ自身番へやってきた中間は、町方定服の黒羽織の渋井と椎名の前へ畏まると、

「酒の勢いで、ちょいと大袈裟に言ってしまいました」

と、いきなり言いわけを始めた。

実際、期待したほどの話ではなかった。

九月一日の早朝、主人の使いで飯田町もちの木坂上の武家屋敷へ向かっていた中間は、ちょうどもちの木坂下の辻に差しかかったところで、辻に近い石切り場から荷車

が引き出され、お堀の方角へ通りを折れてゆくのとすれ違った。
荷車は大きな長持を三つほど積んでいて、前に取り付けた楫を引く者と後ろから押す者の六、七人の人足がいた。
「立派な長持でしたが、長持三つの荷車にしては人足の数が多いし、それとなんで石切り場なんだ、と妙には思いました。けど、荷車を運ぶ途中、小石川か牛込かの御門が開くまで石切り場で一服でもしていたのかな、と考えたぐらいで……」
御門が開かれるのは早朝六ツ（午前六時）である。
中間は前夜の火事騒ぎは知っていた。だが佐賀屋押しこみの一件は知らなかった。それでも、おや、と思ったのは、荷車に《桜井家御用》の立札が読めたためだ。
中間は十代のころから武家の渡り奉公をしていて、三年ほど前、目白台鉄砲坂の桜井長太夫という旗本屋敷に奉公したことがあった。
「桜井さまは御持筒組頭に就いておられます二千石のお旗本です。桜井さまなら目白台の鉄砲坂。荷物が長持でしたので、こんなところで朝早くからどなたかのご婚礼用の荷かな、とか、ほかに桜井というお武家がいらっしゃるのかな、とか思いました。けれど、おや、と思ったのはそれだけのことだったんです。まったく、お騒がせして相すみません」

中間は、髷に手をやり、繰りかえし恐縮した。
椎名は、なんだ、という顔をしていた。
しかし渋井は、それだけ、とは思わなかった。
桜井という旗本が目白台の鉄砲坂なら、鉄砲坂の下は音羽である。
音羽には古着屋・美濃屋が店を構えている。
美濃屋の手代・惣十郎が揚場町の貸船屋・菱川の屋根船を借り、八月晦日の昼すぎから接待したお身分のある侍とは、まさか桜井家ではあるまいな。
接待の屋根船が、当夜の火事と押しこみのあった刻限の常盤橋の河岸場に、偶然、客の三人を乗せていった。
そして屋根船は客の要望で、飯田町の堀留に火事の難を避けた。
翌早朝、飯田町からお濠の方へ曳かれてゆく長持を三つ積んだ桜井家御用の荷車。
それからまだある。
市兵衛の頼みで、火事と押しこみのあった八月晦日の夜の音羽町九丁目の警動で捕縛された大清楼主人・清蔵の解き放ち。大清楼だけを狙ったかのような警動が、音羽近辺の旗本から奉行へ直に訴えがあって行われたらしいという噂を聞いている。
渋井の頭の中がこんがらがった。

まったくつながりのない話だし、何もかもが偶然重なったのに違いなかった。ただひとつ確かなのは、それらの話がすべて音羽にかかわっている。

それと、旗本が妙に陰に陽に絡まっていやがる。

誰かが糸を操らなきゃあ、そんな偶然があり得るか。

桜井という旗本は目白台鉄砲坂の桜井だ、と渋井の勘が言っていた。

渋井は中間をかえし、椎名に言った。

「おめえは牛込御門へ向かい、九月一日の早朝、桜井家御用の荷車が通ったかどうか途中の辻番に当たって確かめろ。通ったという話が訊けたら、訊きこみをたどりながら桜井の荷車の行き先をたどれ。おれは小石川御門へ訊きこみをしながら向かう。桜井家御用の荷車が小石川御門を通っていなくても、目白台の桜井家を確かめにいくつもりだ」

「桜井家と言いましても、目白台とは限らないのではありませんか。ほかにも桜井家はありそうに思えますが」

「おめえ、ほかに知っているかい」

いいえ――と、椎名は首を左右にした。町役人の当番や店番、書役らも飯田町周辺の桜井家は知らなかった。

「違っていたらそのときのことだ。でな、おめえの結果を音羽町九丁目の自身番で訊くから、そっちへ向かえ。おれがゆくのを自身番で待て。おれが先に着いたら、おめえがくるまで待っている。いいな。九丁目の自身番は櫻木町の組合だ」

おれの勘に狂いはねえ、と渋井は半ば祈りつつ自らに言い聞かせた。

九月一日の朝の《桜井家御用》の立札を立てた荷車を、途中の辻番の番士と小石川御門の番人が見ていた。

辻番の番士は、早朝ということもあって念のため荷車を誰何した。

「お旗本の桜井長太夫さまの目白台のお屋敷へお運びいたしておりやす長持でございやす。夕べの火事騒ぎで艀が飯田町に難を避けて立ち退きやしたので、急遽、荷車でお運びすることが決まり、お屋敷へ向かうところでございやす」

人足の頭立った男が答え、番士は「さようか」と、詳しい経緯は訊ねなかった。

小石川御門の番人も《桜井家御用》の立札があったので、そのまま通した。

むろんその刻限、前夜の佐賀屋押しこみの知らせは届いていない。

渋井と助弥は小石川御門の橋を渡り、水戸家上屋敷の土塀に沿って通りをたどり、白堀端へ出た。

途中、二ヵ所あった辻番に念のため訊くと、二ヵ所ともの番士が桜井家御用の荷車を見覚えていた。荷車が白堀端から小日向水道町を抜け、九丁目橋を渡ったのは間違いなかった。

三本の立派な長持の中身は、と考えが廻り、渋井の気は急いた。

神田上水に架かる九丁目橋を渡るのは、先だっての三日に美濃屋を訪れたとき以来だった。

目白坂下の自身番で旗本・桜井長太夫の屋敷の場所を訊ねた。

目白台の大名屋敷の土塀と関口臺町との境の辻を北へ折れると、関口臺町はすぐに途切れて、両側が土塀や板塀の武家地の小路がくねった。

鉄砲坂の手前で折れた小路の先に、界隈ではひと際大きな長屋門が見え、屋根の甍が午前の光の下で銀色に光っていた。

「あれだな」

「さすが、二千石ともなりゃあ、大した門構えでやすねえ」

関口臺町と四谷町の町家が小さく固まる目白台の人通りは少ないが、表通りからはずれた武家地は人気がまったく途絶えたかであった。

長屋門は閉じられている。門扉の脇に小門があって、片門番の番所があった。

「お頼みしやす。お頼みしやす。番人さん、いらっしゃいやすか。番人さん、北町奉行所の者でございやす。お頼みしやす」

助弥が門番所の格子窓を叩いた。

すぐに返答はなかったが、ほどなくして門番所に人の気配がして、格子窓の障子が訝しげに開けられた。

鈍茶の看板を着た番人が、格子の間から渋井と助弥を睨め廻した。

「どなた、さまで」

番人は町方役人の黒羽織を認めて、口調を幾ぶん改めた。

渋井は前身頃へ手をあてがい腰を折った。

「北町奉行所定町廻り方の渋井鬼三次と申します。突然、ご門前をお騒がせし、お詫びいたします。御持筒組頭・桜井長太夫さまのお屋敷とお見受けいたし、当家御主・桜井さまにお目通りを願いたく、おうかがいいたしました。何とぞ、桜井さまにお取り次ぎを、お願いいたします」

「仰る通り、御持筒組頭・桜井長太夫さまのお屋敷です。しかしながら当方は旗本屋敷ゆえ、町方のこられるところではございません。なんぞご用の儀がござれば、支配役を通してくだされ」

「ご支配役を通すのが筋というのは重々承知しております。ただ、少々急を要する事態に立ちいたっており、ご無礼と知りつつ取り急ぎまいりました次第。また、ご支配役を通すとなれば、かえってご当家にご負担をおかけすることにもなりかねません。わずかな事柄ゆえ、庭先で結構でございます。何とぞ、お取り次ぎだけでもお願いできませんでしょうか」

「当家に負担？」

番人は浅黒い顔に困惑を浮かべた。

「本日は重陽の節句ゆえ、主は参賀の登城をなさっておられますゆえ、お取り次ぎはかないません。ご用人に訊いてまいりますので、しばらくお待ちくだされ」

障子が閉じられ、門前の小路は渋井と助弥以外、人気は途絶えた。

やがて正面門扉脇の小門が、ごと、と低い音を立てて開いた。

鈍茶の番人が小門より顔を出し、「どうぞお入りください」と、渋井と助弥を招き入れた。

樹木の植わった広い前庭があり、敷石が十間（約十八メートル）ほど延びて破風造りの玄関が見えた。

敷石の途中に、藍の小袖に紺の半袴の若い士が無愛想に立っていた。

こいつが用人か。若えな。渋井は思いつつ敷石を進み、用人へ腰を折った。

「当桜井家の用人を務めます立花広之進にござる。北町奉行所定町廻り方・渋井鬼三次どのですね。番人の申すところ、急を要する事態とか。主は本日、節句の参賀の登城をいたしており、わたくしが代わってご用の向きをおうかがいいたす。どうぞ、手短に申されよ」

まさに庭先での立ち話だった。

立花は薄い唇の間から、出っ歯の不揃いな歯並びを見せた。痩せていて、中背の渋井より少々背が高い。

「早速お訊ねいたします。わたくし、去る八月晦日の真夜中九ツ（午前零時）、常盤橋御門外の本町並びに本両替町において起こりました火事と、火事騒ぎにまぎれて本両替町の本両替商・佐賀屋に押しこみ強盗を働き、佐賀屋主人ほか使用人ら、合わせて十五名を惨殺した一件の掛を申し付けられております。この者はわたくしの手の者で……」

立花は両掌を肩幅ほどに幅を取って胸の前にかざし、両掌の幅を二度三度狭めて、

「手短に、手短に」

と、横柄に言った。

渋井の後ろに畏まっている町方の下賤な手先など、名を聞くまでもない、というふうだった。

この野郎、餓鬼が。こみ上げる腹立たしさを渋井は抑えた。

「飯田町、牛込や市ヶ谷などの山の手の調べを分担しておりましたところ」

と渋井は続けた。

押しこみのあった翌九月一日の早朝、《桜井家御用》の立札を立てた荷車が、飯田町より当家へ三本の立派な長持を運んだことがわかり……と、用件を告げた。

渋井が言い終わったときには、横柄だった立花の表情が曇っていた。

眉間に皺を寄せ、渋井をじっと見つめてすぐには答えなかった。

「ご用人であれば、九月一日、当日の経緯はご存じでございましょう？　どういう事情のお荷物だったのか、立花さん、お聞かせ願えませんか」

「その荷車は、間違いなく当家へ運ばれたのですか」

立花はその荷車のことを、把握していないらしかった。

「途中の辻番の誰何で、人足が目白台の桜井長太夫さまお屋敷の荷物、と答えております。小石川御門の番人、それから水戸屋敷より神田上水へいたる辻番も桜井家御用の荷車を見たと述べておりました。間違いありません」

立花は考えあぐねている、そんなふうにも見えた。
「お訊ねには、わたしはお答えしかねます。やはり、ご支配役を通して改めてお訊ねになられよ」
「畏れ入りますが、立花さんは九月一日の荷車の件をご存じではなかったので……」
「そのようなこと、答える必要はない。お引き取りを」
と、また横柄な口ぶりになった。
渋井は渋面で若い立花をひと睨みし、下がり眉をさらに下げてにやついた。
そっちがそういう対応なら、仕方がねえ。ちゃんと筋を通してやらあ。その代わり、洗い浚い探ってやるぜ。渋井は、ぶん、と肩をゆすった。
それから深々と腰を折って踵をかえした。
「偉そうな若造でやすね」
番人が後ろで小門を閉じる音を聞いてから、助弥が言った。
あんなものさ——と、言いつつも顔が苦虫を嚙み潰していた。
小路を二人がゆく折りしも、目白不動の時の鐘が昼の九ツ（午後零時）を報せた。
関口臺町へ戻る辻で、渋井は反対の鉄砲坂の方へ折れた。
鉄砲坂を下って音羽町九丁目へ出るのは遠廻りになる。

「旦那、そっちは遠廻りですぜ」
「わかっている。美濃屋の惣十郎にもう一度訊きてえことができた」
渋井は惣十郎に、八月晦日に接待した侍は桜井長太夫ではなかったか、と確かめるつもりだった。二人が辻を折れたそのとき、
「旦那ぁぁぁ」
と、関口臺町の方より日盛りの道を駆けてくる男が見えた。
蓮蔵の手下の今吉という男だった。

二

渋井に続いて椎名、助弥に蓮蔵、連雀のご用箱を担いで木刀を腰に差した奉行所中間と今吉の六人が、菓子所・篠崎の軒暖簾を払って店土間に雪駄や草履を鳴らした。
「おいでなさぃ……」
と、言いかけた店番の女房の声が途切れた。
町方同心の白衣と黒羽織が二人、後ろには険しい顔付きの手先と明らかにわかる男

らのいきなりの出現に、女房は慄いた。

渋井の指示で、手先の蓮蔵と手下らは、勘平が喜楽亭の父親への手土産にした粟焼を買った菓子屋を探していた。

そうして今朝、渋井らがき合わせたまさに櫻木町と音羽町九丁目の境の、目白坂へ上る手前の辻に構える菓子所・篠崎で、勘平らしき男が粟焼を、七月の下旬に買ったことを、手下の今吉が店番の女房から訊き出したのである。

今吉は慌ててそれを飯田町の自身番へ告げに戻り、町役人から渋井は音羽町九丁目の自身番にいくはずと教えられ、折りしも自身番にき合わせた蓮蔵とともに、音羽へとんぼがえりをしたのだった。

九丁目と櫻木町の組合の自身番には、平同心の椎名と従う中間がすでにきて渋井らを待っていた。

篠崎の小柄で小太りの女房は、渋井の問いに目をぱちくりさせ、答えた。

「覚えています。そんな風体の方で、二十五、六に見えました。先月にも一度、うちへ寄られて、先だっての粟焼は人にやったので食えなかったから、どんな味か確かめるために買いにきたと仰って、沢山買っていかれました」

「沢山？　沢山とはひとりで食べるだけじゃねえ量だってことか」

「はい、たぶん。量が多かったのでお仲間がいらっしゃるのだと思い、みなさんにもきっと気に入っていただけますよ、と話しましたので覚えています」
「男の住まいはわかるかい」
「住まいは、関口臺町だと思いますけど、うちの人が知っていると思いますので。あんたぁ、あんたぁ……」
女房が半暖簾で仕切った店土間の奥の亭主を呼んだ。
縞の長着に襷をかけ、白い前垂れを付けた亭主が暖簾をかき分け姿を見せた。
菓子作りの職人らしい亭主は、背が高く痩せた気難しそうな顔付きで、手が粉で白くなっていた。
「……いつだったか、自身番の店番の折りに聞いたので、おそらくそこの、陰陽師さん方のお仲間だと思います」
亭主が言った。
「鉄砲坂へ分かれる関口臺町の幸之助店に、佐川山城という陰陽師さんの裏店があります。店の裏庭に祈禱所と道場を兼ねた土蔵があり、そこは同業の陰陽師さんや中には托鉢僧の方々も江戸の宿に使われております。七月の下旬のころだったかに、旅の陰陽師さんの方々が佐川さんの土蔵を定宿にして、江戸中を廻って占いやらお祓い

をしておられるようです」
「方々たあ、何人ぐらいだ」
「十四、五人と聞いています」
「助弥、鉄砲坂の関口臺町たあ、さっきおれたちが通ったところだな」
「間違えありやせん。さっき通ったところでやす」
助弥が勇んで答えた。
「その陰陽師の一団はまだ佐川の裏店に宿を取っているのかい」
「さあ、どうでしょうか。それは、わわ、わかりかねます」
渋井は椎名を睨んだ。
「椎名、ひょっとしたらおれたちは、一気にえれえところへきたかもしれねえぜ。奉行所の応援を待つなんぞ、悠長なことはしていられねえし、支度をする暇も惜しい。この人数でいく。もしもやつらが例の一味なら必ず抵抗してきやがる。そうなったら尻っ端折りでひと暴れだ。覚悟はいいな」
「は、はいっ」
椎名が、ごくりと喉を鳴らした。
「しかし、この人数では、もしもの場合少ない、少なすぎるのではありませんか」

「なんだい、怖気付いたかい。少なかったらしょうがねえじゃねえか。そうなったらなったで、なんとかするんだよう。それよりときが惜しい。今吉、てめえは自身番へいって町役人に、今いる人数だけでいいから得物を取って後詰に幸之助店の佐川山城の裏店を囲めと言ってこい。すぐだぞ」

それから、助弥と蓮蔵、中間を見廻して声を張り上げた。

「おめえらも腹据えて、男を見せろ」

へえい――と、男らが空元気を出した。

篠崎の小太りの女房が、口をぱくぱくさせて震えていた。

亭主は唖然として、何が起こっているのかわかっていないふうだった。

幸之助店の土御門神道陰陽師・佐川山城は、昼餉が済んだ後、台所土間の竈に金箱を砕いてばらばらにした部厚い板をくべていた。

菊の助と女房・お万の率いる一団は、あの日以来、悠々と旅支度を済ませ、昨日の夜明け前、ようやく旅立った。

佐川は一味が無事江戸を離れてほっとしていた。

一味が去った後の裏の土蔵は、閑散とした以前の祈禱所に戻っていた。

一味がどこへ立ち去ったのか、どこの土地に根城を定めているのか、佐川は一切知らなかった。

二年ほど前だった。

音羽町五丁目の古着屋・美濃屋の手代で惣十郎という男が、佐川の裏店へ祈禱に現われた。土御門神道の熱心な信者に見えた。

半年ほどたったころ、惣十郎が馴れ馴れしく言った。

「尊師、じつは少々まとまった金になる仕事があるんですが。悪い話じゃありませんよ。尊師もひと口、乗りませんか」

惣十郎は、古着屋の手代とはまったく違う不気味な顔を見せて言った。

「少々危ない橋を渡りますがね。なあに、大した仕事じゃねえ。間違えなく百両にはなりやすぜ。それを元手によその土地で優雅に暮らしたらいいじゃありやせんか」

最初は、この男は何を言い出すのか、と思った。

危ない男だ。こんな男にはかかわり合わない方が身のためだ、と用心していた。

ところが四、五日たって惣十郎がまた近付いてきた。

護国寺門前の青柳町の高級な料亭に誘われた。

そこで再び百両になる仕事の話が出た。

「仕事が済んだら、もう百両。合わせて二百両。仕事の簡単な助手なんですがね」
惣十郎はにこやかに笑って言った。
「そんな危ない橋を渡る気など、わたしにはありません」
にべもなく断わりながら、佐川は二百両と聞いて心がゆらいでいた。
「このまま細々と暮らして、先になんの楽しみや望みが持てやすか。いずれ身体が不自由になって稼げなくなり、店賃すら払えず今の店を追い出され、ゆき着く先は野垂れ死に。そうなることは、目に見えていやす。どうです尊師。まだ先のことなんですがね、ひと仕事をして二百両を懐に、いっそ江戸を立ち退く、なんて算段は」
まあ、返事は後でもいいので、考えるだけ考えてみませんか――と、惣十郎はやわらかな当たりながら、執拗だった。
確かに、佐川には老い先の面倒を見てくれる子供もおらず、古女房と二人、老いぼれてゆくだけだった。佐川の稼業である市井の陰陽師の卜占や祓い、身固めのまじないでは、大した稼ぎが得られない。土御門家への鑑札料も馬鹿にはならない。
惣十郎はそこを見抜いて、付けこんできたのだ。
だが、二百両もの大金を得るのにどんな仕事をするのか。危ない橋？　自分みたいな臆病な男にできるのか。いやいや、できるわけがない。

思いつつ、佐川は日をへるに従って、どういう仕事かぐらいは聞いてもよかろう、聞くだけ聞いて、そのうえで断わればいいのだ、と考え始めた。

ははは……と惣十郎は笑った。

惣十郎が言ったのは、裏の祈禱所の土蔵を、来年の秋ごろ、旅の陰陽師の一団に、三月ばかり宿として提供してほしい、というそれだけだった。

「ご近所の手前、上手く言いつくろっていただかなくちゃあなりやせん。陰陽師の修行とかなんとか言いながら。そこは尊師の長年のご人徳で」

「す、すると、宿を提供するだけで、本当に合わせて、に、二百両になるのですな」

「間違えありやせん。わたしら、これまで縮尻ったことはありやせん」

縮尻る？　そんなに危ない仕事なのか。とは佐川は考えなかった。

二百両にすっかり目がくらんでいた。

確かにそうだ。この先になんの望みがある。構わぬ。しがない陰陽師稼業などは辞めて、二百両を手にしよう。他国へ逃れ、静かに余生を送ろう。

佐川山城は決心した。

一年と数ヵ月がたった今年の七月下旬、十五人の陰陽師の一団が現われた。

初めて顔を合わせた頭の菊の助という男は、ずんぐりした武骨な風貌から野太い声

を吐き出し、佐川をすくませた。

「いいか。おらたちのことは、見ざる聞かざる言わざるでいるんだ。あんまり知られて喋られる恐れがあると、生かしちゃおけなくなるだでよ」

菊の助の隣で、大女のお万の白い顔が不気味だった。

一味が何をするために江戸へきたのか、佐川は知らないままだった。

知る気もなかった。

ただ、菊の助に率いられた一団を迎えて初めて、後戻りの利かない危ない橋を渡ったことに気付いた。

佐川の女房は不審がったが、何も教えなかった。

「おまえは知らなくていい。いいから、わしに任せておけ。人に訊かれたら、京より修行の旅で東下した同じ土御門派の陰陽師と言うておけ。三月ほど逗留して後、秋の終わりには京へ戻るとな」

そう言わせていた。

それから八月晦日の夜に起こった本町と本両替町の火事騒ぎと、そのさ中にあった本両替町の本両替商・佐賀屋押しこみの一件の噂を聞いたとき、佐川は腰を抜かしそうなほど驚愕した。

違う、まったくわしらとはかかわりないことだ。佐川はこの数日、虚しく己に言い聞かせた。

昨日の早朝、菊の助の一味が去って、胸を撫で下ろした。

佐川は板を竈にくべた。

なんにしても、自分らもなるべく早く江戸を去らねばと考えていた。

竈の中で燃える板が、ごそ、と崩れた。

そのとき、土間の勝手口の障子戸に人の影が差した。

誰だ、と障子戸の影を見やった。

煙が目に染みた。

障子戸がそっと開けられ、男が顔だけを土間にのぞかせた。

景気の悪い渋面の男だった。佐川を見て無理に笑みを作った。

なんぞ売りにきた行商か、と思った。帰った帰った、と言いかけ、ふと、小銀杏に結った髷の刷毛先に佐川の目が引き寄せられた。

あの髪型は、と佐川はぼんやり考えた。

「陰陽師の、佐川山城さんで」

男の見え透いた笑みが、操り芝居みたいだった。

「そうですが、どなた」
佐川は生唾を飲みこんだ。
障子戸がさらに開けられ、男が入ってきた。
じゃら、と雪駄が鳴った。
佐川は全身がわなわなと震え出すのを抑えられなかった。
男は町奉行所の定服で、背中を丸めた貧相な様子だった。
けれどもその貧相な歪さが、佐川には化け物じみて見えた。
町方の後ろに、背のひょろりと高い手先が従っていた。
「家主の幸之助さんに聞きやした。裏の土蔵に逗留していた陰陽師の方々は、昨日早く、旅立たれたそうでやすね」
「は、はい……」
「その陰陽師の方々が、どこへいかれたか、この江戸でどういうことをなさっていたのか、ちょいとお訊ねしてえので、番所までご足労願えやすか」
「どこへ、と訊かれても、きょ、京の土御門家の……」
「京じゃ、ねえでしょう。そこら辺のことは、番所でゆっくり思い出していただきやしょう」

「こ、困る。仕事が、仕事があるでな」
「竈に薪をくべていらっしゃるじゃ、ありやせんか。おや、その薪は？」
佐川は壊した金箱の板切れを握っていた。
突然、悲鳴が家の中で上がった。
どどど、っと家がゆらぎ、女房が襖を押し倒して台所の板敷へ倒れこんできた。
「あんた、助けてえぇぇぇ」
女房が転げて、佐川に悲鳴のような助けを求めた。
すぐに定服を着た町方と紺看板の中間が、板敷に転げた女房を押さえこんだ。
押さえられた女房が、号泣し始めた。
町方は構わず、手にした赤房の十手を口に咥え、女房に北町の白縄をかけた。
「わしは知らあん」
佐川は竈の前より跳ね上がり、叫び声を上げた。
つかんだ板切れを渋面の町方へ投げ付けた。
「おっとっと」
避けた町方の隙に乗じて板敷へ駆け上がり、中間に体当たりを食らわせた。
わあっ、と突き飛ばされた中間が茶箪笥にぶつかり、ばりばり、と砕ける音がし

た。
そのまま廊下から部屋を走り抜け、濡れ縁の障子戸を突き破った。
「野郎、待てえっ」
背後の叫び声が追いかけてきた。
一間の幅もない庭を囲う垣根を飛び越え、武家地との間の小路へ転がり出た。
道の前後に男らが待ち構えていた。
「観念しやがれ」
叫ぶ男らの後ろに、見覚えのある音羽町九丁目や櫻木町の店の主人らが、突棒や刺股を握って身構えていた。
ひゅうん、ひゅうん、と投げ縄が飛んできて佐川の身体に絡んだ。
「何も知らん、何も知らん」
佐川は動きが搦め捕られる中で、喚き続けた。
叫びながら佐川は絶望を覚えた。
店の中から女房の激しい泣き声が聞こえていた。
やめてくれ、女房に罪はないんだ……
佐川は跪いた。

小路に秋九月の午後の光が心地よさげに降りそそぐ下で、慟哭した。

三

佐川山城は、九丁目と櫻木町の自身番奥の狭い板敷のほたにくくり付けられ、渋井らの厳しい訊問を受けた。

板敷の隅では、後ろ手に縛められた女房が顔を歪めて泣き続けていた。

厳しい責問に、佐川は知っていることの洗い浚いを白状した。けれども、

「わたしはあの者らに頼まれ、宿を提供しただけで、それ以外のことは何も聞いておりませんのです。あの者らが、江戸で何をしたかも、詳しくは存じません」

と、言うばかりで、そこから先は埒があかなかった。

「しらばっくれるんじゃねえ。そんな言い逃れが通ると思っていやがるのか」

助弥と蓮蔵、今吉の取り調べは苛烈を極めた。

だが、出てくる返答は同じだった。

菊の助という男がどこの誰兵衛で、一味がどこへ消えたのか、肝心なところを佐川は何も知らされていなかった。

「よし、もういい」
二刻（四時間）ほどの責問の後、渋井は三人を止めた。
ふん、してやられたぜ――と、渋井は唇を歪めた。
それから椎名に命じた。
「おめえは今からすぐ、牛込揚場町の貸船屋・菱川の重吉をしょっ引いて、茅場町の大番屋へ放りこんどけ。おれは美濃屋の惣十郎をふん縛る」
また中間を、応援を頼む知らせに急ぎ呉服橋の奉行所へ向かわせた。
「なあ椎名、菊の助という盗人、見事な進退じゃねえか。けどな、今度はこっちの番だぜ。江戸の町方の腕前を、見せてやる」
「承知っ」
若い椎名が自身番を飛び出した。
渋井は、助弥と蓮蔵に今吉を率い五丁目の美濃屋へ乗りこんだものの、当然、惣十郎はすでに美濃屋から姿を消していた。
「一昨日、故郷の水沢より縁者に不幸があったとかの知らせがまいり、昨日朝早くに発ちましてございます」
と、美濃屋の主人はただならぬ事態に青褪めて答えた。

惣十郎は奥州水沢の生まれだが、調べるまでもなく帳外の者になっているだろう。

「惣十郎の人別を、確かめたのかい」

「急ぎの人手の必要なときでもあり、あの折りは見るからに信用のおけそうに見えましたもので、本人がなるべく早く人別を取り寄せます、と申しておったのを信用いたし、いつの間にか五年がたってしまいました。まだかまだかと催促はしておったのですが……」

美濃屋の年配の主人と女房が、畳に手を突いたままひたすら弁解した。

一部の大店はともかく、商家のすべての使用人の身元が確かだったわけではなかった。一季半季で奉公先を渡り歩く使用人はいたし、手代に雇った者の身元をいちいち詮索していては、人手不足に陥る小店はいくらでもあった。

「ええい、今さらしょうがねえ。美濃屋さん、咎めは後だ。それより八月晦日の惣十郎が接待した旗本たあ、誰だい。今度は言ってくれるな」

「は、はい。鉄砲坂のお旗本・桜井長太夫さまでございます」

「くそおっ、惣十郎が五年前から江戸へ乗りこんで、江戸でひと働きするためのお膳立てを何もかも整えていやがったってえわけかい。菊の助、待ってやがれ。地獄の果てまで追いかけてやるぜ」

渋井は武者震いを覚えつつ、天に向かって吠えた。

関口臺町の陰陽師・佐川山城と牛込揚場町の貸船屋・菱川の船頭・重吉が、南茅場町は日本橋川沿いの大番屋へ収監されて一刻（二時間）ほど後の夜五ツ（午後八時）だった。

江戸城中奥の御老中御用部屋東隣に廊下を隔てた若年寄御用部屋へ、御持筒組頭・桜井長太夫が、濃紺の裃姿を現わした。

若年寄御用部屋には、若年寄・水野隠岐守、京極周防守の二人を上座に、目付筆頭・片岡信正ほか三名の目付、北町奉行・榊原主計頭、南町奉行・筒井和泉守が左右に居並んでいた。

桜井は、着物の下に汗が噴き出しているのがわかった。

昼すぎ、桜井が重陽の節句の参賀を終え目白台の屋敷へ戻ると、用人の立花広之進から、本日昼ごろ町方の渋井某が屋敷を訪ねてまいり、この九月一日、飯田町より当屋敷へ運びこまれた長持三本の荷物について問われた経緯を伝えられた。

渋井某は八月晦日の本両替商・佐賀屋押しこみの一件を探索いたしており、飯田町より九月一日の早朝、桜井家御用の荷札を立てた荷車が三本の長持を運んでいた目撃

談があった由。長持の荷はなんであったか一応中身を訊ねられた、という報告だった。

桜井家御用の？　桜井は、以前、音羽町五丁目の美濃屋の手代・惣十郎に己の店を開くために頼まれた密か事などまったく忘れていた。

ああ、もしかしたらあれか——と桜井は思い出し、立花に至急美濃屋の惣十郎を呼べと命じた。

四半刻もたたずに、惣十郎は昨日早朝、郷里の奥州水沢へ発った、という返事がもたらされ、桜井は急に不安を覚えた。

落ち着かぬ気持ちを抑えかねているところへ、近所の関口臺町で町方の捕物があって、なんとそれは八月晦日の本両替商・佐賀屋押しこみの賊がねぐらにしていた関口臺町の幸之助店に踏みこんだものだったことを知り、桜井は衝撃を受けた。

「どういうことだ。何が起こっているのだ」

桜井は立花に、惣十郎が水沢へ戻った詳しい事情と関口臺町であった町方の捕物の詳細な始末を調べにいかせた。

酒を呑む気にもなれず、居室に閉じこもって立花の調べた結果をじりじりと待っていると、癇性な妻が顔をのぞかせ、「何をしているのですか、馬鹿みたいにぼうっと

して」と、いやみを言って引き下がった。
しかし桜井は、妻のいやみに応じる心のゆとりすら失っていた。
御持筒組頭支配役の御参政より、至急登城せよ、との命が届いたのは六ツ（午後六時）すぎ、立花からの報告を受けているさ中だった。
桜井は身体中が粟立つのを覚えた。
夜の城中は静まりかえっていた。
桜井は若年寄正面に端座し、四台の行灯（あんどん）の明かりが橙（だいだい）色に染めた畳に手を突いた。
「御持筒組・桜井長太夫、参上いたしました」
「ふむ。ご苦労。早速だが、おぬしに問い質（ただ）さねばならぬことができた。包み隠さず答えるように。よいな」
若年寄・水野隠岐守が桜井に手を上げよ、とも言わずにいきなり命じた。
「ははあっ」
桜井はさらに頭を低くした。
「榊原どの、どうぞ」
北町奉行の榊原主計頭が膝を桜井へわずかに向けた。

榊原とは知己の間柄だが、顔付きがいつもとはまるで違っていた。

「先般八月晦日夜九ツ、常盤橋御門外、本町並びに本両替町において火付けと思しき火事があり、火事騒ぎに乗じて本両替町の本両替商・佐賀屋へ十二人組の人足風体に脇差で武装した賊が押し入った。賊は佐賀屋より一万四千両余の金貨を奪い、主人・介右衛門を人質に連れ去り、主人とともにいた頭取、番頭、手代ら十四名を惨殺。さらに介右衛門をも後に絞殺し大川へ遺棄した。その一件、ご存じでござるな」

澱みなく張りのある榊原の声が、桜井の頭上へ伸しかかった。

「南北両町方の懸命の探索の結果、賊の正体並びに押しこみの手口がほぼ判明いたした。ほぼと申すのは、全容は明らかだが裏付けが取れておらぬ。桜井どのに問うのはその裏付けのためである」

桜井は平身したまま固まっていた。

まず――と、榊原が続けた。

賊の頭は菊の助。一味の数は十六名。そのうちのひとり惣十郎と称する男は五年前、音羽町五丁目の古着屋・美濃屋の手代として住みこみ奉公へ入り、菊の助一味が江戸の大店に押しこみを働くための支度と手引き役を受け持っていた。

菊の助が佐賀屋を標的に決めた理由は不明だが、佐賀屋の内情、賊が逗留する江戸

の宿、強奪した金貨を運び自らも逃亡する手段に使った屋根船と荷車などの手配算段は、すべて惣十郎が行ったことは間違いなかった。

七月下旬、菊の助を頭に女房の万と手下ら総勢十五人が、中山道脇道の目白台にある関口臺町の幸之助店住人で、陰陽師を生業とする佐川山城の修行場と祈禱所をかねた土蔵へ投宿した。

菊の助らはそれからおよそ一ヵ月のときをかけて入念に下見をし、押しこみ決行の日時手筈を決めたと思われた。

押しこみの手口はこうである。

当日の夕刻、一味の三人が人足風体で前もって用意した荷車を飯田町もちの木坂下の石切り場へ運び、真夜中の九ツを待った。それは自身番町役人らの石切り場周辺の調べで、辺りに出没する夜鷹が人足らに「お兄さん」と声をかけた折りに見ていた。

その荷車は美濃屋の古着の仕入れなどに使う物で、当日朝、惣十郎が人足風体の男に運び出させ、惣十郎の言うことだから美濃屋の者は誰も不審を持たなかった。

一方、当日の午後、目白台の顧客・桜井長太夫の供応を口実に、美濃屋の惣十郎は牛込揚場町の貸船屋・菱川から屋根船を借りた。

船頭を務めた菱川の使用人・重吉も、惣十郎に五十両の金で一味に誘われていた。

重吉は惣十郎の指示に従い、船を舟遊びのような風情で流したり、両国の河岸場に泊めて少々の酒を呑ませてもらったり飯を食ったりしてときをすごした後の午後遅く、浜町堀の富沢町近くの河岸場へいき、立派な長持を三本積みこんだ。

それから惣十郎は重吉に待っているようにと命じてどこかへ消えたので、重吉は河岸場に船を着けたままひと眠りした。

惣十郎に起こされたのが夜更けの四ツ（午後十時）すぎごろだった。

命ぜられるまま浜町堀からゆっくりと日本橋川へ船を進め、四ツ半（午後十一時）には常盤橋御門の河岸場に着けた。

「これからどうしやすんで」

と、訊ねると、こちらの言う通りだけしてりゃあいいんだ、と惣十郎に暗闇の中で凄まれ、重吉は恐ろしくなった。

真夜中の九ツすぎ、河岸場近くで突然火事が起こった。

半鐘が打ち鳴らされ、夜空が火炎に染まった。

するうちに、火の手に追われた住人らが常盤橋御門の濠端へ押し寄せ、河岸場や濠端一帯は大混乱に見舞われた。

火事場から荷物を運ぶ人や荷車が次々とやってきて、河岸場に係留していた艀にど

んどん積みこんでいく。
突然、「あれだっ」と惣十郎が喚き、濠端に止まった荷車に合図を送った。
荷車から大勢の人足らが荷物を降ろし、重吉の屋根船へ次々と運び入れた。
暗いのと混乱とで、荷物はよくわからなかった。
荷物を運び終わった船に人足らも乗りこみ、多くの船が日本橋川の方へ向かう中、惣十郎の命で日本橋川の方ではなく飯田町の堀留の方へ漕ぎ出した。
飯田町の堀留は火事場から逃げてきた艀が数艘接岸して、荷物を降ろしていた。
船に乗りこんだ人足らは荷物を三本の長持の中に隠していたらしく、長持を飯田町の河岸場へ降ろすと、そこにも荷車が待っていて、その荷車に素早く積みこんだ。そのとき、
「かんぺいは、どうした」
「野郎、戻ってこねえんで」
と、人足らがささやき合っているのを重吉は耳にした。
荷車は人足らとともに夜の飯田町に消え、堀留に舫う船の中に重吉の屋根船は残された。辺りは人気がすぐに途絶えて火事騒ぎが嘘のように静まりかえり、半鐘の音だけがいつまでも遠くで聞こえていた。

屋根船は障子戸を立て、中には惣十郎とほかに、確か手代風体の二人が残っているみたいだった。

重吉は惣十郎に言われるまで、川底に突き刺した棹に凭れ、屋根船の艫にうずくまっていた。何も考えずうつらうつらしたかもしれなかった。

船饅頭が、おまん、おまん、と寄ってきたのを追い払ったのを覚えている。

半鐘の音が止んだころ、惣十郎の指図で堀留を離れ、日本橋川から新大橋近くの大川へ出た。

大川へ出たところで惣十郎に、

「新大橋の方を見てろ。かかわりたくねえだろう」

と、耳元でささやかれ、重吉はいいと言われるまで川上の新大橋の影を震えながら見つめていた。

舳の方で、惣十郎ともうひとりが何かを川へ沈めたみたいだったが、佐賀屋の主人の亡骸が永代橋の橋桁に引っかかっているのが見付かるまで、重吉はそれが何かは知らなかった。

その後、大川をさかのぼって神田川へ入り、昌平橋でひとりを降ろした。

惣十郎と二人になり、揚場町の菱川へ戻る途中、船が身分のある侍と本石町の町家

の内儀との向島の密会に使われたことや、火事騒ぎで飯田町に逃れていたという口裏合わせを繰りかえし入念に行った。

「以上のことは、本日午後、捕縛いたした菱川の船頭・重吉の白状によって判明いたしたことである。桜井どの、当日にそのような密会の供応などなかった、ということでよろしいな」

「そのような供応は断じてございません」

畳に手を突きうな垂れたまま、桜井はくぐもった声で答えた。

「ふむ。翌朝九月一日……」

と、榊原の話は続いた。

飯田町の石切り場で夜が白むのを待った三本の長持を積んだ荷車は、《桜井家御用》の荷札を立て、怪しまれぬように四名の人足が曳いて飯田町から小石川御門をすぎ、水戸家上屋敷脇から白堀端へ出て、目白台へ向かった。

ほかの仲間は、ひとりか二人ずつに分かれて思い思いに戻ったと思われる。

途中、武家屋敷地に幾つかの辻番はあるものの、《桜井家御用》の荷札ゆえに長持の中身が調べられることはなかった。

目白坂を上り関口臺町の小路で、荷車は桜井家屋敷へは向かわず、幸之助店の陰陽

師・佐川山城の店の裏庭へ曳き入れられた。

「桜井どの、これは同じく本日わが町方が捕縛いたした佐川山城の白状により、その長持には佐賀屋より強奪した金貨の箱が隠されていたことが判明しておる。また《桜井家御用》の荷札は、佐川山城が竈で焼き捨てたそうでござる」

桜井の肩と背中が震えていた。

「桜井どの、この荷札の一件はご存じでござったか」

「いえ。決して、決して、存じてはおりません」

「そうでござろうな。知っていたらおぬしは菊の助一味の仲間だったことになる」

榊原が皮肉を言った。

「それとこれは町方が独自につかんだことだが、火付けの役割を負ったと思われる仲間がひとり、何者かに頭蓋を割られ、本石町で倒れていた。勘平という、江戸育ちの十代半ばまで江戸にいた男だ。聞き覚えはないか」

「一向に……」

「ふむ。菊の助一味は、一昨日の七日まで悠々と旅支度をし、昨日早朝江戸を発ったそうでござる。口惜しい。われら町方、菊の助一味を取り逃がした。そこで、桜井どのにお訊きしなければならぬ。どういう経緯で《桜井家御用》の荷札が立てられたの

か、桜井どのと菊の助一味とのつながりをな」
「つ、つながりなど、一切ございません」
「あるかないか、公儀旗本の桜井どのを調べるのはここにおられる目付衆だ。桜井どの、事ここにいたっては、も早や弁解の余地はない。武士らしく潔く話されよ」
「べ、弁解など、わたしには与り知らぬことなのですから、する必要はござらん」
「さようか。よかろう。念のため申しておく。先ほど、八州見廻り役より届いた報告によれば、八州で十数年前より、菊の助と名乗る男に率いられた徒党が、どこぞの根城から狙いを定めた町や村へ陰陽師や旅芸人などの一団を装って旅をし、そこで押しこみ強盗を働き、霧のごとく消え去る、という噂があるそうだ。噂では、その徒党は《菊の助座》と、その筋の者らの間では呼ばれているらしい」
「菊の助座？」
「ただ、その菊の助座、菊の助を知る者はおらず、根城も一向に判明せぬゆえ、正体不明。じつは菊の助座は噂にすぎず、菊の助などはおらぬ、盗人らが勝手に菊の助を名乗り、それがあちこちで出没するゆえ、神出鬼没の菊の助座が作り上げられた、という評判もある。いずれにせよこのたびの佐賀屋の一件、一味が玄人であることは間違いない。桜井どの、玄人の盗人に天下の旗本がしてやられましたな」

ううう……

平身した桜井が呻き、背中が震え波打った。

四

「桜井どの、目付の片岡信正でござる。手を上げられよ」

畳にうずくまり呻く桜井へ、片岡信正が穏やかに言った。

「ここは評定所の裁きの場ではない。佐賀屋押しこみの一件で、計らずも桜井長太夫どのの名前が浮かび上がりました。まことにゆゆしき事態とは申せ、押しこみ一味が桜井どのの家名を利用したということは、即ち桜井どのが押しこみの一味ではない証とも申せましょう」

片岡の低く滑らかな語調が、若年寄御用部屋を支配する重苦しさをなだめた。

桜井の眼差しが片岡へすがった。目は緊張と不安で充血していた。

「しかしながら、武士たるもの、そのような胡乱な徒に付けこまれ、家名を利用されるとは、迂闊、失態の誹りは免れません。桜井どのが与り知らぬことと申されるのならば、一味が何ゆえ桜井家の名を出したのか、ご自身に言い分があるのではござりま

せんか。それを申されよ。何があったのです」
桜井はやはりうなだれたまま、首を左右に振った。
「迂闊、面目ござらん」
咽び声になった。
ちっ、と榊原が舌打ちした。
「音羽町九丁目に大清楼という料理茶屋があります。料理茶屋でありながら、子供屋より芸者、あるいは女郎を呼んで客の相手をさせることもできる、そのような茶屋です。桜井どのは大清楼をしばしば利用なさるゆえ、ご存じですな」
周囲から失笑が起こった。
「八月晦日の夜、本町と本両替町の火事騒ぎと佐賀屋に押しこみの入った同じ夜に、音羽町九丁目の岡場所警動が北町の手によって行われ、同じ類の料理茶屋はほかにありながら、大清楼のみが手入れを受け、吉原の男衆らによって打ち壊しに遭っております。音羽の警動は、桜井どのがこちらのお奉行・榊原どのに直に訴えられたそうですな。しかも大清楼の乱脈ぶりを強調され、大清楼の取り締まりを殊に訴えられた」
片岡が榊原へ向いた。
榊原は不服気な顔をゆっくり頷かせた。

「当夜の音羽の警動が火事と佐賀屋押しこみへの町方の対応を手薄にする事態を招いた。町方の判断が誤って、必要のない警動に人手を割き、火事や押しこみの対処に必要な人手を廻さなかったゆえ、一味をみすみす取り逃がした。などと、町方の不手際を責める声も市井にはあると、報告が入っております」

警動を命じた榊原は、それには顔をそむけた。

「しかし今なすべきは、その当否の詮索ではなく、当夜に起こった実事に基づいて原因を質し、実事に基づいて菊の助一味の素性を暴き、捕縛に手を尽くすことです。そこでまずお訊きしたい。桜井どのが音羽の警動を町方に訴えられたのはなにゆえ、なにゆえ殊に大清楼だったのですか」

「う、迂闊でした」

「迂闊というだけではわからぬ。わけを申されよ」

榊原が苛立って促した。

桜井は手を膝に置き、小首を傾げうな垂れた。気の荒い、と言われる御持筒組頭の面影はなかった。

「音羽の紊乱ぶりを憂え、それを指摘する声も聞こえてまいりましたので、日ごろの己の素行は棚に上げ、取り締まりをお奉行に訴えた次第です」

榊原は口をへの字に結んでいる。
「大清楼を標的にしたわけは？」
「ほかの料理茶屋と較べて、乱脈ぶりが著しかったゆえに……」
たったそれだけの弁明だった。
信正は、まだ隠蔽を図る桜井の往生際の悪さに内心呆れた。だがそれは表にせず、言った。
「音羽警動について、少々調べをいたしました。同夜に起こった火事と佐賀屋押しこみとのつながりを疑っていたのではありません。あの警動に大清楼を標的にする意図が見えており、それに桜井どのがかかわっておられたためです。旗本の素行に、われら目付は無関心ではいられないのです。何とぞご注意を」
信正は南北両奉行へ頷きかけた。
信正と居並ぶ二人の目付が口元を歪めた。
「すると、音羽町五丁目の古着屋・美濃屋の手代・惣十郎が吉原会所に音羽町九丁目の手入れを訴えていたことがわかりました。その訴えで惣十郎は、やはり大清楼を特に名指しし、乱れが甚だしいと申したそうです。桜井どのと口裏を合わせたごとくに」

桜井は目を伏せている。

「桜井どのは美濃屋の古着仕入れの得意先ですな。惣十郎が桜井どのとの対応を一任されており、目白台の屋敷へ頻繁に出入りいたし、しばしば供応も行われた。そのため、八月晦日に菱川の船を借りた桜井どのへの供応を、誰も疑わなかった」

「しばしば供応などと、そんなことはありません」

と、細い声でかえした。

「惣十郎とは、どこで知り合われた」

「さ、さあ、それはどこだったか、だいぶ以前のことですので」

「三年ばかり前に大清楼で、ではないのですか。桜井どのは大清楼の芸者・梅里を囲いたいとの望みを持ち、以前よりよく通っておられましたな。殊にここ半年ほど前からは、梅里を妻妾として迎えるつもりであると、ご同輩方に公言なされておられましたな」

桜井は聞きたくないという素振りで、顔を伏せて左右に振った。

「梅里を妻妾にする話はさて置き、惣十郎は桜井どのに近付き懇意になった。しかし惣十郎は商いが目当てではなかった。惣十郎が菊の助一味であり、五年前江戸にきて菊の助一味の江戸での大仕事のお膳立てをしていた、ということが本日、判明したの

ですから。つまり……」

「わからなかった。ただ、商売に熱心な奉公人としか思わなかった。多少は供応も受けました。ですが、あくまで古着を買いたいと申す手代との付き合い程度です。信じてくだされ」

「桜井どの、火付け押しこみによる一万四千両余の強奪、無残な殺戮、それらは起こり、賊の逃亡に桜井家の名が利用されたのです。盗んだ金を運ぶ荷車に《桜井家御用》の荷札を堂々と取り付け、飯田町より目白台まで一味は番所に咎められることなく易々と戻った。そんなことが、付き合い程度でできますか。桜井どのは《桜井家御用》の荷札が何かの荷を運ぶのに使われることを、知っておられたのでござろう」

桜井は掌で目を覆った。

・若年寄の水野隠岐守が咳払いをした。城内は静まりかえっている。

「七月のことでござった。惣十郎がわが屋敷を訪れ、美濃屋に五年奉公したのでそろそろ自分の店を江戸に開きたい、と申しました。手始めに美濃屋の一隅を借り、自ら仕入れた古着を奥州へ卸す商いを始めるつもりである。ただ、美濃屋の主人の許しを得られておらず、仕入れの荷に《桜井家御用》の荷札があると主人に疑われずにすむゆえ、商いが軌道に乗るまでのほんの数ヵ月、桜井家の名を使わせてほしい、と頼ま

れたのです」
「そのようなことで由緒ある家名を使わせたのか。武門の恥とは思わなかったのか」
水野隠岐守が険しい口調で質した。
「店に損をかけるわけではなく、事実、これまでに何度かわが家より古着を仕入れておりましたし、惣十郎の熱意に押され、ついそれぐらいならと……」
「それは熱心にもなるだろう。江戸での大泥棒のお膳立てですからな」
榊原がまた皮肉っぽく言い、南町奉行・筒井和泉守と相槌を打った。
「見かえりは？」
信正は短く問うた。
「見かえりなど。ただ、上がった儲けの何がしかを謝礼にとは申しておったような。む、むろん、謝礼など受け取る気はありませんでした。わたしは、商いに熱心な手代の望みの手助けをしてやる、その思いだけでした」
「ほかには」
「ほかに？」
「儲けの何がしかを謝礼のほかに、何を」
「ですから、手代の望みの手助けをと、それだけです」

「音羽警動の訴えは、惣十郎と口裏を合わせ大清楼を標的にしたと思われる警動の訴えの意図はなんだったのですか」

桜井は肉の弛(たる)みが見える太い首を左右に振った。

「今さら己を取りつくろって何になりますか。惣十郎は桜井家の名を利用するため、桜井どのに気に入られるためには、なんでもしたでしょう。江戸での大仕事が狙いの惣十郎が、わざわざ吉原まで出向いて大清楼を名指しして取り締まりを訴えたのは、桜井どのに取り入る目当てがあったゆえではありませんか」

信正の語調はあくまで穏やかだった。だが、

「もしや、大清楼の芸者・梅里にかかわりがあるのでは」

との問いに、若年寄御用部屋の一同がざわついた。

桜井は沈黙の中で、こくりと首を折った。

後悔と虚しさに、踏み堪えていた力が抜けたかのようだった。

「お恥ずかしい……」

と、己の粗相をなじった。

それから、ぼそぼそ、と口を開いた。

「梅里は、音羽一の器量よしと評判の芸者でした。器量のみならず、三味線や唄や踊

りの芸事に優れ、気風のいい気立てで、音羽一、いや場末の音羽でなければ江戸一番の芸者と評判が立ったでござろう」

ほお……と、一同の声が上がった。

「そんな梅里だからこそ、わが妻妾として迎えたかった。芸者が旗本二千石の桜井家の妻妾に納まるのです。なんの不服があろうかと口説いた。ですが梅里め、金にも家柄にもなびこうとせぬ。高が芸者の分際で、気難しい女でした。わたしも意地になりました」

「惣十郎が梅里を落とす手立てを、入れ知恵したのですね」

「さよう。音羽の岡場所に警動が入り、大清楼が打ち壊しになればいい。大清楼にいた女たちは吉原へ拉致され、奴女郎の勤めをさせられる。梅里も吉原へ連れていかれたとみな思う」

「梅里は芸者をしていますが、大清楼の主人の娘で本名を歌といい、客の相手をする子供屋の女ではありません。吉原の男衆も女郎以外は連れていかないはずです」

「大清楼が打ち壊しに遭った騒ぎにまぎれ、梅里を吉原の男衆から守るためにわたしが安全な場所に匿ってやるのです」

「匿う？　それは桜井どのが梅里を連れ去るという意味ですか」

「違う違う。匿ってやるのです」
「桜井どの自ら、それをやったのですか」
「わたしは何もしておりません。話は聞いた。しかしわたしは、いくらなんでもそんなことはできぬと思っておりました。わたしはそんなことをする気はなかった」
「にもかかわらず、警動をお奉行に訴えられ、それは行われました。訴えの通り、料理茶屋では大清楼だけが狙われましたな」
「榊原どの、それはまことですか」
若年寄の水野隠岐守が訊いた。
「さあ。現場の指図は掛の与力がいたしますし、実際に打ち壊しを行うのは吉原の若い者らでござるので」
榊原は素知らぬふうに答えた。
「梅里を連れ去る気は、もうとうありませんでした。ただ、梅里がわが意を顧みず、あまつさえわたしに付き纏われて困るなどと九丁目界隈で噂を立てられましたゆえ、大清楼に懲罰を下さんと、訴えをいたしました。そう、城中紅葉之間の縁廊下で片岡どののご忠告を受けましたな。あの後です」
「ああ、なるほど。わたしが言わずもがなのご忠告を申し上げたため、かえって意地

になられた。わたしにも一端の責任があるのですな」
「い、いや。そういう意味では、ござらんが」
「では、梅里は無事、今も大清楼におりますのか」
「それが……」
桜井は口ごもった。
「先夜の警動の後、梅里はどこぞに姿を消したらしいのです。わたしはてっきり吉原へ連れていかれたと思い、奴女郎をさせられる前に助け出してやるつもりで吉原へいきましたが、梅里はおりませんでした。会所で訊ねましても、会所の役人は梅里なる女は連れてきていないという返答でした」
「惣十郎は昨日の朝出立するまで、何食わぬ顔で美濃屋におりました。惣十郎には訊ねなかったのですか」
「会えなかったのです。何度かわが屋敷へ呼び立てましたが、惣十郎め、何やかやと理由を申して顔を出しませんでした。わたしも深くは考えず、仕事が忙しいのだろう、一段落して顔を出したその折りに確かめればよい、と放っておきました。まさか、惣十郎が独断で梅里を連れ去るなど、するはずがありませんし……」
そのとき、桜井は「あっ」と言葉を切った。

何かを思い当たったかのように、膝をぽんと打った。それから、
「そうか。そうだったか」
と、ひとりで合点している素振りを見せた。
「何か、思い当たる節があるのなら、申されよ」
榊原が傍らより急かした。
「今、たった今気付きました。惣十郎は菊の助とやらの賊の一味だった。そんな悪党ならやりかねません。おそらく、いや間違いなく梅里は惣十郎が連れ去ったのです。梅里を連れ去る相談を持ちかけてきたとき、惣十郎が言っておりました。江戸の女は蝦夷では高値で売れる、金になる。梅里が言うことを聞かぬのなら、人知れず蝦夷へ売り払えばいい、そういう手蔓もあると」
桜井は信正へ身を乗り出し、充血した目を見開いた。
「あの折り、手代にしては大胆なことを言うやつ、と意外に思ったのを覚えています。片岡どの、早く手を打たねば、梅里は惣十郎らの慰み物にされた挙句、蝦夷へ連れ去られてしまいます。そうなれば、梅里は二度と江戸へ戻ってくることはかないますまい。早く助けださねば」
「桜井どの、それは違うのではありませんか。少なくとも惣十郎は盗んだ金を飯田町

まで運ぶ屋根船の近くにいて、九ツのときを待ったと思われるし、ほかの仲間も常盤橋御門外界隈のどこかに潜んでいたはずです。音羽警動が八月晦日とつかんでいたとして、それに乗じて佐賀屋へ押しこむという手筈ならありましょうが、梅里をさらうゆとりまではないのでは」

「ええ、ええ。ですから惣十郎にはほかにも手懐けた仲間がいたのです。やつめ、わたしがその気であれば手助けをする男らもいると、そうも言っておったのです。そいつらに金でやらせたのです。確かです。船頭の重吉と同じく手懐けた仲間が……」

「桜井どのも手懐けられた、ひとりなのであろう」

榊原に言われ桜井は、あっ、と黙りこんだ。

信正は若年寄の水野隠岐守と京極周防守へ視線を移した。

町奉行の榊原と筒井は、呆れ顔で顔を見合わせた。

「早く助け出さねば、と今さら他人事のように。これ以上桜井どのの話を聞いても意味がない。今宵はこれまでといたそう。桜井どの、おぬし、この一件が落着するまで謹慎しておられよ。追って沙汰をいたす。どのような沙汰になるか、今は何も言えん」

水野隠岐守が言うと、桜井は己の犯した失態の深刻さに顔を歪めた。それでも懸命

に居ずまいを正し、
「ははあっ」
と、頭を深々と伏し、畳へ着けた。

第九章　上州沼田

一

九月十日、番町の光成館が始まった。

藤蔵は母親・稲が持たせてくれた弁当行李や筆と硯、帳面、算盤を包んだ風呂敷を肩に背負い、新調の縞木綿を裾端折りに小倉帯、黒の股引、黒足袋草履に拵え、朝日の降る江戸川を、江戸川橋の河岸場から船で市ヶ谷御門まで向かった。

清蔵と稲が「しっかり勉強に励むんだよ」と励まし、壊された大清楼にひとり残った下男の代吉が「おぼっちゃん、いってらっしゃいやし」と、江戸川橋まで見送ってくれたが、お父っつあんもおっ母さんも代吉も、元気がなかった。

藤蔵自身、光成館へ通う胸の高鳴りの一方で、気の晴れない屈託を抱えていた。

朝日に川面がきらきら光り、冷たい秋の気配に身は引き締まるのに、すぐに姉の歌のことが思い出され、小さな唇からもれるのは溜息ばかりだった。

藤蔵は鼻梁に架かった眼鏡を、指先で上げた。

歌の行方はまだ不明のままである。

えらいことになった。お歌姉さんはどこへ消えちゃったんだろう。本当に神隠しに遭っちゃったんだろうか。なんでお歌姉さんが神隠しに遭わなきゃあならないんだ。冗談じゃねえや。

お父っつあんは、壊された建物を修繕して大清楼を再開させるため大工の棟梁らと連日相談しているけれど、前のような覇気が感じられなかった。

おっ母さんは家の片付けや使える道具と使えない道具の整理をしつつ、とき折りお歌姉さんのことを思ってぼうっとしたり、めそめそしたりだった。

藤蔵は昨日の重陽の節句まで、毎日、市兵衛先生と一緒に麹町や赤坂、牛込、小日向、音羽周辺の大塚、小石川、遠くは上野から浅草まで、お歌姉さんの知り合いや、知り合いのさらに知り合いへと伝を頼って、行方を捜し廻った。

藤蔵が辛いのは、何よりもお歌姉さんをさらった者の狙いが推量できないことだった。強いて推量すれば、打ち壊しに押し入った吉原の男衆らの中の誰かが、騒ぎにま

ぎれてお歌姉さんをこっそり連れ去り、人買いに売り払ったとか。

そんなことを考えると不安でいたたまれなくなるが、一方で、子供の藤蔵でさえ、子供じみた馬鹿げた推量に思われた。

ただ昨日、目白台の関口臺町で捕物があったそうだ。

常盤橋御門外本両替町の佐賀屋という本両替商を襲った押しこみの一味のねぐらが関口臺町に見付かったとかで、一味はすでに引き払っていたが、ねぐらを提供した佐川山城という陰陽師が町奉行所に捕らえられた、と近所の人が話していた。

常盤橋御門へはお父っつあんに連れられていった覚えはある。

音羽からとても遠く、あんな遠い町で起こった恐ろしい押しこみが、すぐ近所の目白台に潜んでいたと思っただけで、藤蔵の胸は音を立てた。

お歌姉さんの身が心配なうえに、常盤橋御門外の火事と押しこみが打ち壊しに震えたあの同じ夜に起こったこと、そして押しこみのねぐらが音羽の目と鼻の間の目白台にあったという何もかもが因縁めいて、藤蔵の不安はつきなかった。

その秋、光成館に入門を許された塾生は、殆どが藤蔵より年上の、藤蔵以外はすべて武家の子弟だった。

藤蔵は武家の子弟に雑じり、午前は窪田広兼、重兼先生の訓示、次々と先生が入れ

替わって、この後に学ぶ算学算道の話や勉強の方針、年嵩の塾頭が説明する塾の決まり事などを身を硬くして聞いた。

昼の弁当を使ったとき、周りの子の弁当がひどく質素なのに較べ、おっ母さんの拵えた弁当が豪華すぎて吃驚した目で見られ、藤蔵は恥ずかしかった。

明日からの弁当は握り飯と漬物だけにしてくれといわなきゃあ、と思った。

午後からは、先輩の塾生らの前で新入りの入門者ひとりひとりが名乗りを上げた。

藤蔵の番になると、たったひとり裾端折りに股引姿を笑われ、塾生らが藤蔵を見てひそひそとささやくのを堪えなければならなかった。

藤蔵、くじけるんじゃないよ——と、お歌姉さんなら笑って言うだろう。

お歌姉さんのことを思えば、それぐらいの我慢はちっとも苦にならなかった。

それに若先生の重兼先生が、藤蔵を笑った塾生らに、

「藤蔵は町家の者だが、このたびの入門者の中では試問の成績が抜群であった。算学を学ぶのに身分は役に立たぬ。ほかはみな武家だが、町民だからと侮っていては遅れを取るぞ。心しておくように」

と言ってくれたことが、照れ臭さ半分、得意半分だった。

光成館初日、藤蔵は塾を終えた後、まっすぐ音羽へ戻らなかった。

九月の三日から昨日まで、お歌姉さんの消息を求めて市兵衛先生と江戸中の町を歩き廻った。しかしながらお歌姉さんの消息は、糸口さえ見付からなかった。

番町にも、麹町善国寺横町の宝泉師匠の元へ三味線長唄の稽古に通っているお侍がいると聞いていた。

前に市兵衛先生と一度訪ねたが、その折りは留守の家が何軒かあった。

塾を終えた後、藤蔵は留守だった家をひとりで訪ねるつもりだった。

徒労とわかっていながら、もしや、の一縷の望みを捨てきれなかった。

その黒羽織の薄気味の悪い侍といき遇ったのは、表二番町の通りから地獄谷へ出る道に差しかかったときだ。

侍は藤蔵よりは大きいが、大人にしては背がひどく低かった。

だが子供でないことは、腰に帯びた異様に長く見える二刀や道に引きずりそうな縞袴を見るまでもなく、その風貌で瞭然だった。

張り出したごつい顎と顔が裂けそうなほど大きく厚い唇が、不気味だった。

高い頬骨の間に獅子鼻がひしゃげ、窪んだ眼窩の奥からぎらぎら光る目が藤蔵を睨んでいるかに思われた。皺を何本も刻んだ額の上に、黒い髪をぺたりと総髪に束ね、小さな髷がちょこんと空を向いていた。

黒い岩の塊みたいな侍だった。
侍の黒足袋と、ざ、ざ、と踏む草履が、ゆれる袴の裾からのぞいていた。
どうしよう、と思いつつ、といって引きかえすわけにはゆかず、藤蔵は急いでゆきすぎるため小走りになった。
武家屋敷の土塀の間を、石ころだらけの狭い道がゆるく蛇行していた。
昔はこの道脇に死体捨て場があった、と藤蔵に算勘の宿題を残したお客のお侍から聞いた覚えがあった。
だから地獄谷と言うのだ。お侍が言っていた。
地獄谷のある武家地を抜ければ善国寺横町に出られ、宝泉師匠の裏店がある。
目指す武家屋敷はこの道の途中にある。
藤蔵は侍と目を合わさないように下を向き、眼鏡を指先で上げた。
「小僧、どこへゆく」
侍の左隣を通りすぎかけたとき、野太い声をいきなり浴びせられた。
「え？」
藤蔵の身がすくんだ。
恐る恐る見上げると、侍の腰の長刀の鞘が黒光りしていた。

足が震えて動けなかった。

「町家の小僧だな。この辺りになんぞ用があったのか」

「わたしは……」

藤蔵はごくりと唾を飲みこんだ。

「市ヶ谷三番町の光成館という塾の、門下生です」

「光成館？　光成館と言えば窪田先生が開かれておる算学専門の私塾か」

「そ、そうです。窪田先生の、し、私塾です」

「光成館は、武家の子弟の中でも、もっとも優れた子弟が算学の勉強のために入門する塾だろう。光成館で学んだ者はみな公儀の勘定方を目指すと聞いておる。だがもっと大きな子が入門するのではないか。小僧は光成館へ入門する年ではなかろう」

「光成館はお侍と町民の区別はありません。と、年がいかなくても試問にさえ合格すれば入門が許されます。わたしは、わたしは八月の試問に合格し、今日から塾が始まりました」

「今日から。すると光成館入門の第一日目か」

藤蔵は懸命に頷いた。

大きな物の怪の顔が、藤蔵を頭から呑みこもうとするかのように近寄せられた。

藤蔵は身体を反らせて、物の怪から逃れた。
「小僧、優秀なのだな。名はなんと言う」
「ととと、藤蔵、です……」
物の怪が道に笑い声を響かせた。
「藤蔵さん」
「市兵衛先生っ」
二番町の方から唐木市兵衛が大股でやってくる。
藤蔵は物の怪の顔の下から逃れ、市兵衛の前へ走った。
「先生、どうしてここへ」
市兵衛はその日の午後八ツ（午後二時）すぎ、諏訪坂の兄・信正の屋敷を訪ねた。
いき詰まった歌の行方捜しに、兄・信正と弥陀ノ介の手を借りるためだった。
信正はまだ下城しておらず、屋敷で下城を待っているところへ弥陀ノ介が独り戻ってきて、信正が鎌倉河岸の小料理屋《薄墨》で市兵衛を待っていると告げた。
「おぬしを呼びに雉子町の八郎店へいったら、隣のおかみさんに今日は諏訪坂へいくとか言っていたと教えられたから、市兵衛の方にも頭になんぞ用なのだなと思い急ぎ戻ってきたのだ。やれやれ会えてよかった。頭がおぬしに話がおありだ。重要な話

だ。薄墨へいこう」

二人が鎌倉河岸へ向かっている途中だった。

二番町の通りまできたとき、偶然、通りの先に藤蔵が見えた。

おや、と思った。

光成館のある三番町は市ヶ谷御門の北の方角にあり、二番町は反対の南側になる。

「それで藤蔵さんを追ってきたのです。足が速いですね。光成館の今日の勉強はもう終わったのですか」

「今日は訓示やら決まりごとの説明やらで、勉強は明日からです。それで音羽に戻る前に、先だっては留守だった番町のお侍さまのお屋敷を訪ねようと思い……」

「やはり。市ヶ谷御門とは反対の地獄谷の方へ通りを横切るのが見えたので、そうではないかと思いました」

と、さっきの不気味な侍が部厚い身体をゆすって近付いてきた。

「先生っ」

藤蔵は市兵衛の紺袴の後ろへ身を隠した。

赤い唇が耳から耳まで、顔一杯に裂けていた。

獲物を前にして笑っているかに見えた。

「藤蔵さん、大丈夫。怖がることはありません。この男はわたしの友で返弥陀ノ介と言います。この辺りの道に詳しいので、藤蔵さんの先廻りをしてもらったのです」
「友、市兵衛先生のお友だちなのですか。なんだ。わたしはてっきり、辻斬りかと」
「辻斬りか。ここは地獄谷だでな。あはは……」
弥陀ノ介が岩塊の風貌に似合った笑い声を、道にまた轟かせた。
「弥陀ノ介、子供を怖がらすな。おぬしの冗談は子供にはわからん」
「すまん、藤蔵どの。おぬしの顔が面白いので、ついからかいたくなった」
顔が面白い、と言われて藤蔵はちょっとむっとした。黙っていられなかった。
「わたしの顔は、ようく見たら男前だって、おっ母さんもお歌姉さんも言ってました」
藤蔵は市兵衛の袴の陰から弥陀ノ介にかえした。
「そうか、おっ母さんも姉さんも男前と言ったのか。ならばそれが正しい。よって訂正する。藤蔵どのの顔が男前なので、ついからかいたくなった。あはは……」

二

夕七ツ（午後四時）、鎌倉河岸の薄墨はまだ支度中である。

河岸場は今日一日の仕事仕舞いの前の、慌ただしさと賑わいに包まれていた。

けれども鎌倉河岸の賑わいはからくり時計のぜんまいが廻るような夕方の移ろいを、京風小料理屋の店土間にかすかに伝えているばかりだった。

明かり取りの丸窓の障子戸に、狭い庭の竹林と隣家の廂の影を西日がくっきりと描いていた。

板場から京風料理の香ばしい出汁の匂いが漂ってくる。

薄墨の亭主でもある料理人・静観に毎日丁寧に磨かれた鍋が、ゆらりゆらりと火のゆらめく竈で淡い湯気を立てていた。

板場の暖簾をかきわけ、臙脂に銀杏模様を抜いた小袖を幅広の女帯できゅっと締めた佐波が、燗酒と京鹿の子の皿を盆に載せて運んだ。

支度中の店土間がほの暗い静かさに包まれている中に、佐波の草履がやわらかい音を立てた。店土間奥の両開きの襖が仕切る四畳半、

「ご免なさい」
と、声をかけて襖を開けると、京は嵯峨野の景色をあしらった墨絵の衝立。佐波は座敷に上がって、信正、弥陀ノ介、市兵衛の順に銘々膳へ燗銚子を置いていく。
そうして市兵衛の隣の藤蔵の膳には、京鹿の子の皿を置いた。
「藤蔵さん、お腹が空いたでしょう。お料理ができるまでこれを召し上がって、待っていてください」
藤蔵は甘そうな小豆にくるまれた餅菓子を摘んだ。
ひと口齧って小さく咀嚼し、またひと口。そして佐波へか細い声で言った。
「美味しい」
「美味しい？」
佐波が笑みを作った。
佐波は藤蔵のか細い声に、子供が子供なりに抱える屈託を察した。
「佐波、支度中にすまぬな。こっちは酒だけがあればよい。市兵衛に伝えておきたいことがあって、もうしばらく借りる」
信正の慈愛のこもった眼差しにも、心なしか愁いが浮かんでいる。
「どうぞごゆっくり」

佐波がやわらかな衣擦れの音を残し座敷を出ると、四畳半は明るさがふっとかき消えたみたいに重い気配に包まれた。

信正は盃に自ら銚子を傾け、膳にことりと置いた。

「桜井から聞いたときは本当に驚いた。梅里の行方が知れなくなっているなどと、思いもよらなかったのでな」

信正は盃を上げ、ゆるやかに呷った。

「あの夜、何がお歌さんの身に起こったのか、見当が付きませんでした。惣十郎という男、大清楼で桜井と一緒にいたところを一度見たことがあります。五年前から江戸で暮らし、佐賀屋押しこみの支度をしていたとは相当肝の据わった男ですね。それほど肝の据わった男ならできるでしょう。ただ、惣十郎がお歌さんを連れ去ったのなら、何年もかけた大仕事のついでに、ということになりますね」

「ふうむ。まあそうなるのだろう」

信正が言い、弥陀ノ介は黙って頷いた。

藤蔵は鹿の子の半分を手に持ったまま、俯いて動かなかった。

姉の行方の手がかりが思いがけずつかめたが、それが恐ろしい押しこみの一味に連れ去られたと聞かされ、心を痛めているのが憐れだった。

「藤蔵、おまえの心配はわかる」
信正は藤蔵へ言葉をかけた。
「だがな、望みを失ってはいかんぞ。姉さんの命は間違いなく無事だ。わざわざ連れ去ったのは、命を取るつもりがないゆえだ。姉さんは、必ず無事に帰ってくる」
市兵衛が続けた。
「藤蔵さん、蝦夷であろうとたとえ異国であろうと、わたしが自ら追いかけ、お歌さんを連れ戻します。約束します。藤蔵さんは、藤蔵さんのなすべきことをなせばいい」
藤蔵は小さく頷いた。そして市兵衛を見上げ、
「先生、一味のねぐらはどこにあるんですか」
と、不安げに訊いた。
「今、町方が総力を上げて探っているし、八州見廻り役も動いています。一味のねぐらが見付かるのにときはかからぬと思う」
「藤蔵どの、一味が江戸のねぐらから姿を消したのは一昨日だ。まだ江戸からそう離れてはおらぬ。それに八州の番所や関所、宿場には触れがとうに廻っておるから、警戒は厳しい。一味は簡単には八州から出られぬ。八州にいる限り、袋の中を逃げ廻っ

ておるのと同じだ」

弥陀ノ介が力強く言った。

だが藤蔵は、大人たちの言葉が慰めであることぐらいはもうわかる年ごろだった。

それ以上は訊ねず、鹿の子をまたひと口齧った。

市兵衛らにも、それ以上の言葉はなかった。

「兄上、ただ、わたしは少々不審に感ずるのです」

市兵衛は信正へ向いた。

「不審にか……」

信正は盃を乾した。

弥陀ノ介が信正の盃に銚子を差した。

「惣十郎は五年前より江戸へきて大仕事の支度をしていました。ということはその前からこのたびの襲撃の企みはあったのでしょう。手口は荒っぽく強引ですが、周到なお膳立てをした。それほど周到な一味が、何年も支度にときをかけた大仕事のついでに、人さらいなどやるでしょうか。やらずもがなのことをやり、そこから足が付く恐れを生じます。ついでになどというのは、周到な一味に似合わない」

「だが、あり得ないとは言えぬ。緻密に組み立てた謀は、かえってひとつの齟齬

が破綻につながりやすい。策略、政、あるいは人が使う道具にしても、優れたものには遊びがある。梅里は音羽一の芸者と評判だったそうだな。それほどの芸者なら、桜井に限らず、己のものにしたいと惣十郎らが考え、まさについでにやってのけたとすれば、それはついでというよりも、一味にとっては遊びと言っていいのかもしれぬ」

市兵衛は唇を結んだ。

「桜井長太夫、船頭の重吉、そのほかにも惣十郎に手懐けられた仲間がいるはずです。そういう仲間がいないと、佐賀屋押しこみと同時にお歌さんをさらうことはできない。惣十郎の江戸での暮らしぶりを、美濃屋に奉公していた裏でどういう動きをしていたか、洗い直してみる必要がありますね」

「遅きに失したが、八月晦日夜の音羽周辺の訊きこみを徹底してやる必要もある。思うに、梅里をさらった者らは、梅里を連れ江戸を先に出た。どこかで一味と落ち合い、梅里を渡し、金を得る。落ち合う場所は……」

信正は考える素振りになった。

「お頭、菊の助が率いる一味が中山道脇道の目白台を江戸でのねぐらにしたということは、一味の根城は信濃か上州と考えられそうですな」

弥陀ノ介が口を挟んだ。

「そうか。目白台は、雑司ヶ谷、池袋村、それから板橋の中山道につながる脇道だったな。中山道の先は信濃。しかし途中、中山道から分かれて上州路をたどり……しかしそれほど単純かどうかな。あれだけの一味だ。逃げ方も心得ているのに違いあるまい。ただ、触れは八州の各宿場に廻っておる。ひと固まりになれば怪しまれる。それぞれ二、三人の組に分かれて根城を目指しただろう」

「しかも、一万四千両余の金をそれぞれが分け持って、なのでしょうな」

「一万四千両余をひとりおよそ千両ずつ。できぬ額ではない」

「やつら、銀貨と銭は頭から捨てておりました。すべてが金貨。一万四千両は一味の人数を考えてぎりぎりの額なのでしょう。多すぎても運べぬ」

弥陀ノ介は市兵衛に白い歯並みを見せた。

「市兵衛、菊の助座、と噂になっている盗人一味が八州に十年以上まえからいるそうだ。聞いたことはないか」

信正が盃を置いて言った。

「菊の助座……いえ、知りませんでした」

「噂だ。菊の助なる一味が実際にいるかどうか、定かに八州廻りさえつかんでいなかった。ただ、噂だけが神出鬼没の盗人一味と流れていたらしい。先夜の佐賀屋押しこ

みで、噂の菊の助座は噂ではなく、本当におることがわかった。手口に容赦がなく、極悪非道、まさに神出鬼没の進退だ。恐ろしい一味と言わねばならん」

「兄上、一味の逃亡先、あるいは根城が判明したならば、江戸より人を差し向けることになるのでしょうか」

「そうなる。このまま菊の助一味をみすみす取り逃がしてはご政道にかかわる、とご老中方も憂慮しておられる。今朝、町奉行と八州取締役代官とわれら目付とで評議を持った折りに、三者の思いがひとつになった。菊の助一味の居どころが八州のどこかの地で判明いたしたときは、われらの間から人を差し向け、その地の町奉行所や陣屋の助太刀は得ても、江戸者の面目にかけて江戸者の手で捕らえてみせるべきだとな」

信正は酒を自らつぎ、盃を呷った。

「菊の助は、ご公儀を嘲笑うがごとく江戸城本丸下の常盤橋御門外を標的にした。火付けと押しこみと殺戮を、常盤橋御門外でやって見せた。菊の助座の狂言の晴れ舞台とでも言いたげではないか」

市兵衛は信正へ膝を向け、膳ががたと鳴った。

「市兵衛、弥陀ノ介、江戸の真ん中はどこだ。江戸の真ん中は今や江戸城ではない。常盤橋御門外、金座屋敷があり、本両替商が巨万の富を才覚ひとつで動かす本町と本

両替町こそが、江戸の真ん中、ど真ん中だ」

市兵衛は勇んだ。

「そのときは、兄上の裁量でわたしを追手の手先に加えてほしいのです。お歌さんの行方が知れず、藤蔵さんは苦しんでいる。ご両親も心を痛めています。何とぞ、わたしにもいかせてください。わたしを、役に立ててください」

弥陀ノ介が続いた。

「お頭、そのときはわたしもいきますぞ。菊の助の顔が見とうござる。どんな面か、どんな考えをしているか、どれほどの腕前か、わが目とわが腕で菊の助を確かめとうござる」

信正は市兵衛と弥陀ノ介を見つめ、それから二人の盃に銚子を差した。

三

渋井と助弥が深川油堀の喜楽亭にいる。

連日の夜更けまでの訊きこみと、重陽の節句だった昨日は目白台の捕物と捕らえた陰陽師・佐川山城の訊問が真夜中にまでおよび、その夕刻、喜楽亭の縄暖簾をくぐっ

たのは九月の三日以来だった。
亭主は口には出さないが、勘平を亡くして内心は辛い思いを堪えているだろう。
と、渋井は気になりつつも、喜楽亭の安酒を呑み、食い慣れた煮物を突きながら亭主と馬鹿話や馬鹿笑いを交わすいつもの暇がなかった。
「ああ、くたびれた」
と、渋井はほかに客のいない店土間の腰掛に腰を落とし、杖に突いた大刀の柄頭に両手を乗せた。
すかさず、助弥が板場の亭主に酒を頼んで、板場からかえってくる亭主の返事は相変わらず無愛想である。
痩せ犬が走り出てきて、ご無沙汰で、と言わんばかりに尻尾を振った。
渋井は痩せ犬の頭を撫でた。
「てめえの不細工な面が見られなくて、寂しかったぜ」
痩せ犬は、わん、とひと声へつらった。
痩せ犬の名を、芝にいた野良犬だから芝野良と渋井は呼んだが、つまらねえ、と亭主は採用しなかった。だからまだ名前はない。
亭主が板場から顔をのぞかせた。

「忙しそうじゃねえか。おらんだの先生が旦那方がいねえし、市兵衛さんも顔をみせねえから寂しがっていただで」

おらんだの先生とは京橋柳町で町医者をしている蘭医・柳井宗秀である。

「骨折り損のくたびれ儲けだったぜ。なあ、助弥」

「まったく、惜しいことをしやしたねえ」

助弥が渋井の後から痩せ犬の頭を撫でた。

「佐賀屋押しこみ一味の、宿が見付かったそうだな」

「ふん、やっぱり気になるかい。昨日見付かったんだ。上手い具合に勘平の手土産の粟焼が役に立ったんだがな」

「役に立ってよかった」

「ところがよ、やつら、一日違いで姿をくらましていやがった。手柄を立て損ねた」

「惜しかったな。しょうがねえよ。そういうもんだ」

亭主は、ぼそ、と言い、顔を引っこめた。

しばらくして熱燗の徳利に猪口、肴にはいつもの煮付けに浅草海苔、大根の漬物を運んできた。渋井と助弥の猪口に酌をし、

「賊は江戸を離れたのかい」

と、訊いた。
「間違いなく、な」
渋井は熱燗の猪口をすすった。
「頭はどんな野郎なんだ」
「菊の助、って名前だ。噂じゃ一味は菊の助座と呼ばれていてな、八州の裏街道でちょいと知られた名らしいんだ。ただ、噂が本物かどうか知ってるやつがいねえし、先夜の押しこみがその菊の助座の仕業（しわざ）かどうかもわからねえ。何しろ八州じゃあ、菊の助と名乗る押しこみからこそ泥まで、結構いるそうだ」
渋井はそう言って、くくく、と笑い声をくぐもらせた。
「賊は江戸からどこへ逃げたんだ」
「それがわかりゃあ、今ごろ喜楽亭なんぞにきているもんか。上州か野州（やしゅう）か、まあ、八州のどっかだとは思うんだがな」
陰陽師の佐川山城も重吉も、菊の助一味の内情はまったく知らなかった。
「そうだ。賊の根城は八州に間違いねえよ」
亭主はまた、渋井の猪口に酒をついだ。
「なんで間違いねえって言える。勘平がなんぞ、言ってたのかい」

「そうじゃねえが。十年前、さんざん悪さをした挙句に勘平が出ていきやがるとき、てめえを捨てたお袋を捜しにいくと言っていやがった。お袋は八州の女だった。勘平の手を引いてここへ移り住んできたころ、よく言ってやがった。八州は徳川さまのお膝元だ、他国とは国柄が違うんだとな。あの女は八州生まれを自慢にしてやがった。可愛いもんだった。だからどうした、とはおらは言わなかった」

亭主は首にかけた手拭で潤んだ目を拭った。

強がってはいても、人はすぎた昔に死ぬまで付き纏われる。

「だからよ、勘平は八州から出ねえと思う。あの馬鹿が賊の一味に加わった土地も、間違いなくそこは八州だ」

「八州、つっても広いからな。お袋の生まれは八州のどこだい」

「知らねえ。どこの生まれか訊く前に、男作って駆け落ちしやがっただで。はは……」

ぷふっ、と渋井が肩をゆすって噴き出した。

その拍子に腕が卓の長板の縁に触れ、ことん、と徳利が倒れた。

酒がこぼれ、亭主の着物の膝にかかった。

「おっと、すまねえ」

渋井が白衣の裾で亭主の膝を拭おうとした。
「ええだ、ええだ。旦那の着物が汚れる」
亭主は自分の手拭で着物の膝を拭った。
拭い終わると手拭を首へかけ、酒のこぼれた徳利を取って、
「酒を入れてくる」
と、板場へ戻りかけたところを渋井が止めた。
「おやじ、その手拭はどうした」
「手拭？　これはおらの手拭だ。前から使ってるだでよ」
「そこに奉納弥勒寺と読めるじゃねえか」
「ああ？　そうかい」
亭主が白い手拭を取って、手拭に染めこまれた文字を読んだ。
「ああ、そうだな。弥勒寺という寺に奉納した手拭だな」
亭主が目を細めて言った。
在郷の有力な商人や客商売の茶屋や廓の主人が、菩提寺の縁日や祭礼の折りに家内安全、商売繁盛などを祈願して手拭などを寺に奉納し、商売の宣伝をする。
遊里の評判の高い女郎が、奇特な心がけと売名をかねて手拭を奉納する場合もあ

る。

「ちょいと貸せ」

渋井は手拭をつかんだ。

沼田城下の松野屋の名が染められている。

上州沼田城下の松野屋という商家か茶屋か、とにかく何かを営んでいる店が弥勒寺という寺に奉納した手拭らしかった。

上州沼田だと？　渋井は亭主を睨んだ。

「おやじがなんで、奉納手拭を持っているんだ。沼田へ旅をしたことがあるのかい」

「ねえ。おら知らねえ」

「誰からもらった。手拭はどこで、いつ手に入れた」

「いつって、おら前から使ってるだでよ」

亭主は首をひねった。

こいつは、と言いかけた渋井に亭主が答えた。

「そうだ。思い出した。これは勘平が手土産の粟焼をくるんで提げてきた手拭だ。土産なんぞと、手拭を解く前に喧嘩が始まったでよ。喧嘩の最中に旦那がきて、勘平が逃げちまいやがった。だで、そのままになっていたんだ。深く考えずに使っていた

が、そう言えばこれも勘平の持ってきたもんだった」
手拭をつかむ渋井の手が小刻みに震えていた。
亭主が、きょとんとした顔付きをしている。
「旦那、もしや沼田城下に一味の根城が……」
助弥が渋井の後ろから手拭をのぞいて言った。
「わからねえ。わからねえが助弥、ちょいと奉行所へ戻るぜ」
「合点、承知」
助弥が徳利の残った酒を、ぐいっと呷った。

真夜中の九ツ近い北町奉行所の奉行御用部屋に、北町奉行・榊原主計頭が小袖の着流しに羽織の軽装で、西側上座に着座していた。
中庭の縁側がある障子を背に、年番方筆頭与力・村野守繁と渋井、さらに平同心の椎名甲三郎が並び、三人に向き合って杉戸を背にして、馬喰町の御用屋敷から遣わされた八州取締出役の指揮監督に当たる代官の手附が一名着座していた。
奉行をはじめ、五人の前には茶碗が置かれている。
奉行に専属する手附同心はおらず、広い御用部屋の手附同心が執務に向かう机の並

んだ暗い一画は、奉行の周りを灯す二台の行灯の明かりがかすかに届くばかりだった。

渋井はとき折り、肩をもみほぐすように廻し、薄暗い天井を見上げていた。

興奮の冷めない若い椎名は、唇を真一文字に結び、鼻息をもらした。

年番方与力の村野は、八丁堀の屋敷で床に就いたところを奉行所へ呼び出され、眠気と闘い欠伸を堪えており、御用屋敷手附は茶をゆっくり含んでいた。

やがて表玄関の方から廊下を、とんとん……と幾つかの足音が近付いてきて「申しあげます。小人目付の返弥陀ノ介さまがお連れの方とお見えでございます」と、案内の中間が杉戸の外で言った。

渋井は声のした杉戸を見た。

榊原と村野が目配せし、村野が「お入りいただけ」とかえすと戸が開き、中間の手燭が照らす廊下に、黒羽織の小人目付と思われる男と、もうひとり、紺羽織の男が手を突いていた。

「ご足労痛み入ります。そちらへ」

村野が言い、廊下の二人に手附の隣に着座するように指示した。

渋井は、小人目付の黒羽織に縞袴を引きずった小僧かと見まがうほど背は低いもの

の、部厚い岩塊を思わせる身体付きと、行灯の明かりの陰影に刻まれた薄気味悪い顔に、思わず見とれた。

だが渋井は、その小人目付に従う頭一つ以上背の高い痩軀に紺羽織を纏った男を見て、ああ、と開けた口がふさがらなかった。

市兵衛、なんでここにきたんだよ、と胸の中で問うたが、口に出しはしない。

小人目付よりやや控えて市兵衛が着座し、二人が改めて奉行の榊原主計頭へ手を突き、頭を垂れた。

「小人目付を務めます返弥陀ノ介でございます。お目付筆頭・片岡信正さまの命により、お奉行さま指図に従うべく、参上いたしました」

「ふむ、返弥陀ノ介。片岡どのから聞いておる。小人目付衆一の腕利きとな」

「畏れ入ります。またこれなるは唐木市兵衛と申します」

と、弥陀ノ介がやや後ろに控えた市兵衛へごつい顔を向けた。

「お目付・片岡さまのお許しを得て、わが手先として、このたびの役目に召し連れます。みなさま方、よろしくお願いいたします」

「唐木市兵衛でございます。よろしくお見知りおきをお願いいたします」

市兵衛が頭を低くして言った。

呆然としている渋井以外は、二人に黙礼をかえした。

「唐木市兵衛と申すか。少々痩せておるがいい身体付きだ。返の手先を務めるくらいだから、腕利きだろう。このたびの役目の事と次第によっては、乱戦になるかもしれぬ。唐木、頼むぞ」

奉行の言葉に、市兵衛はさらに頭を低くした。

「では、これで揃うたから、早速、本題の評議に入る。それぞれ大体の事情は承知しておられると思うが、念のため、渋井より経緯を説明いたす」

渋井――と、与力の村野が促した。

「は。北町奉行所定町廻り方・渋井鬼三次でございます。去る八月晦日、常盤橋御門外、本町並びに本両替町で起きました……」

と、渋井はまず、佐賀屋押しこみの一件探索における役割を述べた。

それから、勘平という江戸生まれの男が、八月晦日当夜に、本石町で殺害されていたことから始まり、深川の父親に携えた手土産の粟焼から佐賀屋押しこみの菊の助一味のねぐらを関口臺町に見付けたこと。

さらに今宵、勘平が持っていた奉納の手拭より、菊の助一味の根城が上州沼田城下が疑わしいと睨んだ経緯を要約して語った。

「今のところ、沼田城下の松野屋という店に菊の助一味を突き止める手がかりがあり、近在が疑わしいということのみが探索の目当てです。しかしこの手がかりを調べぬ、という手はありません」

「と申しても、沼田近在というだけで範囲は広い。これだけの手がかりでは漠として、どこまで探索の手を広げるのか、確かな目当てがない。しかも沼田は土岐家の領内でもある。目当てもなくこの段階で多勢を向かわせるわけにはいかない。そこでまずは奉行所より渋井と椎名の両名を遣わし、両名に沼田城下と近在の探索に当たらせる」

与力の村野が言った。

「しかしながら、われらが自らいって調べて、運よく一味の潜伏先を突き止めたならば、一気にわれらの手で菊の助一味を捕縛いたす所存です」

渋井が言い足した。

「ゆえに今朝の申し合わせによって、お目付と御用屋敷へ協力をお願いした次第だ」

それは奉行の榊原が言った。

承知いたしております――と、弥陀ノ介が奉行と渋井へ、黒ずんだ眼窩に光る大きな目を向けた。

「われら両名は、町方探索の支援に廻る役目になると、お目付さまに言われております。土岐家には沼田城下の町方の了解と協力を得られるよう、お目付さまより土岐家上屋敷へ要請いたし、今夜中には土岐家の書状をいただく手筈になっております。われらはそれを持って沼田へ向かいます」

「よろしかろう。岩鼻の方へは」

村野が御用屋敷の手附へ言った。

「お代官さまより岩鼻の陣屋への書状をお持ちいたしました。どうぞこれをお持ちください。一味の根城を突き止め捕縛となった場合、この書状があれば陣屋からも人手が出せます。八州廻りが近くにおれば都合がいいのですが……」

手附が書状を村野の膝の前へ差し出した。

八州廻りは四手に分かれて、関八州を順次巡邏してゆく。

秋から翌年春にかけては馬喰町の御用屋敷に詰めている手附らも出役している時期であり、このたびの沼田探索には人手が廻せない。上州岩鼻に出先の陣屋があり、陣屋の助手を要請するための書状だった。

「これで結構。お奉行さま、よろしゅうございますな」

村野が奉行に確かめた。

「よい。渋井、椎名、よき成果を待っておるぞ。渋井、この一件ではおぬしの推量と勘が大いに役立った。しかし、本当の働きはこれからぞ。最後まで始末を付けてこその手柄だ。一味は江戸町方の鼻を明かしたつもりだろうが、そうは問屋が卸さぬと思い知らせてやれ」

「では各々、旅支度をして明朝明け方七ツ（午前四時）までに、中山道板橋宿の番所にまいられるように」

しかし奉行は、弥陀ノ介と市兵衛へ青褪めた顔を廻した。

「返、唐木、おぬしらの働きにも期待しておる。この始末、江戸町方のみならず、ご公儀の面目もかかっておると、心せよ」

奉行の昂りが言葉に現われていた。

「渋井どのらと力を合わせ、必ず」

弥陀ノ介と市兵衛は、頭を深々と垂れた。

市兵衛が頭を上げると、渋井がいわくありげな一瞥を寄越していた。

四

明け七ツ、まだ夜の闇に包まれた板橋宿に近在百姓家の一番鶏が鳴いた。

九月十一日の夜明け前、晩秋の冷えこみは厳しかった。

板橋宿の番所に集ったのは、渋井と椎名、渋井の手先の助弥、蓮蔵、今吉、奉行所の中間一名、そして弥陀ノ介に市兵衛だった。

渋井と椎名は野羽織に裁っ着け袴、助弥らは裾端折りに股引、手甲脚絆。みな菅笠をかぶって草鞋履きである。

中間は、葛籠を両天秤にして担ぎ、木刀を差している。

籐笠をかぶった弥陀ノ介は渋い黒の袷に袴を脚絆で絞り、ごつい短軀に腰の黒鞘二本が異様に大きく見えた。

市兵衛も羽織は着けなかった。

紺の帷子に深い鼠の小袖を重ね、黒の手甲、渋茶の小倉袴に黒の脚絆、黒足袋草鞋に菅笠をかぶった拵えが、暁前の冷気の中で冴え冴えとした佇まいを見せた。

「よし、いくぜ」

渋井が先頭に立って、宿駅中央を流れる石神井川に架かる板橋を渡った。
板橋宿の木戸をすぎて中山道は木曾へと続いてゆく。
戸田の渡しで荒川を越え、熊谷、深谷、本庄から中山道を上州路へ取り、利根川の五料関所を抜け、前橋より沼田街道を沼田へ向かう旅程だった。
助弥は言うまでもなく、蓮蔵と今吉も市兵衛を見知っている。
渋井の旦那と親しいのはわかるものの、深川の喜楽亭で渋井の旦那らと酒を喰らいながら馬鹿話に興じ、渡り用人を生業にしているとかの市兵衛が、なぜこのたびのお上の御用一行にまじっているのかがわからない。
しかも市兵衛は渋井と言葉を交わさず、後ろの気味の悪い風貌の小人目付のそのまた後ろに黙々と従っている。
助弥は「相すいやせん」と、前をゆく中間と椎名の傍らを進み、渋井の傍らへ小腰を屈めて近寄った。
「旦那、市兵衛さんがあの薄っ気味悪い小人目付の手先みたいに従っていらっしゃいやすのは、こりゃあどういう事情なんでやすか」
助弥は小声で渋井に訊ねた。
渋井は助弥へ、ちら、と渋面を向けた。

「手先みたいじゃなくて手先だ。お目付の許しを得ているそうだ。じつは、おれも事情がわからねえ。お目付側からもおれたち町方と一緒に沼田へ人を差し向けることが決まってな。奉行所の手筈を決める評議の場に、あの恐ろしげな小人目付の後ろから市兵衛が現われたのには驚いた。つくづく、わからねえ男だぜ。市兵衛め、おれたちに妙に氏素性を隠していやがるが、案外由緒ある家柄だったなんてな」

渋井はそれが面白そうに、くくく……とまだ暗い道に笑い声を響かせた。

「ええ、まさか。そんな由緒ある家柄のお侍さんだったら、あの貧乏暮らしはねえでしょう。確かに、喜楽亭の客の中じゃあ、市兵衛さんは一番品はいいですけどね」

「なんだと。おれより市兵衛が品がいいってえのか」

「あ、いや。そ、そうじゃねえ。旦那は旦那でやすよ。おれたちの旦那は別格で」

えへへ……と、助弥はひょろりと高い背をいっそう丸めた。

「さっき、市兵衛にどういうこったいって、こっそり訊ねた。そしたらな……」

「へえ、そしたら？」

「すまん、今は訊かないでくれって、小僧みたいに照れ臭そうな顔付きで言いやがった。ただな、市兵衛が雇われていた大清楼って音羽の料理茶屋を覚えているだろう」

「へえ。警動で手入れを受けた茶屋でやしたね」

「そうだ。その大清楼の姉娘でお歌ってえ音羽一の美人が、菊の助の一味にさらわれたかもしれねえとかなんとか言ってやがった。どうやら市兵衛は、そっちの筋からこの探索に加われるよう、知り合いを通してお目付筋のどっかに働きかけたみてえだな」

「だとすると、市兵衛さんの氏素性は、じつはお目付筋の旗本ってえことでやすか」

「かもな。ま、どうせ貧乏旗本だろうがな。くくく……」

助弥は一行を振りかえり、夜明け前の暗い道の後方、薄気味悪い小人目付の後ろから歩む市兵衛のすっとした影を見やって、顔をほころばせた。

市兵衛のその静かな姿が、なぜかとても頼もしく見えたからだ。

一行が荒川を越え蕨をすぎ浦和に近付いたころ、夜はすっかり明け、九月十一日の朝日が明々と顔を出した。

真達は僧房の窓の障子に差す朝焼けが、文机の白紙を淡い赤色に染めるのを見ていた。

硯石の墨汁が、淡い赤色に染みた白紙の傍に、漆黒の小さな溜まりを作っていた。

真達は顔を障子戸へ向け、窓外に朝の訪れを告げる鳥の遠い鳴き声を耳に留めた。

僧房の庭の木々では、小鳥がさえずっている。
朝の気配が周りにたちこめ、真達の身体に染みこんでくるかのようだった。
真達は、うっとりした。
それはまぎれもなく、御仏の己へのいたわりであることを確信できたためだった。
朝の澄んだ息吹、昼のたゆたうときの流れ、夜の闇の物悲しい吐息、己を取り囲む何もかもに己とともにある御心を、真達は今、感じ取ることができた。
感じ取った、だけではない。
手で触れ、鼻で嗅ぎ、目にも見え、耳にも聞こえていた。
御仏がお導きくださっている。
己は、御仏の掌の中にある。
嗚呼、なんとありがたい。
こみ上げる歓びが、ひと筋の涙となって真達の頬を伝わった。
烏の遠い鳴き声が聞こえた。
真達は障子戸から文机へ顔を落とした。
指先で頬に伝わったひと筋の涙を拭った。
それから筆を執った。

啓白（けいびゃく）
唐木市兵衛どの

真達は淡い赤色の染みた白紙に、筆を走らせた。

第十章　十三夜

一

土岐家三万五千石の沼田城は、利根川へ薄根川が流れ入る急峻な崖にそびえ、片品川へ向かって下るなだらかな河岸段丘に城下町が形成されていた。その沼田城下の賑わいの彼方に、北の三国山系の青い山々が青空の下に連なって見えた。

渋井と助弥は、町方役人・中津佐治郎とともに城下の街道沿いの旅籠・松野屋の暖簾をくぐった。

松野屋は平旅籠ではなく、夜伽をする飯盛を多数抱え、繁盛している旅籠だった。

渋井たちが訪ねた十三日の午前、十数人の飯盛と思える女たちが台所の板敷で賑やかに飯を食っているところだった。

「わざわざ江戸からのお越し、畏れ入ってございます」
客座敷に現われた初老の主人が、渋井に言った。
「さようでございます。わが松野屋では毎年、弥勒寺さんへ手拭を奉納いたしておりまして、確かにこれは、わが松野屋の奉納した手拭に、間違えございません。でございますがお役人さま、この手拭は三年前に弥勒寺さんに奉納いたしたものでございます。今年のものは……」
と、主人は今年の弥勒寺の縁日に奉納した手拭を取り出して見せた。
渋井は主人に訊ねた。
「この手拭は、弥勒寺へ参詣しないともらえないのですね」
「へい。さようではございますが、わが松野屋にお泊まりいただいたお客さまのお相手をした女どもが、またのお越しを、と差し上げることもございます」
勘平に信心があったかもしれず、物見遊山で弥勒寺を参詣し、その折りに手に入れたのかもしれない。
けれど、もしかしたらこの松野屋で飯盛を相手にしたことも考えられる。
ただし、三年前となると覚えも薄れているだろう。
「松野屋さんに勘平という、江戸生まれの客はいませんか。三年前にきた、一度っき

りの客かもしれませんが。年は今年二十五。三年前にもこの旅籠にいた女の中に、相手をした者がいやしませんかね。それと……」

渋井は、関口臺町の陰陽師・佐川山城夫婦を捕らえた翌日の九月十日、頭の菊の助や惣十郎、菊の助の女房・お万、一味の中の主だった者の人相覚え書きを作らせていた。

十日の夜、勘平の手拭が喜楽亭で見付かり、奉行所において深夜の沼田探索の評議が持たれた後、沼田での訊きこみに役立てるため、大急ぎで勘平の人相覚え書きも作らせたのだった。

人相覚え書きは似顔絵ではない。

目当ての者の人相の特徴を列記しているばかりである。

だが渋井は、ふと思い立って、知り合いの読売屋の絵師を叩き起こし、勘平の顔に似せた絵を描かせていた。

それを主人の前に一枚一枚広げ、

「松野屋さん、この人相覚えに見覚えはありませんか」

と、その中の一枚を指差した。

「これが勘平の人相覚えです。勘平、という名ではないかもしれません」

勘平の人相覚えは、名前に生国不明、年、面おも長、いろ浅ぐろ……などと続き、《年廿五にて候得共、廿八九に相見得申　候》

と結んであった。

主人は勘平の人相覚えと、もう一枚の顔の絵を見て首をひねった。

「一見限りの、旅のお客さまも多ございますので」

しかし主人は、頭の菊の助と女房のお万の人相覚えをつくづくと見て、

「この菊の助、きくなんとかという名は、どこぞで聞いたような気がいたします」

と呟き、渋井へ顔を上げた。

「うちの女どもにこの人相覚えを見させても、ようございますか」

「ぜひ、見てもらってください」

主人に呼ばれて、飯の途中の女たちが座敷へぞろぞろと入ってきた。

女たちは、緋の長襦袢に綿入れや湯文字ひとつに布子を羽織っていたりで、白粉が剝げかけたり、白粉の塗りかけや化粧っ気のなかったりだった。

飯盛のほかに、旅籠で働く客引きの男も雑じっていた。

主人は三年前の弥勒寺への奉納手拭と勘平という男の話をし、「誰かこの人相覚えに見覚えや名前に聞き覚えはねえか。よおく見てみろ」と言った。

女たちは渋井ら役人の前で畏まりつつも好奇心が湧くのか、まじまじと人相覚えに見入っていた。

この字はなんて読むんだ、と女たちはひそひそと言葉を交わしたり頷き合ったりしていた。

ふと、主人が女たちの中の客引きらしき男に言った。

「政吉、おまえ、菊の助という名に聞き覚えはねえか。この人相覚えなんだがな。おら、どっかで聞いたような気がするんだが」

「菊の助でやすか。ふううん……」

政吉という客引きが腕組みをして首をひねった。

「あのお、旦那さん」

と、布子の女が主人へ小声をかけた。

「なんだ、どれかに見覚えがあるかい」

「確かなことは言えねえども、三年くらいめえから、年に一度かせいぜい二度ほど遊びにくるお客さんが、もしかしたらこの人かもしれねえ」

女は器量は月並みな鄙びた年増だったが、色白の身体は肉付きがよかった。

勘平の人相覚えと顔の絵を指して言った。

「自分を、かんちゃんだ、と言っておりやした。色は浅黒いとは思わねえが、背丈と年ごろは似ていやす」
「かんちゃんっ、て言うのかい、その客は」
渋井は思わず語調が厳しくなった。
「へ、へえ。かんちゃんが、三年前うちへ上がった折り、おらが相手を務めやした。おいら江戸もんだ、と自慢げに話していらっしゃったのと、弥勒寺でもらった手拭をおらに見せて、この松野屋はここだろう、って言ってやしたのを覚えていやす」
「江戸の、どこかは言わなかったかい」
「かんちゃんと、江戸もん、という以外、何も言わねえ。それから確か二度ほど、相手を務めたことがありやす。おらのことを忘れずに呼んでくれたみてえで。ただ今年はまだ一度も見えてねえだで」
「かんちゃんの住まいはわからないか」
「だから、かんちゃんと江戸もん、という以外は何も……」
すると、
「あのお、旦那さん」
と、今度は白粉が剝げて斑（まだら）になった若い女がおずおずと主人に言った。

渋井たちは一斉に女へ向いた。

「菊の助という名ではねえだども、おら、これに合う人相の人をひとり、知っていやす。菊の助ではなくて、きくじ、そんな名前だったと思いやす」

と、菊の助の人相覚えを指して言った。

女は迦葉山の麓の村より一昨年、松野屋に身売りになった飯盛だった。

「発知という村はずれに、植木屋きくじという陰陽師さんがいらっしゃいやす。京の土御門家とかいう偉い陰陽師さんのところで修行をなさったと聞いておりやす。弟子を何人も従えて、近くの村で頼まれれば祈禱やお祓いをなさっておりやすが、ときには弟子らを引き連れ、旅廻りをして稼いでいらっしゃいやす」

「発知村はずれの、植木屋きくじ、か」

「陰陽師の植木屋？　ふむ、聞いたことがある。それがきくじか。おまえ、きくじはどんな字を書く」

主人が目を遊ばせて言った。

「きくじはきくじしか。おら、難しい字は知らねえ」

「発知は沼田より迦葉山へ向かう途中の、発知川沿いにある集落です。迦葉山までは遠くありませんし、松野屋が手拭を奉納いたした弥勒寺は迦葉山の中腹にあります。

発知なら弥勒寺の参詣は容易（たやす）いでしょう」

町方の中津が渋井の耳元で言った。

「その陰陽師さんの嫁っ子がやっぱり祈禱師で、嫁っ子の占いはとてもよく当たるとうちの村では評判でやした。お万という名は知らねえだども、この人相覚えにあるような大女でやす。色の白い肉付きのええ、色っぺえ祈禱師でやす」

若い女は、渋井へしょぼついた目を向け言った。

「こいつあ」

助弥が渋井の後ろで言うのが聞こえた。

「発知村の名主（なぬし）さんの話が訊きてえな。中津さん、ちょいと手を貸していただけますか」

渋井は松野屋の者に聞かれぬよう、中津へささやいた。

「どうやら、ひと騒動ありそうな雲ゆきですぜ」

「心得ております」

中津は答え、唇をぎゅっと結んだ。

二

発知村は薄根川の支流、発知川の東の畔にある林間の小さな集落だった。

北へは迦葉山と武尊山、そして山深い三国山系、奥州の山々へと連なっている。東へ山道をゆき、薄根川を渡って片品川の畔へ出れば、そこは上州沼田と会津若松を結ぶ会津街道。発知川を越えて西へは、水上、湯檜曽をすぎ、三国山系の奥利根の源流へと山深く分け入っていく。

発知村の名主は、きくじと女房のお峰が村はずれの発知川の畔にねぐらを構えた経緯を、「もう十数年前でございます」と渋井に語った。

きくじは喜久治とわかった。村はずれの生家は、わずかな稲作地と養蚕を営む小百姓だった。

喜久治が六、七歳のころ、浅間山の大噴火があった。

夥しい噴煙と降灰によって上州は飢饉に見舞われ、多くの餓死者を出した。世に伝わる天明三年（一七八三）の大飢饉で、生き長らえた百姓の中でも、住み慣れた土地を捨て、逃散する者が後を絶たなかった。

喜久治の一家も村を捨て離散した。そのとき喜久治は、当時発知川沿いにあったある神社に置き去りにされたのである。

宮司は、神殿の階（きざはし）の下で腹を空（す）かし動けなくなっている幼い喜久治を見捨てることもできず、神社の下働きにでもと喜久治を置いてやった。

十五年、喜久治はその神社で下男として生き長らえた。

宮司一家には喜久治より五つ年下のお峰という娘がいた。

お峰は、十五をすぎて妖艶な娘に成長し、父親の宮司の下で巫女（みこ）を務めていた。

その娘のお峰と喜久治が、懇（ねんご）ろになった。

二十歳になった男と十五の娘なのである。おかしなことではなかった。

けれども二人が懇ろになったことを、宮司の一家は誰も気付かなかったし、父親の宮司が娘と下男の仲を許すはずがなかった。

二人の仲はお峰が喜久治の子を宿したために知れ、喜久治は神社を追われた。

お峰の子は生まれる前に死んだ。

ちょうどそのころ、喜久治が桐生（きりゅう）の盛り場で博徒（ばくと）になったと風の便りに聞こえ、お峰は喜久治を追って村から欠け落ちしたのだった。

「喜久治とお峰が、どこでどういう暮らしをしていたか、知る者はおりません。その

間に村の神社もお峰の父親の宮司が亡くなってから廃れてしまい、それからまた何年もたって、喜久治とお峰の名前すら、みな忘れておったのでござります」

と、村名主は言った。

それが十三年前、二人がふらりと発知村に舞い戻ってきた。

五尺五寸（約百六十七センチ）足らずの喜久治は頑健な身体付きで人相も変わり、お峰はよく太った六尺（約百八十センチ）はある大女で、いっそう艶めいた年増に変貌していた。

お峰が喜久治をともなって村名主を訪れ、大柄な身体をそびやかして言った。

「おらのお父の神社は、おらと亭主が育った神社ゆえ、これからはおらと亭主が司るだで、名主さま、そう心得てくだせえ」

「今さら言われても、困るだで。氏子みんなで談合して決めねばな」

名主はそう答えたが、二人は発知川沿いの、長い間神職もおらず廃屋同然になっていた神社を立派な茅葺屋根の神殿ふうに造り替え、勝手に住み始めたのだった。

「わしらは、喜久治とお峰が村の生まれで知らぬ者ではなかったため、川沿いの神社を廃屋のままにしておくよりは、と受け入れたのでござります。古い宗門改めに二人の名も放っておかれたままでしたので、喜久治とお峰を新たに夫婦者とし、村を出て

からの無宿同然の歳月は、何かあったときに質せばええ、と不問にいたしました」

ところが二人は、これまでの土地の神社とはまるで違い、聞き慣れぬ京は土御門家の土御門神道とやらを奉じ、陰陽師の祈禱やらお祓いなどを村で始めたのだった。

喜久治は植木屋喜久治と名乗り、お峰は怪しげな占いなどをしてみせた。

「二人で京へ上り、土御門家で陰陽師の修行をし、土御門家より鑑札を受けるときに、木を植えるように信仰を広めよと、植木屋の名を授けられたと聞いております。またお峰の占いはよく当たると近在で評判になったほどで、お峰の占いが評判になるうちに使用人まで使い始めました。使用人が十人を超えるほどになったころからは、村の者とはほとんど付き合いを持たず、妙な暮らしぶりでございました」

それでも村の唯一の神社だったため、村ではそのままにしてきた。

「そう言えば、喜久治とお峰は、二、三年に一度は、使用人をぞろぞろと引き連れ、土御門神道の祈禱と祓いの旅に数ヵ月は村を留守にすることがございましたな。妙に疑わしい暮らしとは思っておりました」

名主は苦渋を浮かべて語った。

「ですが、二人がまさか、そんな大それた一味だったとは思いも寄りませんでした。同じ村の者と思えばこそ怪しくとも受け入れてやったのに、陰陽師・植木屋喜久治の

名に隠れて、とんでもないことでござります」

喜久治とお峰が村で暮らすようになった経緯を訊いていたさ中、喜久治のねぐらの様子をうかがいにいっていた助弥と蓮蔵、今吉が、案内の村の番太とともに戻ってきた。

「旦那、喜久治は菊の助に間違えありやせん。音羽の古着屋・美濃屋の手代の惣十郎がおりやした。野郎、半尻の白張みたいな格好で、庭に出てきやがったところを、あっしがこの目で確かめやした」

助弥が勇んで報告した。

「それと確かに、お万らしき大女が巫女の格好でおりやした」

それは蓮蔵が言った。

「よし。いいだろう。気付かれちゃいめえな」

「へい。大丈夫で」

「家の見張りは？」

「おらの手下に、表と裏から見張らせておりやす」

と、番太が答えた。

「中津さん、本来ならば喜久治とお峰を呼んでまず話を訊くべきだが、やつらは間違

いなく佐賀屋で十五人もの命を奪いやがった冷酷な一味です。そんなやり方が通じる相手じゃありません。江戸からわれわれがきているのを知れば、やつらは即座に姿をくらませるでしょう。乱暴な手立てですが、一気に踏みこみ一味を一網打尽に捕まえます。そのうえで取り調べ、となりますが、それでもよろしいですね」

「やむを得ぬでしょう。結構です」

中津の顔に緊迫が走った。

「世話をかける。名主さん、ちょいと村を騒がすことになりそうです。明日の夜明け前は、騒ぎが収まるまで村の衆に家を出ないよう、こっそりと触れ廻っていただけませんか。いいですか、絶対、一味に気付かれないようにですぜ」

「わかりました。お任せください」

名主は頷いた。

「踏みこむのは明日の夜明け前だ。有無を言わさずやる。たぶん、神妙にはしないだろう。相当な乱戦になることを覚悟しろ」

抑えたどよめきが起こった。

渋井は、椎名、奉行所中間、助弥、蓮蔵、今吉、そして中津佐治郎と中津に率いられた沼田の町方ら十三人、を順々に見廻した。

「中津さん、表はおれたちがやる。搦め手をよろしく頼みたい」
「いいですとも。そのために、率いてきたのはみな奉行所の選りすぐりの者らです。一名たりとも逃がしはしません」
渋井は市兵衛と目を合わせた。そして、
「市兵衛、返さん」
と、後ろに控える二人に呼びかけ、一同が二人へ振りかえった。
「乱戦になったときはあんたら二人の腕が頼りだ。頼むぜ」
「承知した」
市兵衛がこの一行に加わってから、初めて渋井へいつもの市兵衛らしいさらりとした言葉をかえした。
「渋井さん、踏みこむ手筈だが……」
弥陀ノ介が不敵に笑って言った。
「表と裏から一気に踏みこむんですよ」
「渋井さんは、やつらが抵抗するとお考えですな」
「並みの相手じゃない。間違いなくやつらは激しく抵抗するでしょう」
「ならばそうなった場合、家の中では怪我人が捕り方の方にも出る恐れがある。ま

ず、わたしと市兵衛が踏みこむのはいかがですか。斬り合いになれば、一味は建物の中から表や裏へ逃げ出すでしょう。そこを表の渋井さんの一手、搦め手の中津さんの一手で取り押さえるのです」

なんと、頼もしいじゃねえか。

渋井は武者震いを覚えた。

市兵衛がどういう経緯でここにいるのか、小人目付の返弥陀ノ介とはどういうかかわりなのか、渋井は未だに知らない。

だがもう、そんなことはどうでもいい。

菊の助一味の始末を付け、意気揚々と江戸へ戻るだけだ。

「決まりだ、返さん。それでいきましょう」

九月十三日の夜はまだ明けなかった。

しかし、西の山の端に十三夜の月が隠れ始めたころ、山間の村は払暁が近付いたかすかな白みが、澱んだ青味がかった色に空を染め始めていた。

一番鶏が鳴いてから、しばらくたった。

村を取り巻く林間で大あかげらの声が、きょっきょっ、と聞こえる。

崖下の発知川の流れと捕り方の足音が、山間の静寂をほのかに破っていた。
晩秋の朝の冷えこみが周囲の山影を冬の気配で包み、市兵衛の吐く息を白くした。
薄暗がりの中に古い鳥居がぼうっと見えてきた。
表の渋井の一手には、村の番太とその配下が竹槍を持って従い、搦め手の中津の方は村の屈強な若衆らが竹槍を手に従っていた。
弥陀ノ介に続いて市兵衛、さらに渋井、椎名らが足音を忍ばせ鳥居をくぐり、主屋の表側の庭を広く固めた。
敷地の周りを樹林の影が取り囲んでいる。
東側が雑木林の蔽う堤になっていて、堤の下が発知川沿いの崖道。崖下に発知川が暗い底に沈んでいる。
きょっきょっ……鳥の声が黒い山影に谺した。
主屋は茅葺屋根の大きな神殿ふうの二階家だった。
「渋井さん、いいですね」
市兵衛は渋井へひと声かけた。
「おお、菊の助の尻に火を付けてやれ。待っているぜ」
渋井と椎名、助弥、蓮蔵は十手、中間は木刀、今吉は棍棒を携え、みな鉢巻に襷が

けで、番太と手下は渋井らの後ろに展開している。
「いくぞ、市兵衛」
弥陀ノ介が合図をくれた。
うむ――と市兵衛は応えた。
薄靄を分けて、主屋の大きな廂下の二枚の表戸へ近付いた。
弥陀ノ介は板戸に耳を寄せ、中の物音を探った。
「何か聞こえるか」
「いや、静かだ」
「戸は開けられるか」
「簡単だ。任せろ」
弥陀ノ介は岩塊の短軀にしては異様に長い両腕を広げ、表の板戸の両側へごつい指を鋏のようにかけた。
ごと……闇すらも気付かぬほどの音を立てて、板戸が敷居より浮き上がった。
板戸はふわふわと浮いて、隣の板戸へ力なく凭れかかった。
腰高障子が顕われた。
弥陀ノ介が障子を開けると、主屋の中の重苦しい暗がりがこぼれた。

外側は神殿ふうだが、家の中の間取りは広い庭土間と台所の土間、囲炉裏部屋、納戸、土間に続いた出居に座敷、と百姓家ふうの造りになっている。

出居と座敷の庭側に濡れ縁が廻っていて、襖に仕切られて三部屋ある二階へは土間にある階段を上る。そして、階下の座敷のさらに奥にもうひと部屋が設けられ、そこが祈禱所になっている。

と、間取りは夕べ、名主より入念に訊き取った。

歌が閉じこめられているとすれば、祈禱所のどこか、納戸、二階の部屋か。

歌の身を案ずれば暗い思いに捉えられるが、歌をただ救い出すこと、市兵衛はそれのみに思いを定めた。

土間の暗がりへ足音を忍ばせるにつれ、座敷の方より寝息が低い波音を立てた。

市兵衛と弥陀ノ介は目配せを交わした。

市兵衛が大きな竈のある土間より囲炉裏部屋、納戸、座敷へと進み、弥陀ノ介は出居から座敷へ進む。市兵衛は祈禱所へ踏みこみ、二階から下りてくる者は弥陀ノ介が庭土間へかえして、抵抗すれば応戦し一掃する。

事前にそう取り決めた。

「お歌がどこにいるか、わからない。気を付けてくれ」

「心得た」
市兵衛がささやき、弥陀ノ介がかえす。
市兵衛は弥陀ノ介を残し、暗い土間の奥へ踏み入った。
暗がりの中に食物の饐えた臭いがした。
土間から囲炉裏部屋に続いている。
囲炉裏に下がった薬罐らしき影が認められ、囲炉裏を囲って布団の影がふたつ寝息を立てていた。老いた下男と下女が住みこみで使われているとも聞いた。その二人かもしれなかった。
囲炉裏部屋へ上がる。
残り火のやわらかな温みが、囲炉裏から伝わってきた。
忍び足でひとつの布団の側へ寄り、屈んだ。
間違いなく老爺だった。心地よさげな寝息を立てている。
ふと、振り向くと、もうひとつの布団で、老婆が怯えた大きな目を見開いて市兵衛を見上げていた。
叫ぼうか叫ぶまいか、迷っている目だった。
市兵衛は老婆に向かって、口元へ人差し指を立て、

しいい……

と、声を忍ばせた。

「ご用の役目だ。静かにしていよ」

老婆は布団の中に顔を、そっと隠した。

老婆と老爺に歌の居どころを質したいが、今はそれどころではない。

囲炉裏の側を離れた市兵衛は、隣の納戸へ進む。

両開きの襖の戸框に手をかけ、納戸の物音を確かめた。

静まりかえっている。

そっと、両開きにした。

暗がりの中に、ひやりとした埃臭さが漂った。

箪笥や長持、積み重ねた布団、何かの器財らしき影が部屋の片側に見えた。

左側に襖があって、隣の座敷より複数の寝息や鼾が聞こえた。

納戸の暗がりを進んで座敷の襖を両開きにしたとき、庭土間より出居を通って座敷の襖を開けた弥陀ノ介を、暗がりの左手に認めた。

幾つかの寝息と鼾が暗がりの底で微動している。

市兵衛は静かに膝を折り、身体を沈めて刀の鯉口を切った。

三

「ご用改めである。神妙にせよ」
弥陀ノ介が朗々と低い声を響かせた。
寝息が一斉に途絶えた瞬間、わっ、と喚声が上がった。
布団が跳ね上がり、枕が飛んできた。
建物が轟き、五、六個の人影がゆれるのがわかる。
喚声の中で濡れ縁側の板戸が二枚蹴り倒され、払暁前の青白い庭へ得物を手にした二人が飛び出すのが見えた。
ひとりは下帯ひとつで、ひとりは帷子を羽のように翻した。
男の影が納戸との敷居で身を沈めた市兵衛へ、喚声を上げて打ちかかってきた。
「おりゃああっ」
力任せに振り落とした得物が鴨居を激しく咬んだ。
抜刀し、鴨居に得物を取られた男の脇腹を斬り抜ける。
「たはあぁぁ」

男は悲鳴を上げ、鴨居に得物を取られたまま納戸の箪笥へ衝突した。
斬り抜けつつ、市兵衛は続く男のふてぶてしい髭面との間を計っていた。
二歩目を踏み出した半ばで、袈裟懸けに打ちかかる髭面を下段より斬り上げた。
胸から顎へ抉られた髭面は、ぶわ、っとひと声叫び、襲いかかる突風に薙ぎ倒されるように吹き飛んで、板戸を破り庭へ転落していく。
庭では渋井らの一手が、先に逃げた二人へ「わああ」と襲いかかっていた。
刀を振り廻し転げる二人へ、竹槍や十手を浴びせかけている。
弥陀ノ介は出居から座敷へ踏み入り、跳ね起きた男の脇差をつかんだ腕を脇へ挟んでねじり上げた。
腕の骨が一瞬で圧し折れた音がする。
男が喚いた。
その喉を指先で鷲づかみ、軽々と天井へ差し上げると、そのまま庭へ放り捨てた。
途端、躊躇いなく踵をかえした。
長刀をうなりを上げて抜き放ち、出居から広い庭土間へ突進した。
二階より、どどど、と建物と階段をゆらし男らが駆け下りてくるのに気付いたからだ。

「きたきたあっ」
弥陀ノ介は庭土間で叫んだ。
十人近い男らが得物を手にして次々に階段を駆け下り、弥陀ノ介の前後へ廻りこんでいく。
たったひとりと見て即座に片付けるべし、と包囲を縮める。
ひとりが階段の途中より飛び上がり、弥陀ノ介の頭上へ打ちかかった。
それを長刀で易々と払い、男に体当たりを食らわした。
男の身体はぐしゃりと潰れ、台所の土間まで吹き飛んでいった。
弥陀ノ介は二人目の打ち落としを右へ躱し、脇へ打ちこんだ。
肉と骨が同時に斬り裂かれる音が凄まじい。
二人目は獣のような呻き声の中で横転。ほぼ同時に打ちかかる三人目四人目の刃を岩塊をやわらかく折り畳んでかいくぐり、遅れた五人目の額へ痛撃を浴びせかけた。
鋼が火花を散らす。
五人目はそれを受け止めたはずだった。
が、野獣の牙が受け止めた刃を物ともせずに額へ食いこんだかだった。
「ぎゃあっ」

薄暗い土間に響いた声が、残りの男らの肝っ玉をくじいた。
だらだらっと後退り、表と裏の背戸口へ獣のように逃げ去った。
背戸口を飛び出した数人は、裏手に待ち構えていた中津佐治郎率いる一隊にたちまち取り巻かれた。
双方ともに睨み合うゆとりはない。
「かかれ」
の声に、すぐさま沼田町方の六尺棒や突棒、十手と男らの得物が干戈を鳴らし、怒声が飛び交った。
囲炉裏部屋の片隅で、老爺と老婆の下男下女が震えながら抱き合い、一連の乱戦を声もなく見つめている。
二人目を薙ぎ倒した市兵衛は、座敷のさらに奥の襖へ反転した。
襖へ手をかけた刹那、襖を貫いて刃が市兵衛の胸を襲った。
それは薙刀の刃だった。
市兵衛は構えを斜に転じ、白刃を避ける。
引き戻された薙刀を追い、襖を開け放った。
祈禱所は板敷だった。左右正面の三方を白壁が囲い、正面の壁に祭壇があった。

祭壇には蠟燭が灯り、注連縄を張り、幣帛と榊、白鞘の神刀が祭ってある。
祭壇の前にごつい胸と丸太を思わせる太い腕の背の低い男が、紺帷子の片肌脱ぎで脇差を掲げていた。
割れた裾の間より踏み締める足に盛り上がった肉が見えた。
隣には白衣の袖を紫の紐の襷で絞り、長く豊かな黒髪を肩から背へ垂らした大女が薙刀を構えていた。
女は市兵衛も見上げるほどで、真っ白な顔に濡れる朱の唇が妖しく光っていた。
二人が寝ていたと思われる錦繡の布団が、斬り合いに備え脇へ寄せられている。
喜久治とお峰か……市兵衛は剣を下げ、二人が待ち構える祈禱所へ踏み入った。
祈禱所はどの部屋よりも広かった。
「喜久治とお峰、いや違う。菊の助、お万、だな。おまえたちの奪ったものを取り戻しにきた」
市兵衛は青眼に構えた。
「金が欲しくば力ずくで奪え。また押しこんで盗むだでよ」
菊の助が、がらがらと笑った。
「取り戻しにきたのは女だ。おまえたちの邪な命運は尽きた。清浄なる女はおまえ

たちには似合わぬ。どこにいる。かどわかした女をかえせ」
市兵衛は一歩、二歩と進んだ。
お万が薙刀を高い天井すれすれに振り廻す。
ぶうん、ぶうん、とうなった。
「女だと。女など縁起でもねえ。おらたちに女など、用はねえ」
お万の相貌に青白い炎が燃え盛るような怒りが差した。
それから邪悪な何かを祓うがごとく、呪文を唱えたかに見えた。
「不吉な女なんぞ、かどわかしはしねえ。二度と口にするでねえ」
お万が叫び、薙刀を振り下ろした。
薙刀が市兵衛の身体の側を流れ、板敷に荒々しく跳ねた。
お万が引き戻して体勢を直すその間隙へ、市兵衛は踏みこんだ。
市兵衛の掬い上げた一撃をお万は薙刀で受けたが、うなりを上げる衝撃に応じきれなかった。
かちいん、と鳴って薙刀はお万の手からはじき上げられ、天井へがつんと食いこんだ。刃をかろうじて避けたお万の身体は、祭壇を崩して壁際へ横転していく。
「お万っ」

菊の助が叫び、市兵衛の脇から斬りかかる。
二撃、三撃とそれを払う。
と三撃目、菊の助の頑健な身体は勢いが余ってつんのめった。
瞬間、お万が市兵衛へ向け、ぶうう、っと炎を吹きかけた。
炎から身を躱したとき、片膝立ち白い腿も露わなお万の手に蠟燭と瓢があった。
お万は瓢を呷り、蠟燭をかざして市兵衛目がけて再び、ぶうう、っと吹いた。
炎が市兵衛を襲う。下がらざるを得なかった。
お万は市兵衛の足元に瓢を叩き割った。
油が飛び散り、そこへ蠟燭を投げ捨てる。
もわ、っと炎がゆらめき上った。
お万は神刀をつかんだ。
「お万っ」
「おまえっ」
菊の助がお万の残りの手を取った。
崩れた祭壇脇の壁を押すと、壁がくるりと廻って木立と狭い庭が見えた。
庭の眼下に発知川の流れがある。

空はさらに白み、もうすべての景色が見分けられた。
菊の助とお万は手に手を取って庭へ身を翻し、さらに庭から発知川の崖道へ飛んだ。

「美濃屋の惣十郎、てめえの面は忘れねえぜ」
渋井は主屋から庭へ転がり出てきた惣十郎へ十手を浴びせた。
惣十郎はかろうじて立ち上がり、渋井の十手を脇差で払った。
助弥の十手が脇から打ちかかり、惣十郎はそれもすばやく躱す。
「この野郎、逃がしゃあしねえ」
蓮蔵が惣十郎の背中に組み付いた。
惣十郎は喚き散らし、蓮蔵を背中に担いだまま脇差を振り廻した。
蓮蔵が振り落とされ、惣十郎が斬りかかる。
その顔面に、渋井が十手を見舞った。
惣十郎がよろけたところに、今吉が棍棒で足を払った。
よろめいた惣十郎の左右から、助弥と蓮蔵が十手を打ち落とした。
打たれながらも惣十郎は脇差を振り廻し、よろよろと庭を逃げ廻った。

だが、椎名や木刀の中間、番太と手下らが、庭へ逃げ出した者すべてを捕り押さえ、最後のひとりになった惣十郎の逃げ道をふさいだ。

弱った惣十郎の手を渋井の十手が払った。

惣十郎は身をよじり、脇差を落とした。

腕を抱えて跪（ひざまず）いた。

渋井は惣十郎の襟首（えりくび）をつかんで言った。

「美濃屋の惣十郎、小塚（こづか）っ原の獄門台が、おめえを待ってるぜ」

「惣十郎じゃねえ。おらあ、惣太（そうた）だ。殺せえ。殺しやがれえっ」

惣十郎は喚き、血だらけの唾（つば）を吐いた。

そのとき、黒い煙が主屋の軒を伝わって立ち上り始めた。

「火事だあっ」

叫び声が上がった。

土手を走り、樹木の間を抜け、発知川の崖道に沿って駆ける市兵衛の背後、菊の助お万の神殿ふうの主屋から黒い煙が上がった。

発知川の崖道を、菊の助と菊の助に手を引かれたお万が迦葉山の方角へ走り、市兵衛は二人を追って道なき林間を併走していた。

菊の助とお万は帷子と白衣の裾を乱し太腿も露わに走りつつも、二人の裸足(はだし)の足は崖道では遅くなる。

市兵衛は斜面を駆け上り、また一気に駆け下りつつ二人に並びかけ、さらに前方の崖道へ走り出た。

三人の足音がかき消え、山の寒気の中に吐く三人の白い息だけが静寂を乱した。

市兵衛は二人の三間(けん)（約五・四メートル）ほど前で振りかえり、ひと息、大きく吐いた。そして一歩踏み出し、青眼に構えた。

市兵衛に行く手をふさがれた菊の助とお万の顔が、怒りと憎悪に歪んだ。

二人の息は乱れ、お万の豊満な乳房が白衣の胸元からこぼれていた。

菊の助は大柄なお万の身体を力強く抱き寄せた。

菊の助は脇差を、お万は神刀をつかんでいる。

市兵衛に脇差を突き付け、崖道に野太い声を轟かせた。

「邪魔だ。叩っ斬るぞ」

「こい、菊の助。ここがお前の最後の戦場(いくさば)だ」

「こけえっ」

菊の助はお万を離し、両掌で脇差を握り締め、左脇腹へ引き付けた。

奇妙な構えだが、それがこの男の死線をくぐり抜けてきた中で会得した実戦の構えなのだろう。

そのとき、二人の後方より弥陀ノ介が駆け付けた。

弥陀ノ介は長刀をかざし、岩塊の短軀より長い両手を大きく広げ、道をふさいだ。

お万は弥陀ノ介を睨み、神刀の白鞘を払った。

「女だてらに、あな禍々しや、その殺気」

言いながら、弥陀ノ介の歩みはゆるぎなかった。

「目障りじゃあっ」

お万は白衣の乱れも構わず、弥陀ノ介へ斬りかかっていく。

菊の助の突進が同時だった。

市兵衛が青眼から一歩下がるのではなく、また一歩踏み出して八相に構えた。

両者の間が急速に縮まった。

相手の目を見、息に触れるまで肉薄して脾腹を貫く。

たとえ相打ちになって肉を斬られても、菊の助の一撃が髄を断てばよいのだ。

捨て身こそが、菊の助の必殺の剣法だった。

菊の助の捨て身の攻撃に怯えぬ者はなかった。

「死ね、死ねえ」
菊の助は突進しながら呪文のように喚いた。
菊の助の想定にわずかな違和が生じたのは、市兵衛の目に怯えがないことだった。
両者の間はないも同然まで接近した。
両腕を絞り、剣を突きこむ。二つの身体が衝突する。貫く。
刹那、市兵衛の身体がわずかに斜行した。
それはほんのわずかな動きだった。
しかし、貫き通すはずの菊の助の剣先が朝靄の中を泳いだ。
違和が瞬時に菊の助の中に広がった。
市兵衛の身が、菊の助の剣先に紙一重の間を残し翻っていた。
なぜだ、と思う間もなく八相からの一撃を右小手に受けた。
ああ……
右手を離し、身体を仰け反らせた。
なんのこれしき、と菊の助は怯まなかった。
左手一本で脇差を頭上に旋回させた。
市兵衛は八相へ戻り、菊の助の二撃目へ速やかに身構えた。

菊の助の右手より血が噴いて、たらたらと滴った。
途端、菊の助の五尺五寸足らずの部厚い身体が地を蹴り、林野を駆ける猪のように突進したかに見えた。再び、激烈な左手一本の二撃目が市兵衛を襲った。
それは鋭い刃ではなく、獲物の骨をも砕く鉞を思わせた。
ただ我武者羅な一撃だった。
市兵衛は左八相より左足を大きく退いた。
突進する野獣へ狂いのない一撃を見舞った。
二つの剣が風を切り、交錯した。
刃が肉を咬んだ。
菊の助の剣先は市兵衛の傍らを、紙一重の間で空を斬る。
菊の助の身体が、崖道に虚しくたたらを踏んだ。
次の瞬間、怒りをこめて市兵衛へ睨みかえす。
それが戸惑いに変わっていった。それから、
「お万……」
と天に吠え、けれども剣はがらがらと道に転がった。
突進する菊の助へ浴びせた市兵衛の一撃は、菊の助の左肩を深く斬り裂いていた。

弥陀ノ介はお万の攻撃を、ただ払い防ぐばかりで反撃に転じなかった。
お万の攻撃は激しく獰猛だった。
斬って楽にしてやる。そう思いながら、弥陀ノ介は女を斬ることに怯みを覚えていたのだった。己で死ねや、と思っていた。
だが、菊の助の声がお万の動きを止めた。
「お万……」
振りかえったお万の前方で、菊の助は崩れ落ちた。
「おまえ、おまええ」
お万は倒れた亭主の元へ駆け寄り、跪いた。
「お、おみね……」
菊の助の、お万ではなくお峰と呼ぶ声がかすれた。
お万は両頬に見る見る涙を滴らせ、亭主の頬を両掌に包んだ。
亭主が差し伸べた血だらけの手をお万は握り締め、頬ずりした。
「止めだ、お峰」
菊の助が、今度ははっきりとそう言った。
お万は童女のような泣き声になり、

「おまええ、喜久治」
と、呼んだ。
「お峰と夫婦になれて、おら幸せだった……おめえの手で、おらを、送ってくれ」
喜久治――お万はなおも叫びかけ、震える手で神刀を差し上げた。
それから、神刀の切っ先を亭主の胸に泣きながら押し当てた。
市兵衛も弥陀ノ介もお万を止めなかった。
渋井らが駆け付け、菊の助とお万の有りさまを固唾を飲んで見守っていた。
お万の嗚咽が山野に谺した。
朝日が山の端に昇り始めていた。
山の林間で大あかげらが、きょっきょっ、と鳴いた。

四

九月十六日夕刻、市兵衛は神田上水に架かる九丁目橋を渡り、江戸川に架かる江戸川橋の河岸場から、護国寺参詣客の日本橋への帰り船に乗り合わせた。
その日、江戸の空は終日白い雲が晴れず、夕刻になっても月は昇らなかった。

清蔵と稲夫婦、藤蔵は、市兵衛の知らせを肩を落として聞いていた。
菊の助一味が歌をさらったのではなかった。
依然、歌の行方は八月晦日の夜に忽然と姿を消したまま知れなかった。
三人の途方に暮れた様子に、市兵衛の言葉は曇った。
見当が付かない。わけがわからない。次に打つ手さえ思い浮かばなかった。
川風が市兵衛のほつれた髪をそよがせた。
風が頬に冷たい。
秋が終わりに近付き、冬の気配がした。もう川縁に虫もいない。菓子所・篠崎の橋太郎は屋根裏部屋でするのないときを送っているのだろう。
市兵衛はそんなことを漠と思い、溜息をついた。
船は江戸川から神田川、神田川から大川へ出るころ、お城の向こうの西の空は早や薄墨色に染まっていた。
市兵衛は浜町と深川を渡す新大橋の河岸場で船を降りた。
新大橋を渡り、深川油堀の喜楽亭へ向かった。
夕闇の油堀に、喜楽亭の軒提灯の明かりが映っていた。
堀は魚油の臭いがする。

一艘の川船が、水面に映る提灯の明かりを乱して大川の方へ滑っていく。
渋井のけたたましい笑い声が、堀端にまで聞こえてきた。
縄暖簾を分け、喜楽亭と記した腰高の油障子を開けた。
「くえくえくえ……いよっ、市兵衛、待ってた。男の中の男。早く座れ。おめえがこねえと始まらねえぜ」
渋井が市兵衛を手招いた。
渋井に助弥、医師の宗秀が長板の卓を囲み、亭主が板場との仕切棚の出入り口に立っていた。
この刻限、ほかの客はまだいない。
始まらねえ、と言いながらすでにだいぶ入っていて、渋井は上機嫌だった。
渋井に尻尾を振っていた痩せ犬が、市兵衛の足元へ駆け寄って愛想を振りまいた。
「おまえ、変わりないか」
市兵衛は痩せ犬の頭を撫で、亭主に会釈を送った。
「はは、やっとみんな揃ったでよ」
亭主が無愛想な会釈をかえし、板場へ入った。
「久しぶりだ、市兵衛」

宗秀が、いつものように隣の腰掛（こしかけ）へ座った市兵衛に笑いかけた。
「久しぶりと言っても、まだ二ヵ月になりませんよ」
「音羽の仕事だったそうだな」
「はい。音羽の仕事先からきました」
「まず飲め、市兵衛。ご苦労だった。まったくよくやってくれたぜ」
渋井が熱燗の徳利を差した。
市兵衛の分の猪口はすでに用意されている。
「長旅に大捕物で渋井さんも助弥も、ご苦労でした」
「へえ」
と、助弥は満面の笑みである。
市兵衛は猪口をきゅっと呷った。
「おれたちは長旅だろうが大捕物だろうが、仕事だ。おめえはおれたちとは違う。なんて言うか、おめえは仕事を意地でやる男だ。それでこそ侍だ。ほら、もうひとつ」
渋井が空の猪口にまた徳利を差した。
「あのおっかねえ小人目付の返弥陀ノ介さんに言っといてくれ。今度一杯、やりましょうってよ」

市兵衛は笑みを頷かせた。
「旅の間は返さんがいたからちゃんと訊けなかったが、小人目付とおめえがどういう知り合いなんだ。気になってしょうがねえぜ。なあ助弥」
「そうそう。市兵衛さんは本当は、あっしらがお側にも寄れねえ偉えお武家の落とし胤じゃねえかって、旦那と話しているんですぜ」
「ははは……そんなことがあるものか。渋井さん、それは話せば長い。おいおい」
市兵衛は二杯目の猪口を呷った。
「おいおいかい。怪しいねえ。ま、無理には訊かねえが」
板場から亭主が市兵衛の熱燗徳利に、いつもの煮物と漬物を運んできた。
痩せ犬が忙しなげにいったりきたりしている。
「市兵衛さん、なんぞ食いてえ物があるか。おらなんでも拵えるだでよ」
「では、味噌の焼ける匂いが堪らない豆腐の田楽がいいな」
「豆腐の田楽か。そんなもんでええのか」
「おやじさんの拵える旨い煮物と豆腐田楽があれば、十分だ」
「なんだい、おやじ。おれたちと違って市兵衛には愛想がいいじゃねえか」
渋井が文句を付けた。

「そうか？　久しぶりだでな。はは……」
亭主が板場へ戻り、痩せ犬が追っていく。
市兵衛は順々に、三人へ徳利を差した。
「みな市兵衛を待っていたのだ。この四人に無愛想なおやじと痩せ犬、ひとつでも見えないと、調子が違って何か座り心地が悪い。殊にこの半月は鬼しぶの旦那と助弥まで顔を見せないので、つまらなかったぞ」
宗秀は市兵衛の酌を受けながら、満足げに言った。
「まったく、よく片がついたぜ。一味はやっつけたし、金も取り戻した。榊原のおっさんが上機嫌でよ。わかりやすいおっさんだ。くえくえ……」
「市兵衛はまた、大働きだったそうじゃないか」
宗秀が猪口を舐めた。
「肝を冷やしました。明と暗はいつでも紙一重です」
「少しは己の身を気遣え」
渋井が、そうかもな、と宗秀に同調するみたいに八文字眉を動かした。
「渋井さん、お万たちはいつ江戸へ運ばれてくるんですか」
「明日か、遅くとも明後日にはやつらを乗せた唐丸駕籠が、ぞろぞろと江戸に着くだ

ろう。沼田の町方にしちゃあ早く厄介払いしねえと、飯代がかかるからよ」
「お万は、どうなるのでしょうね」
「ふむ。普通に考えりゃあ火あぶりか獄門だがな。どうなるかね」
「そのお万が、亭主で頭の菊の助に止めを刺したのだろう？」
宗秀が箸を止めて訊いた。
渋井と助弥が頷いて、少し物思わしげな顔付きになった。
「ありゃあ凄かった。女の身で凄まじい度胸だ」
「捕まえた手下らが、菊の助座の陰の頭だって言ってやしたね」
助弥がしみじみと言った。
「天を突くでけえ女でな。顔は月並なのに妖しい色気がたっぷりでよ。それが刀を振りかざして一味の先頭に立って押しこみに入るんだそうだ。佐賀屋でもお万がずいぶん斬ったって言うぜ。あの女は妖怪の生まれ変わりだ」
「ですが、菊の助に止めを刺したときは、童女のように泣いていました」
ふんふん――と渋井は首を振った。
「じつはな、あの後で返さんに訊いたんだ。お万をどうして亭主と一緒に斬ってやらなかったんですってな。そしたら返さんがあの面で、女は斬れない、と溜息まじりに

言うもんだからよ、こっちは笑っちまいそうだったぜ」
　板場から味噌の焼ける匂いが、香ばしく漂ってきた。
「鬼しぶの旦那から聞いたが、音羽の梅里という芸者は見付からなかったそうだな」
「音羽の大清楼という料理茶屋の娘で、お歌と言います。一味に連れ去られたと、そういう報告があったのですが、違っていました。お歌は八月晦日の音羽警動の折りに忽然と姿を消したまま、未だに行方が知れません」
「そりゃあ、一家の者らはさぞかし気をもんでいるだろう」
「みなさん、肩を落とされて。辛かったです」
　市兵衛はぬるくなった酒を口へ含んだ。
　渋井がまた徳利を差して、
「何もかもとんとん拍子に一件落着、ってえわけにはいかねえもんなんだな」
と、虚しそうに唇をへの字に結んだ。
　しょうがねえよ――と、言い足した。
「月もしょ気ちまって、今夜は出そうもねえだでよ」
　亭主が豆腐田楽の焼き味噌の匂いが香ばしい皿を運んできて、そう言った。
「みなの分も拵えたで」

「おお、やっぱり豆腐の田楽はいいねえ。おやじ、酒だ酒だ」
「十三夜は綺麗な月が出たがな」
宗秀が、はふはふ、と串刺しの豆腐をかじった。
渋井と助弥が、続いて田楽の串を摘んだ。
「うめえ」
助弥が言った。
「お歌というか、芸者の梅里はそんなに美人だったのか」
宗秀が豆腐から目を上げた。
「はい。音羽一の芸者と、評判でした」
市兵衛の口の中に焼き味噌の甘辛さと、熱い豆腐のやわらかくあっさりとした舌触りが広がった。
「そういう美人だから、いろいろ厄介な目に巻きこまれるのかもな」
市兵衛は、藤蔵の光成館入門が決まった祝いの後の大清楼からの戻り、九丁目橋まで歌に見送られた夜道を思い出した。
あの八月晦日の夜、呑み明かしましょうと言う清蔵に付き合ってあのまま大清楼に泊まっていたら、歌が行方知れずになることはなかった、という気がしてならない。

音羽町九丁目の西裏通りを櫻木町の方角へ、酔いに火照った頬を冷たい夜気に撫でられ歩んでいたとき、すぐ後ろを歩いている歌が、嫁に請われている話をした。
あの夜道で、どこかでかき鳴らす三味線の音を聞いた。
遠くの店に提灯が寂しく灯り、軒下に客引きの女が立っていた。
月の上らぬ新月の夜だった。
西裏通りの菓子所・篠崎の土蔵の影も暗い星空にまぎれていた。
橋太郎の屋根裏部屋の窓が、闇の中でぽっかりと浮かんでいるみたいだった。
人影が窓をよぎって、橋太郎が自分と歌を見ているのだとわかった。
そうだ、自分と歌を橋太郎が見ていた。
豆腐田楽を摘んだ市兵衛の手が止まった。
「旦那、昨日は神田明神祭りでやしたね。芝の神明じゃ生姜市をやってやすね」
「祭りのことなんざあ、すっかり忘れていたぜ」
渋井と助弥が田楽に取り組みながら、言い合っている。
市兵衛は田楽を持ち上げたまま、動かなかった。
頭の中を、歌がいなくなってからの思い出せる限りの光景が渦巻いた。
市兵衛の指先から田楽が皿へ落ち、渋井たちが市兵衛の様子に気付いた。

「なんだい、田楽の中に何か入ってたかい」
市兵衛は応えず考えている。
「市兵衛……」
宗秀と助弥が、おや、という目をした。
市兵衛は渋井をまじまじと見つめ、卓へ両手を置いた。
「ど、ど、どうしたんだい、市兵衛」
市兵衛は唇を噛み締め、目を閉じた。
それからいきなり立ち上がった。
樽の腰掛が倒れた。
板場から亭主が顔をのぞかせた。
渋井の側で尻尾を振っていた痩せ犬が、わん、と小さく吠えた。
「渋井さん、助弥、わたしと一緒にきてほしい。そうだ、もしかして怪我をしているかもしれない。先生もお願いします」
「お？　おお、いいとも。今すぐかい。どこへ、いくんだい」
「今すぐ、音羽です。お歌さんの居場所がわかりました」
「お歌さん？　梅里の居場所がかい。けど市兵衛、さんざん捜して……」

「そうだ。そうだったんだ」
市兵衛は渋井に応えずそう呟いた。
立ち尽くした市兵衛を、みなが言葉を失って見つめていた。

五

およそ一刻半（三時間）がたった。
音羽町九丁目の西裏通り。目白台へ上る櫻木町の通りと交わる辻に構える菓子所・篠崎の土蔵は、星も月もない重たげな夜空の下で静まりかえっていた。
けれども、夜の静寂は人の心を恐怖に陥れる魔物めいた息遣いを潜めていた。
土蔵の屋根裏部屋の両開きの窓は、今宵も閉じられたままだった。
あれからずっと閉じられたままだった。
記憶を手繰り寄せ、市兵衛は思う。
篠崎の痩せた背の高い主人が土蔵の戸を、ごろ、ごろ、と開け、傍らで小柄な小太りの女房が小刻みに震えながら亭主が戸を開けるのを見守っていた。
亭主は町方役人の渋井に「どうぞ」と、か細く言った。

渋井が目で合図をし、九丁目と櫻木町の組合自身番の提灯を提げた当番と店番らの三人がまず土蔵の中へ入った。
それから渋井と助弥、藤蔵と清蔵、稲が続いた。
「先生、お先に」
「うん」
市兵衛が促し、宗秀、篠崎の亭主と女房、そして市兵衛が最後に入った。
市兵衛は土蔵の戸を、ごろ、ごろ、と閉めた。
一階は土間になっていて、菓子の材料の粉や糯米、小豆、砂糖、塩、空の叺、そのほかに油や酒醤油の樽、餅を搗く臼なども仕舞ってあった。
屋根裏部屋へ上がる黒い板階段を、三つの提灯がぼうっと照らしていた。
階段は屋根裏部屋の床になっている天井へ届き、板戸が入り口をふさいでいた。
渋井が黒羽織を払い、帯の後ろに挟んだ十手を取り出した。
「市兵衛、おれがいった方がいいか」
渋井が市兵衛へ見かえった。
市兵衛は渋井へ近寄り、小声で言った。
「渋井さん、少しだけときをいただけませんか。試したいことがあるのです」

「いいとも。やってみな。おれもこういう場合、どうしていいか、よくわからねえ」
天井で、どん、と鈍い音がした。
みなが一斉に天井を仰いだ。
篠崎の女房が亭主の側で震えている。
市兵衛は藤蔵の前に片膝を突き、痩せた肩に触れた。
「藤蔵さん。橋太郎さんの唯一の友は藤蔵さんだね」
藤蔵は強く頷き、指先で鼻梁に架かる眼鏡を上げた。
「友として、藤蔵さんが橋太郎さんに言ってくれるかい。お歌姉さんを守って、長い間預かってくれてありがとうって。心からの友として、橋太郎さんがお歌姉さんを連れて下りておいでと、説得するんだ。できるね」
「藤蔵……」
清蔵がかすれた声をもらした。
「先生、わたしが話します。わたしが話せば、橋太郎さんはきっと姉さんを戻してくれます」
そうだ、藤蔵さんならできる——市兵衛は思わず藤蔵の肩を強くつかんだ。
提灯が照らす中を藤蔵は階段下へいき、天井を見上げた。

黒ずんだ踏み板に手をかけ、一段一段踏みしめ上っていった。
市兵衛は階段の下に立ち、藤蔵を見守った。
誰も声をもらさなかった。
藤蔵が階段を上り切り、天井を四角く抜いた入り口の板戸を叩いた。
とんとん……とんとん……
「橋太郎さん、わたしです。藤蔵です。橋太郎さん」
屋根裏部屋は物音ひとつしなかった。
「橋太郎さん、お歌姉さんを守ってくれて、どうもありがとう。ひどいことをするやつは、もうみんないなくなりました。お歌姉さんがうちへ戻っても、平気になりました。長い間、姉さんを預かってくれてありがとう」
張りつめた沈黙が土蔵を覆っていた。
震える吐息が聞こえた。やがて、
「藤蔵さんかい」
と、橋太郎の野太い声でも童子のような語調がみなに聞こえた。
「そうです。藤蔵です」
「藤蔵さん、ひとりかい」

「わたしのお父っつあんとおっ母さんも一緒です。みんなでお歌姉さんを迎えにきたんです。橋太郎さんのお父っつあんとおっ母さんもきています」
「ええ？　おとんとおかんがいるのかい。いやだな」
「いいじゃありませんか。みんな、お歌姉さんの元気な顔が早く見たいんです」
「大丈夫さ。お歌さんは元気だよ。おらがちゃんと守ってあげたから、寒くなっても春のときと同じように綺麗だよ」
　清蔵の、稲の頬に、はらはらと涙がこぼれた。
「じゃあここを開けてください。わたしを入れてください」
「下で待っていてくれ。おらがお歌さんを下ろしてあげる」
　篠崎の女房が、「橋太郎っ」と震えつつも語気を強めた。
　市兵衛は女房を制するように、両手で押さえる仕種をした。
　稲は頬を伝わる涙を拭いもせず、屋根裏部屋の入り口を見上げている。
　やがて、かたん、と閂のはずれる音がして、板戸が一尺（約三十センチ）ほど持ち上げられた。
　頬に肉の付いた橋太郎の赤ら顔がのぞいた。
「やあ、藤蔵さん。へえ、沢山人がいるんだな」

「みんなでお歌姉さんを迎えにきたんですよ」
橋太郎は階段の下の市兵衛を見付け、味噌っ歯を見せた。
「お侍さん、藤蔵さんの勉強の先生だね。おら知ってる。お歌さんがとても立派な先生だって、言ってた」
「そうか。わたしも橋太郎さんのことは藤蔵さんから聞いて知っているよ。虫たちのことをなんでも知っているのだろう。今度、教えてくれるかい」
「いいよ。なんでも教えてやるよ。藤蔵さんの勉強の先生だし、お歌さんの大好きな先生だから、おら、謝礼はいらないよ」
「じゃあ、橋太郎さん、お歌姉さんを下ろしておくれ」
「うん、わかった。待っていてくれ」
藤蔵が言い、橋太郎が板戸を軋ませ開いた。
天井に四角い穴がぽっかりと開いた。穴の中は明るく、屋根裏の太い梁（はり）が見えた。
橋太郎が消え、天井を踏む軋みがした。
ほどなく、歌を両腕に抱き上げた大男の橋太郎が入り口に立った。
「はあ……お歌、お歌」
稲が後ろでか細く呼んだ。

藤蔵が階段を下るのに従い、歌を軽々と抱えた橋太郎が急な板階段を事もなげに下りてくる。細縞の着物の裾から出た太い足が、ひと足ごとに踏み板を撓ませた。踏み板が苦しげに喘いでいるみたいだった。

歌は橋太郎の両腕の中で、幼い童女のように橋太郎の大きな両肩へ手をかけ、身を縮めていた。白い頬を朱に染め、なす術なく橋太郎の腕の中に横たわっていた。窶れてはいた。けれど、半月に亘って閉じこめられていたにもかかわらず、着物に汚れも乱れもなく、島田の髪も艶やかだった。

春のときと同じように、と橋太郎が言った通り、歌は橋太郎の屋根裏部屋で美しく儚い蝶のままだったのだろう。

市兵衛は階段を下りた藤蔵の肩に手をかけ、

「よくやった、藤蔵さん」

と言った。

藤蔵は橋太郎と歌を見上げつつ、「うん」と頷いた。

大男の橋太郎は階段を下り、涙を伝わらす稲と目を真っ赤にしている清蔵の前へ、にこやかに歌を運んだ。

「お歌さんは、元気だよ」

橋太郎が言い、清蔵は「うんうん……ありがとう」と、涙声で応えた。
歌をそっと下ろし、
「お歌さん、またな」
と離した。
「おっ母さん……」
「お歌、お歌……」
母と娘が抱き合い、歌の咽び哭きが土蔵に響いた。
「よかった。無事でよかった」
清蔵が抱き合う二人を両腕で覆った。
「お父っつあん、心配かけてご免……」
「いいんだ、いいんだ。おまえが無事なら、それでいいんだ」
篠崎の女房の嗚咽が交じった。
藤蔵は橋太郎に遠慮してか、三人の中に入るのを我慢している。
すると歌が藤蔵の前にきて跪き、抱き締めた。
「藤蔵、おまえは賢い子だねえ。姉さんの自慢の弟だよ」
それから藤蔵を抱きしめたまま隣の市兵衛を見上げ、

「先生、ありがとう」
と、涙に濡れた顔を明るく微笑ませた。
「よ、橋太郎。ご苦労だったな。ちょいとおめえに話が訊きてえんだ。そこの番所まできてくれるかい」
渋井が橋太郎の傍らへ近寄り、助弥が反対側に立った。
橋太郎はひょろりと背の高い助弥よりまだ大きく、太っていた。
にこやかな橋太郎の顔が険しくなった。
「あんた誰だ。おら、あんたを知らねえ。番所へなんぞいかねえ」
「まあまあ、そう言わずによ。おじさんもいろいろ、おめえの話を聞かせてほしいんだよ。な、いいだろう」
「いやだ。おら、あんたに話すことはねえ。番所は嫌いだ」
自身番の三人が提灯をかざして橋太郎を取り囲んだ。
「橋太郎、くるんだ。言うことを聞きな」
店番のひとりが橋太郎の腕を取った。
「いかねえっ」
腕をひと振りして、店番を跳ね飛ばした。

「わあ」
店番は叫び声を上げて転倒した。
「大人しくしろ」
肩を押さえた助弥は、壁際の粉袋までひと突きだった。
渋井へも太い腕を突き出したが、渋井は「おっとっと」と身をよじって、強烈な突きから免れた。
押さえようとする自身番の当番らへ橋太郎は腕を振り廻し、「いやだ。いかねえ」と喚いた。
「は、橋太郎、大人しくして」
篠崎の女房が叫び、亭主が「いい加減にしろ」と、橋太郎にしがみ付いた。
「いやだ、おかん、おらいやだ。おとん、離せ」
痩せた亭主は、暴れる橋太郎にしがみ付いて振り廻された。
当番らは危なくて近寄れない。
そんな橋太郎の前に歌が、すっと向き合った。
「橋太郎さん、乱暴はいけないよ」
歌の言葉に、橋太郎の動きが止まった。

橋太郎は照れ臭げに表情を歪めた。
「誰も橋太郎さんをいじめはしないよ。番所へいって、この人たちにわたしをどうやって守ってくれたか、ありのままに話したらいいんだ。橋太郎さんがいい子だって、わたしは知っている。みんなだって、知っているよ。いい子にして、本当のことを話してきておくれ」
藤蔵が歌に並んで言った。
「橋太郎さん、わたしも知っています。橋太郎さんはわたしの友だちだもの」
「そうだ。おら、藤蔵さんの友だちだ。お歌さんがそう言うなら、話してきてやってもいいよ。いやだけど、我慢するよ」
橋太郎の顔の険しさが影を潜め、童子の面影が浮かんだ。
渋井が渋面をゆるませ、おどけた仕種をして近付いた。
「橋太郎、じゃあいいかい。おじさんと、いってくれるかい」
「うん……」
橋太郎は大きな背中を丸めて、とぼとぼと戸口へ向かった。
渋井は市兵衛へ眼差しを向け、やれやれ、という顔付きをした。
篠崎の女房のすすり泣きが聞こえる。

亭主は階段の踏み板にかけ、肩を落としうな垂れた。
助弥と当番らが、恐る恐る橋太郎を囲んだ。
「これで、一件落着だな」
宗秀が市兵衛に並びかけ、溜息雑じりに言った。
「はい。すべてはいつか、終わります」
市兵衛は橋太郎の背中を見送りつつ、ぽつりと答えた。

終　章　無性の生

一

九月下旬のその朝、市兵衛と弥陀ノ介の乗った茶船が江戸川をさかのぼっていた。
その日もよく晴れた、晩秋の空だった。
風はなく、江戸川端の木々の色褪せた枝葉はそよがず、ただ川面に移ろいゆくときを映していた。
船頭の漕ぐ櫓の軋みが、静かな川筋を物憂げに騒がせていた。
右手の北の方に小日向の高台、左の南の方角には牛込の高台が続き、静かな武家屋敷地が連なっている。
弥陀ノ介は茶の小袖に黒袴で、小人目付の黒羽織は羽織っていなかった。

舳の板子に胡坐をかき、長刀を肩に担いで川縁の風景へ目を遊ばせている。胴船梁にかけた市兵衛は、着古した紺木綿の上着に、それも穿き古した細縞の小倉袴だった。着古してはいても、着こなしは凛としていた。

弥陀ノ介は江戸川堤へゆるい眼差しを投げ、胴船梁の市兵衛へぼそと言った。

「では、清蔵一家が町奉行所へ嘆願書を出したのか。橋太郎の裁きに寛大な処置を求めてだな」

「九丁目と櫻木町の住人にも働きかけて、町内一同の訴えとして嘆願書を出したそうだ。渋井さんの話では、橋太郎は牢屋敷に入れられずに町内預かりになるだろう、ということだった」

市兵衛は弥陀ノ介の横顔へ答えた。

「町内預かりな。そこでお裁きを待つわけだな。どんな裁きになりそうだ」

「江戸所払いになるかもしれないと、渋井さんは言っていた」

「所払いか。篠崎はどうなる」

「江戸へ残ることが許されても、橋太郎が江戸を追放されれば、一人では生きていけぬ。両親も篠崎を畳んで江戸を出ざるを得ぬだろう」

「やむを得ぬな。悪意はなかったとはいえ、罪なき者を苦しめた」

「そうかもしれぬ。だが、橋太郎をお定め通り罰したとて、世のためにも人のためにも、誰のためにもならぬ。お歌さんと清蔵一家は、橋太郎を少しも恨んでいない」

「おぬしの大切な者がそんな目に遭ったらどう思う。罪は罪だぞ」

そうだ。罪に苦しめられた人がいる。

市兵衛は考えた。

「大清楼が打ち壊しに遭ったあの夜、橋太郎は土蔵の屋根裏部屋からその有りさまをつぶさに見ていた。お歌さんが裏通りから何人かの女を逃がすのが見えた。また家へ戻ろうとしたとき、裏通りから吉原の男衆が襲ってきた。お歌さんは咄嗟に縁の下へ隠れた。打ち壊しの男たちが大清楼の中で暴れるのをお歌さんは裏庭で、なす術もなく呆然と見ていた。橋太郎は悪いやつらからお歌さんを守り、匿わなければと思った」

弥陀ノ介は黙って聞いていた。

だが橋太郎は、歌を救うところを男らに見られたら歌を奪いかえされてしまう、歌を奪われないために、自分が歌を奪い守ってやるのだ、と思ったのだろう。

橋太郎は土蔵の空の畚を持って裏通りを大清楼へ裸足のまま走った。

裏庭に歌が呆然と立ち尽くしている。

橋太郎は歌が吃驚して夜空へ飛び立たないように、忍び寄った。
そして畚に歌をすっぽりと包み、軽々と肩に担いで土蔵へ戻った。
橋太郎が畚を担いで西裏通りを走る姿を見た者はいたかもしれなかったが、それが歌だとはだれも思わなかっただろう。
あの夜、助けを呼ぶ声は、あちこちから聞こえる女たちの悲鳴や打ち壊しの大騒ぎにまぎれてしまった。
橋太郎は歌を屋根裏部屋に囲った。
明かり取りの窓に錠をかけ、窓から鳥たちにも見付からぬように用心して、美しい蝶を解き放った。
そうして蝶には一切触れず、それをただ眺めて暮らした。
歌はさぞかし怖かっただろう。辛く苦しかっただろう。
しかし橋太郎には至福のときだった。
歌の汚れ物はすべて橋太郎が始末した。湯浴みもさせた。歌に言われれば、歌が呼ぶまで、土蔵の階下に身を潜めて待った。
両親に知られぬよう気遣うのは面倒だし難しかったが、歌の美しさを見ればそんな面倒や難しさなど少しも苦にならなかった。

お歌さんには誰にも触れさせねえ。
お歌さんはおらが守ってやる。
橋太郎は歌とともにいられる喜びの中で、そう思っていた。
「橋太郎には歌を帰そうという知恵が廻らなかったのか」
弥陀ノ介は訊いた。
「自分の守ろうとした美しい蝶を、放したくなかっただけかもしれぬ。お歌さんが帰してほしいと頼んだとき、獣のように怒り、怒りを自らの身を苛むことで収めたそうだ。お歌さんは橋太郎が自らを亡き者にしてしまうまで責め苛むと思い、恐ろしくて見ていられなかった」
「お歌は堪らなかっただろう。それでも橋太郎を許すか」
「橋太郎の罪は許されぬ」
市兵衛は答えた。
「しかし弥陀ノ介、おれはこうも思う。ご公儀は罪は罪として曇りなく人を裁いているか。身分のために体面のために罪を問わぬ裁きをおれは幾らも見てきた。人治がご公儀の政のよりどころなら、許される罪人がいてもいい」
弥陀ノ介は太い首を市兵衛へ廻し、意味ありげな笑みを投げた。

「市兵衛らしいことを言うのう。お頭が心配なさるわけだ。だが、その市兵衛らしさがお頭の愛しく思われる所以なのだがな」

弥陀ノ介は頭の信正の様子を思い出したか、川縁の風景を眺めつつ、ふふん、ふふん、と途切れ途切れに笑った。

「お万も多くの人の命を殺めた極悪非道の化け物だが、亭主の止めを自ら刺し、末は獄門台か火あぶりか、それを思うとあれはあれで憐れだ」

「桜井長太夫の処置は？」

と、今度は市兵衛が訊きかえした。

「結果として菊の助一味に手を貸したことになるのだ。切腹は免れぬだろう。今取り沙汰されているのは、由緒ある桜井家が残るかどうかだ」

市兵衛と弥陀ノ介の言葉が、そこで途絶えた。

櫓の音が軋り、牛込の高台の木々より鳥のさえずりが江戸川にまで聞こえてきた。川筋は静かだった。

折りしも、江戸川上流より紅梅の綿入に箔の白の幸菱の小袖、白の打掛をきらびやかに着した島田の花嫁と、裃や黒留袖の男女を乗せた川船が、市兵衛と弥陀ノ介の船といき違った。

婚礼道具を積んだ船が花嫁の船に続いてゆきすぎてゆく。
市兵衛は輿入れの船をじっと見送った。
遠からず歌は、麹町の商家へ嫁ぐことが決まった、とあれから市兵衛は聞いた。
輿入れの船から顔を戻すと、弥陀ノ介と目が合った。
弥陀ノ介も船を見送っていたのだ。
「弥陀ノ介。正しいか正しくないかで決められぬことも人の世にはあると、おれはそう言いたいのだ」
市兵衛は言った。
「そうかもな……」
市兵衛より目をそらし、弥陀ノ介が言った。
江戸川橋の河岸場で、二人は船を降りた。
弥陀ノ介は長刀を肩に担いだ形で、片方の手を入れた袖をなびかせた。
神田上水の九丁目橋を渡り、目白坂下の辻で、西裏通り角の篠崎を見やった。
篠崎は板戸を閉ざし、暖簾も幟も出ていなかった。
音羽の御成道を護国寺へ取った。
朝の五ツ（午前八時）すぎ、江戸からの参詣客はまだちらほらで、大通りには表店

の商人や手代奉公人がゆき交い、両天秤の行商の方が目立っていた。
九丁目と八丁目の境の横町の辻より大清楼の方を見やると、建て直しに大工が入って木組みが見えた。
警動に遭った廓は家財家屋取り上げだが、大清楼にその処罰はくだらなかった。
清蔵の一家は大清楼の修築が終わるまで大塚町の裏店に住んでいる。藤蔵は少し遠くなったけれど、毎日元気に光成館へ通っている、とも聞いている。
御成道のはるか前方に、護国寺の甍が朝日に照り映えていた。
市兵衛と弥陀ノ介は、もう何も語らずゆるやかに歩んだ。
御成道は音羽町一丁目から門前の東西青柳町の間を通り、仁王門につながっている。
やがて仁王門が、市兵衛と弥陀ノ介の前に大きくそびえ立った。
弥陀ノ介が阿形と吽形の仁王像が守る仁王門の扁額を見上げ、
「いくか、市兵衛」
と問い、
「今なすべきことをなすのだ。特別なことではない」
と、市兵衛は答えた。

二人は仁王門をくぐり、長い参道をまっすぐに進んだ。山門への石段を上るとき、周りの木々の梢でつぐみがさえずっていた。

石段を上って山門を通り抜け、さらに石畳を進み数段の石段を上ると、朝日に本瓦の緑が鮮やかに照り映える本殿が、石畳の先に現われた。

参詣の客が広い境内にちらほらと見える。

二人が上った石段と本殿までの長い石畳の中ほどに、墨染めの僧衣を纏った僧が佇んでいた。

中背の痩せた年若い僧だった。

片手に数珠を持ち、片手をさりげなく膝へあてがっていた。

しかし僧は、本殿へ歩む市兵衛と弥陀ノ介へ交互に目を向け、二人から一度もそらさなかった。

痩せた頬が、気恥ずかしげに赤らんでいた。

三間ほどまできたとき、僧はゆっくりと頭を垂れた。

市兵衛と弥陀ノ介は歩みを止めた。

「お待ちいたしておりました。唐木市兵衛さまでございますね」

僧が市兵衛に言った。

はい――と、市兵衛は微笑んだ。
「わたくしは当護国寺にて真言の教えを学んでおります昭光でございます。奈良宝蔵院の真達さまご逗留の身の廻りのご用を仰せつかっております。真達さまが唐木さまをお待ちでございます。ご案内、いたします」
昭光はかすかな笑みを浮かべ、弥陀ノ介へ目を転じた。
「この者は返弥陀ノ介。本日のわが方の見届け人として、同道を頼みました」
昭光は弥陀ノ介へ黙礼した。
「こちらへ」
と、僧衣の袖をひらめかせ、二人の先へ立った。
本堂への石畳が途中から鐘楼の方へ折れていた。
昭光は鐘楼への石畳をたどった。しかし鐘楼をすぎ、白壁の土塀に囲われた広い墓地の門をくぐった。
墓石の間を抜け広い墓地の一角までくると、白壁に潜戸があった。
昭光は潜戸をくぐり、そのまま黙々と二人の前をすすんでゆく。
青空高く、薄い雲がたなびいていた。
細い道が雑木林の中を通っていた。

雑木林には小鳥がのどかにさえずり、木々を通して坂の下に僧房の屋根や数軒が固まった百姓家が見下ろせた。

雑木林の中の道は護国寺本堂の裏手へ廻るように続いていた。

枯葉を踏む昭光の足音が静かだった。

やがて小道の周りは竹林になった。

竹林の向こうに丘陵地が見え、丘陵地の下に田畑と雑木林の野が広がっていた。

二

そこは竹林と灌木に囲われ、やわらかな枯葉に覆われた小広い空き地だった。

東の坂下に、北の池袋村へゆるやかに上る畦道が見下ろせた。

昭光は歩みを止め、振りかえった。

「こちらにて、お支度をしてお待ちください。真達さまをお呼びいたします」

昭光は一礼し、竹林奥の小道へ消えた。

竹林の向こうに、趣のある亭の茅葺屋根が見えた。

雀が賑やかに林の中を飛び舞っていた。

市兵衛は懐より、昨夜藁で編んだ藁縄を出して襷にかけ、藁縄の鉢巻きを結んだ。

「それでいいのか」

弥陀ノ介が言った。

「これでいいのだ」

市兵衛は袴の股立ちを高く取った。

足元は黒足袋に草鞋である。

腰に差した祖父譲りの無銘の一刀の鯉口を切り、さらりと半ばまで抜いた。

刃が朝の木漏れ日に光った。

だが市兵衛は一刀を抜かず、黒鞘に納めた。

肩を軽く廻し、首筋をほぐす。

目を閉じ、澄んだ周囲の気を吸い、それを長くゆっくりと吐いた。

「ふん。われらをここに待たせ、焦らす気かな」

弥陀ノ介が言った。

弥陀ノ介は長刀を腰に戻し、両腕を組んで足元の枯草を草履で払った。

「待たすのは、待たされるより気が急くものだよ。ゆっくりきたらいい」

と、竹林で舞う雀の群れが、ざざざ、と一方へ飛んでゆく。
小道から昭光が戻ってきた。
「お待たせいたしました。真達さまがお見えです」
礼をして言った。
赤らんだ顔から血の気が退いていた。
竹林の間に痩軀の影が、ゆるやかな大股を運んでいるのを認めた。
やがて、僧が見えた。
白衣に墨染めの僧衣を纏い、切袴を白い脚絆で絞っている。
素足に草鞋だった。
剃髪の頭は薄青く光っていた。
その薄青い光の下に、美しいひと筋の疵痕が走っていた。
手には二間以上はある樫の杖を携えていた。
鍛え上げ頬のこけた顔面は日に焼け、目尻の切れ上がった鋭い眼差しには、しかし静かな光を湛えていた。
二十年のときを越えてこの男はきたのだな、と市兵衛は思った。
この男の二十年は、そして自分の二十年はなんだったのか、と考えた。

六尺はある真達が数歩進んで止まり、言った。
「市兵衛、若き日は儚くすぎた。ようきてくれた。会いたかった」
「お懐かしい。二十年ですね」
市兵衛は動かず、言った。
「ですが真達さん、われらが、こういう会い方をする謂れはないのではありませんか」
「……無性の身に堕した市兵衛と、ほかにどんな会い方があるのや」
「無性の者にも無性に生きる謂れ因縁があります。僧房の中の実践修行だけでは、見えぬこと、気付かぬことがあります。あなたとはほかの会い方をしたかった」
真達は黙っていた。それから弥陀ノ介へ向いた。
「見届けに、こられたんか」
「返弥陀ノ介でござる。以前、一度お会いしましたな。その長い杖を見覚えておる」
「わたしもあなたの風貌を覚えてます。お役人かと思うたが」
「小人目付役に就いておる。しかし今日は、市兵衛の友として見届けにまいった」
「結構。この場で何が起こるか、よう見ていってくだされ。わたしがここまでくるのに、二十年のときがかかりましたのや」

真達は、指先を額の疵へさりげなく当てた。
そして小道に佇む昭光へ目配せした。
昭光が近寄り、真達が墨染めの僧衣を脱ぐのを手伝った。
僧衣の下は、白衣の袖を白い襷で絞っていた。
緑の竹林と朝の木漏れ日が、真達の白装束を貴やかに彩った。
「市兵衛、支度はええのやな」
市兵衛は頷いた。
「ほんなら、いざ」
昭光が真達の墨染めの衣を抱え、小道へさがった。
真達は二間の杖を頭上で悠々と数回廻した。
それから両手で杖を市兵衛に向けて構え、ぶん、とひと突きした。
すると、杖の先の樫がからんと抜け、四寸ほどの穂先が顕われた。
穂先が白く光った。
「おお……」
小道で見守る昭光が声をこぼした。
「この槍は、春日山のご神木で拵えた。市兵衛と決着を付けるためにな」

「なんのための、どなたのための決着ですか」
真達は槍を構えた。
「なんのために？　わたしは心から市兵衛を許したいのや。御仏の教えに従い、市兵衛を救うたらなあかんと、思うたのや」
三乗真実一乗方便（さんじょうしんじついちじょうほうべん）……
真達が唱（とな）えた。
市兵衛はゆるやかに佇み、まだ身構えもしなかった。
「弥陀ノ介、終わったら一杯やろう」
市兵衛が言い、
「いいとも」
と、弥陀ノ介が答えた。
雀が、ざざざ、と竹林を飛び交っていた。
鳴き声が騒がしかった。
「市兵衛、刀を抜け」
真達がその機を待ちながら言った。
しかし市兵衛は静寂の中に止まっていた。

枯草が真達の踏み締める草鞋の下で、じり、とかすかに鳴った。
市兵衛はまるで存在が消えてしまうかのように、のどかに佇んだままである。
「それでええのか」
「十分です、真達さん。飢えた者の耕した米を喰らい、死にゆく者が紡いだ衣を纏い、陋屋に住む者らが造る仏殿で祈られるがよい」
「無性の者。それしきの理で御仏の教えを知ったつもりか。《風の剣》など阿呆らしい」
「二十年、風の剣の夢を見てこられたのですか」
「虚しいと悟った。それが救いや」

それから二人は動かなかった。
長いときがすぎた。いや、それはただ、長いときがすぎた、と昭光には思えただけかもしれない。
そのとき、突然、竹林で雀が騒ぎ、風がうなり、木々が激しくゆれ始めた。
見上げる青空に雲が激しく流れていた。
そんな馬鹿な。

昭光は呆然と周囲の光景を見渡した。
まるで己の身が、すぎた長いときをへて、見知らぬ世へ転生したかに覚えた。
それは昭光が誘われたときの切れ目に思われた。
昭光は戦慄し、それから二人を見た。
「風の剣など、ありません」
市兵衛という侍が言うのを昭光が聞いた刹那、真達が進み、市兵衛が歩んだのが見えた。
七間はあった両者の間は五間に縮まり、そうして四間、三間になってゆく。
二人の間が二間を切ったときだった。
昭光の視界より真達の身体がかき消えた。
昭光にはかき消えた、とそう見えた。
真達の声が竹林の彼方へ谺した。
だがそこで昭光が見たのは、刹那に肉薄した真達の槍が市兵衛の胸を貫いた瞬間の光景だった。
昭光にはそう見えたのだ。
瞬時、市兵衛の抜刀した白刃が胸を貫いたはずの真達の槍をはじき上げていた。

鋼（はがね）と鋼の触れる音が、風の吹きすさぶ大空へ響き渡った。
真達の槍がうなりを上げて旋回した。
枯葉が二人の周りを渦巻いた。
三乗真実一乗方便……
「寺へ」
吹きすさぶ風の中で、昭光は声を聞いた。
あれは風の声だったのか。
それとも御仏の声だったのか。

「寺へ……」
真達は御仏の声を聞いた。
頭上に旋回する槍が枯葉を巻き、風を呼び、渦巻く雲を呼んだ。
真達の心底より、たぎるものがあふれ出ようとしていた。
おお……
御仏がわたしに望んでおられる。ただ、なせ、と……
真達は求められてある歓喜に恍惚（こうこつ）となった。

ほぼ同時に、真達と市兵衛が空へ高々と翻った。
竹林がゆらめき、雲が流れた。雀がざわめき、飛んでいく。

昭光の見上げる空で二人が交錯した。
ひとつになって縺れた。
昭光は市兵衛の飛翔に心奪われていた。
風の剣だ……と、昭光は思った。
からあん……
槍と刀が澄んだ響きを竹林に奏でた。
それから二つの身体は離れた。
市兵衛が真達の後方へ、ふわりと下り立った。
くるりと反転した。
そして、真達へ八相に構えた。
しかし、地に下りた真達は片膝を突き、動かなかった。
市兵衛の八相に背を向けたままだった。
「真達さま……」

昭光は思わず半歩踏み出した。だがそこで言葉を飲んだ。
なぜというに、昭光は踏み出した先に骸を見たと思ったからだ。
昭光の足がすくんだ。
真達は骸のように動かなかった。
骸のように……
やがて長いときが流れ、真達がゆっくり立ち上がるのが見えた。
市兵衛へ向き直り、二つになった神木の槍を両脇へ垂らした。
真達の目には敵意ではなく、蔑みでも憐みでも憎しみでもなく、二十年の歳月の虚しさが湛えられていた。

真達はその虚しさを悲しいと思った。
竹林の雀がのどかに鳴きざわめき、晩秋の穏やかな朝の日が差す中に佇む自分を、悲しいと思った。
真達は、自分が二十年のときをへて相まみえたのが市兵衛だったのか、それとも御仏だったのか、わからなかった。
自分は、市兵衛の風の剣に敗れたのか、それとも御仏の御心に敗れたのか、わから

なかった。

わかるのは、この束の間のときに打ち摧かれ朽ち果ててゆく二十年の重たさだった。

たぎる思いが、灰色の地の底に澱んで、早くも朽ち始めた悪臭だった。

なぜだ。わたしは御仏に選ばれ、御仏におすがりし、御心のままに今ここにあるのではなかったか。

それが誤りならば、なぜ止めてくださらなかったのですか。

わたしではなく、御仏に選ばれた者が〝風の市兵衛〟だったのならば、なぜそうと、御言葉を与えてくださらなかったのですか。

むごい。あまりにもむごい。

真達の相貌は急速に衰え、疲労と懈怠が浮かび、深い皺が刻まれた。

あの美しい疵痕は、醜く盛り上がり、歪んでいた。

そのとき、真達の額からひと筋の血が薄っすらと浮き上がった。

二つになった神木の木切れが、真達の手から枯草の中へこぼれ落ちた。

市兵衛が八相を解いた。

「帰れ」
昭光はうなる風の中で、御仏の声を聞いた。

一〇〇字書評

切り取り線

購買動機（新聞、雑誌名を記入するか、あるいは○をつけてください）

□（	）の広告を見て
□（	）の書評を見て
□ 知人のすすめで	□ タイトルに惹かれて
□ カバーが良かったから	□ 内容が面白そうだから
□ 好きな作家だから	□ 好きな分野の本だから

・最近、最も感銘を受けた作品名をお書き下さい

・あなたのお好きな作家名をお書き下さい

・その他、ご要望がありましたらお書き下さい

住所	〒				
氏名		職業		年齢	
Eメール	※携帯には配信できません			新刊情報等のメール配信を希望する・しない	

この本の感想を、編集部までお寄せいただけたらありがたく存じます。今後の企画の参考にさせていただきます。Eメールでも結構です。

いただいた「一〇〇字書評」は、新聞・雑誌等に紹介させていただくことがあります。その場合はお礼として特製図書カードを差し上げます。

前ページの原稿用紙に書評をお書きの上、切り取り、左記までお送り下さい。宛先の住所は不要です。

なお、ご記入いただいたお名前、ご住所等は、書評紹介の事前了解、謝礼のお届けのためだけに利用し、そのほかの目的のために利用することはありません。

〒一〇一－八七〇一
祥伝社文庫編集長　坂口芳和
電話　〇三（三二六五）二〇八〇

祥伝社ホームページの「ブックレビュー」からも、書き込めます。

http://www.shodensha.co.jp/bookreview/



祥伝社文庫

風立ちぬ（下）　風の市兵衛

平成24年5月20日　初版第1刷発行
平成24年6月6日　第2刷発行

著者　辻堂魁
発行者　竹内和芳
発行所　祥伝社
東京都千代田区神田神保町3-3
〒101-8701
電話　03（3265）2081（販売部）
電話　03（3265）2080（編集部）
電話　03（3265）3622（業務部）
http://www.shodensha.co.jp/

印刷所　堀内印刷
製本所　ナショナル製本
カバーフォーマットデザイン　中原達治

本書の無断複写は著作権法上での例外を除き禁じられています。また、代行業者など購入者以外の第三者による電子データ化及び電子書籍化は、たとえ個人や家庭内での利用でも著作権法違反です。
造本には十分注意しておりますが、万一、落丁・乱丁などの不良品がありましたら、「業務部」あてにお送り下さい。送料小社負担にてお取り替えいたします。ただし、古書店で購入されたものについてはお取り替え出来ません。

Printed in Japan ©2012, Kai Tsujidou ISBN978-4-396-33761-2 C0193

祥伝社文庫の好評既刊

辻堂　魁

風の市兵衛

さすらいの渡り用人、唐木市兵衛。心中事件に隠されていた奸計とは？〝風の剣〟を振るう市兵衛に瞠目！

辻堂　魁

雷神　風の市兵衛②

豪商と名門大名の陰謀で、窮地に陥った内藤新宿の老舗。そこに現れたのは〝算盤侍〟の唐木市兵衛だった。

辻堂　魁

帰り船　風の市兵衛③

またたく間に第三弾！「深い読み心地をあたえてくれる絆のドラマ」と小椋治宣氏絶賛の〝算盤侍〟の活躍譚！

辻堂　魁

月夜行　風の市兵衛④

狙われた姫君を護れ！　潜伏先の等々力・満願寺に殺到する刺客たち。市兵衛は、風の剣を振るい敵を蹴散らす！

辻堂　魁

天空の鷹　風の市兵衛⑤

まさに時代が求めたヒーローと、末國善己氏も絶賛！　息子を奪われた老侍とともに市兵衛が戦いを挑むのは!?

門田泰明

討ちて候（上）　ぜえろく武士道覚書

幕府激震の大江戸――孤高の剣が、舞う、踊る、唸る！　武士道『真理』を描く決定版ここに。

祥伝社文庫の好評既刊

門田泰明　**討ちて候（下）**　ぜえろく武士道覚書

悽愴苛烈の政宗剣法。待ち構える謎の凄腕集団。慟哭の物語圧巻!!

門田泰明　**秘剣　双ツ竜**　浮世絵宗次日月抄

天下一の浮世絵師宗次颯爽登場！悲恋の姫君に迫る謎の「青忍び」炸裂する！　怒濤の「撃滅」剣法

野口　卓　**軍鶏侍**

闘鶏の美しさに魅入られた隠居剣士が、藩の政争に巻き込まれる。流麗な筆致で武士の哀切を描く。

野口　卓　**獺祭**　軍鶏侍②

細谷正充氏、驚嘆！　侍として峻烈に生き、剣の師として弟子たちの成長に悩み、温かく見守る姿を描いた傑作。

野口　卓　**猫の椀**

縄田一男氏賞賛。「短編作家・野口卓の腕前もまた、嬉しくなるほど極上なのだ」江戸に生きる人々を温かく描く短編集。

森村誠一　**刺客長屋**

最強の忍者軍団から悲劇の姫を守れ！貧乏長屋を砦に百万石の大名さえ敵に回す、驚異のアンチヒーロー誕生！

祥伝社文庫　今月の最新刊

笹本稜平
未踏峰

これを読め！
書評家 宇田川拓也氏、感動に吼える！
「魂の〝青さ〟をくすませるすべてのものへ叩きつけた渾身の挑戦状」
圧巻の山岳シーンと、骨太の人間ドラマ。
魂をすすぐ山岳巨編

辻堂 魁
風立ちぬ
上 下

累計30万部突破！
時代小説・風の市兵衛シリーズ最新刊
〝家庭教師〟として雇われた市兵衛の周りに現れる殺気を纏う托鉢僧、謎の祈禱師集団。江戸の町を地獄に変える夜が始まろうとしていた……市兵衛の過去も明かされる、最大の構想で贈るシリーズ最高傑作！
〈好評既刊〉
①風の市兵衛 ②雷神 ③帰り船 ④月夜行 ⑤天空の鷹

9784396337612

1920193005714

ISBN978-4-396-33761-2
C0193 ¥571E

定価：本体571円＋税

風の市兵衛⑦

旗本・桜井長太夫の芸者・歌への執着を利用して音羽の花街を取り締まらせ、同時に付け火で町方を混乱させた祈禱師盗賊団の金座襲撃は成功した。その夜歌が失踪、市兵衛は捜索に乗り出し、面目を失った奉行所も一味捕縛へ躍起に。最中、市兵衛に迫る托鉢僧が剣の兄弟子・真達で、目的が市兵衛誅殺と判明するが…。市兵衛の過去も明らかになる、シリーズ最高傑作！

祥伝社文庫